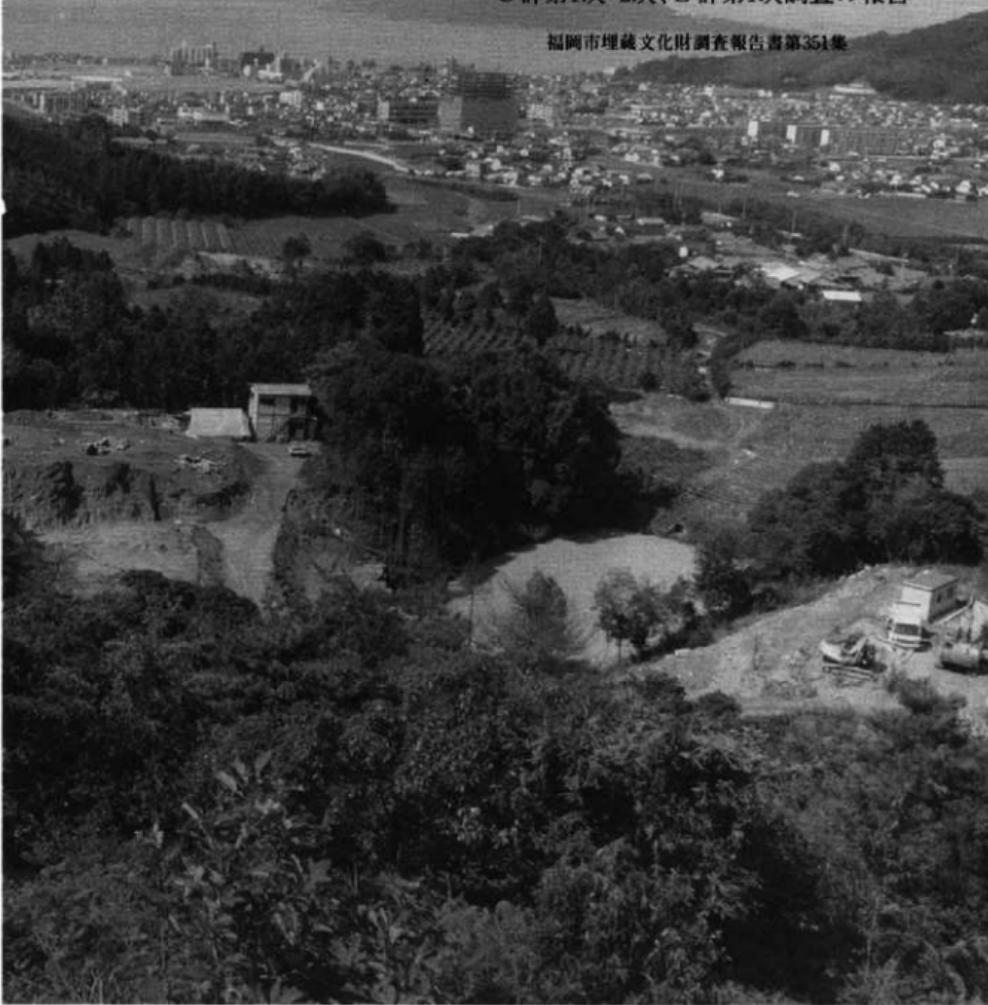


a i baru
相原古墳群2

—C群第1次・2次、E群第1次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第351集



1993

福岡市教育委員会

相原古墳群2

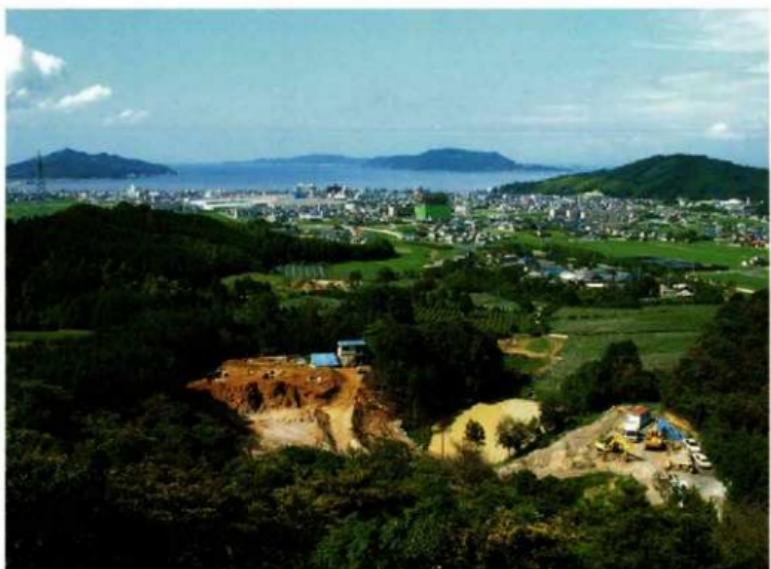
—C群第1次・2次、E群第1次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第351集



1993年

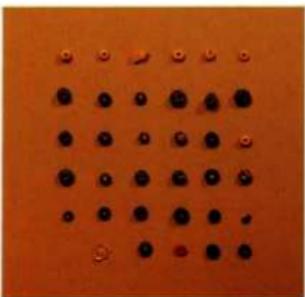
福岡市教育委員会



1. 相原C群・E群・今宿平野を臨む（南から）



2. C群第6号墳（上）・21号墳（下）
出土耳環



3. C群第12号墳出土小玉

序

本市の西郊に位置する今宿・周船寺地区の南部一帯の丘陵部は国指定史跡である丸辰山古墳、今宿大塚古墳を始めとして、多数の前方後円墳や古墳時代後期群集墳が分布している地域として著名であります。

今回、発掘調査の対象となった相原古墳群は民間の土砂採取に伴うもので、福岡市教育委員会が調査主体となって国庫補助を受けて調査を実施いたしました。

調査の結果、この地区的古墳時代後期における古墳の形成過程や当時の墓制の形式、さらには生活様式の一端を知るうえで貴重な成果を得ることができました。

本書が、郷土の文化財の保護の一助として、また古代史研究の一手法かりともなれば、誠に幸いかと存じます。

調査にあたりまして地元関係者、酷暑の時期にもかかわらず調査作業を遂行されました作業員の皆様のご協力に対して厚く謝意を表します。

平成5年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 井口雄哉

例 言

- 1、本書は平成元年度～3年度にかけて、福岡市教育委員会が調査主体となり調査を実施した相原古墳群C群第1次、第2次、E群第1次の調査報告書である。
- 2、各年度の調査はいずれも民間の土砂採取に先行して、緊急発掘調査を実施したものであり、調査の実施にあたっては国庫補助を受けた。
- 3、本報告書名は、「相原古墳群2-C群第1次・2次、E群第1次調査の報告」としたがこれは柳沢一男編「相原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集 福岡市教育委員会1974に続くものである。
- 4、本書に使用した地図は、Fig.1に国土地理院発行の1/25000の地形図「福岡西部」、「福岡西南部」、「宮浦」、「前原」を、Fig.2に福岡市編集の道路管理図(1/500)を原図として使用した。
- 5、本書に使用した方位はすべて磁北である。真北とは西偏6°40'である。
- 6、古墳番号は、福岡市教育委員会刊行の文化財分布地図「西部Ⅱ」に準じた。
- 7、掲載した遺物には、種類、材質、出土遺構の別を問わず掲載順に通し番号を付した。
- 8、実測図と写真図版中の遺物番号は同一である。
- 9、各古墳の報告執筆分担は下記のとおりである。

相原古墳群C群第1次、6号・21号墳、

菅波正人

第2次、8号・9号・11号・12号・22号墳、1～5号焼土壙 田中壽夫

E群第1次、1号墳・1～2号焼土壙 山崎龍雄

10、本書に収録した遺構の写真・実測図は各古墳の調査担当者が撮影・実測した。

11、遺物実測は宮園登美枝が主として行ない、古川千香子・田中が一部を実測し、製図・トレスは田中が行なった。

12、須恵器觀察表は宮園が作成した。

13、本書の編集・総括は田中と宮園が行なった。報告書作成にあたっては安部国恵、山口英子、山中けい子、桐田八千柔、山元正典、西山めぐみ、小島勇一の補助を受けた。

14、本報告に関わる出土遺物・記録類はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理される。

遺跡番号	遺跡名	遺跡略号	所 在 地	調査面積	調査期間
9021	C群1次	ABK-C-1	西区大字青木上ノ原地内	160m ² (古墳1基)	19900709～900803
9105	C群2次	ABK-C-2	同 上	580m ² (古墳5基)	19910422～910902
8972	E群1次	ABK-E-1	同 上	121m ² (古墳2基)	19009213～900313

本文目次

I.はじめ	1
1.調査に至る経過	1
2.調査の組織	1
II.相原古墳群の位置と歴史的環境	3
1.古墳群の位置	3
2.周辺の遺跡	3
III.調査の記録	6
1.調査の概要	6
2.相原C群・E群の立地と現状	8
(1)相原C群第6号墳	11
(2)第8号墳	17
(3)第9号墳	23
(4)第11号墳	32
(5)第12号墳	39
(6)第21号墳	45
(7)第22号墳	51
(8)焼土塚(第1号～5号)	54
(9)小結	56
3.相原E群	57
(1)第1号墳	57
(2)施土塚(第1号・2号)	65
(3)小結	66
IV.総括	67
1.須恵器について	67
2.石室平面図形について	68
3.古墳の造営期間について	70

挿 図 目 次

	頁
Fig. 1. 相原古墳群C・E群の位置と周辺の遺跡 (1/25000)	5
2. 相原古墳群C・E群の現況地形測量図 (1/600)	折込1
3. 相原古墳群C群の現況地形測量図 (1/300)	7
4. 相原古墳群C群の墳丘遺存状況測量図 (1/200)	9
5. 相原古墳群C群の地山成形状況図 (1/200)	10
6. 第6号墳石室平面及び断面図 (1/60)	12
7. 第6号墳墳丘上層断面図 (1/60)	13
8. 第6号墳出土遺物実測図1 (1/3)	15
9. 第6号墳出土遺物実測図2 (1/3, 1/2)	16
10. 第8号墳石室平面及び断面図 (1/60)	17
11. 第8号墳墳丘上層断面図 (1/60)	折込2
12. 第9号墳墳丘土層断面図 (1/60)	折込2
13. 第8号墳墓道部出土遺物実測図 (1/3)	20
14. 第8号墳墳丘表土出土遺物実測図 (1/3)	21
15. 第8号墳石室床面出土遺物実測図 (1/3)	22
16. 第9号墳石室平面及び断面図 (1/60)	24
17. 第9号墳墳丘第4区供獻土器出土状況図 (1/20)	25
18. 第9号墳石室内出土遺物実測図 (1/3)	26
19. 第9号墳墓道・周溝出土遺物実測図 (1/3)	27
20. 第9号墳墳丘 (1区) 出土遺物実測図 (1/3)	28
21. 第9号墳墳丘 (1区) 出土遺物実測図 (1/3)	29
22. 第9号墳墳丘 (4区) 出土遺物実測図 (1/3)	30
23. 第9号墳墳丘出土遺物実測図 (1/6)	31
24. 第11号墳石室平面及び断面図 (1/60)	33
25. 第11号墳墳丘土層断面図 (1/60)	折込3
26. 第12号墳墳丘土層断面図 (1/60)	折込3
27. 第11号墳墳丘出土遺物実測図 (1/6)	35
28. 第11号墳墳丘 (1・2・3区) 出土遺物実測図 (1/3)	36
29. 第11号墳周溝出土遺物実測図 (1/3)	37
30. 第11号墳周溝出土遺物実測図 (1/3)	38
31. 第12号墳石室平面及び断面図 (1/60)	41
32. 第12号墳石室・墓道・渓門出土遺物実測図 (1/6)	42
33. 第12号墳墳丘出土遺物実測図 (1/3)	43
34. 第12号墳周溝・墳丘出土遺物実測図 (1/3)	44
35. 第21号墳石室平面及び断面図 (1/60)	45
36. 第21号墳墳丘土層断面図 (1/60)	46

37. 第21号墳出土遺物実測図1(1/3)	48
38. 第21号墳出土遺物実測図2(耳環・1/2)	49
39. 第21号墳出土遺物実測図3(1/3)	50
40. 第22号墳石室平面及び断面図(1/60)	53
41. 烧土壙(第1~5号)平面及び断面図(1/50)	55
42. 相原古墳群E群第1号墳現況地形測量図(1/200)	57
43. 相原古墳群E群第1号墳墳丘遺存状況測量図(1/150)	58
44. 相原古墳群E群第1号墳地山成形状況図(1/150)	58
45. E群第1号墳石室平面及び断面図(1/60)	折込4
46. E群第1号墳墳丘土層断面図(1/60)	60
47. E群第1号墳玄室内出土遺物実測図(1/3)	62
48. E群第1号墳玄室内出土遺物実測図(1/3)	63
49. E群第1号墳玄室内出土玉類実測図(1/2)	64
50. E群第1号墳玄室内出土鐵器実測図(1/2)	64
51. E群第1号墳羨道・墳丘出土遺物実測図(1/3)	65
52. 烧土壙(第1~2号)平面及び断面図(1/50)	66
53. C群・E群各古墳石室集成図(1/75)	69
54. C群・E群出土須恵器編年図	71
55. C群・E群出土須恵器ヘラ記号集成図	72

図 版 目 次

- PL. 1 (1) 相原古墳群C・E群遠景（南から）
(2) 相原古墳群C群近景（南から）
- 2 (1) 相原古墳群・今宿平野を臨む（南から）
(2) C群第6号・22号墳調査前現況（南から）
(3) C群第9号墳調査前現況（南から）
(4) C群第11号墳調査前現況（南から）
(5) C群第12号墳調査前現況（南から）
(6) C群第21号墳調査前現況（南から）
- 3 (1) C群第6号・22号墳墳丘遺存状況（南から）
(2) C群第6号墳墳丘遺存状況（南から）
(3) C群第6号墳石室遺存状況（北から）
- 4 (1) C群第6号墳石室及び閉塞状況（北から）
(2) C群第6号墳調査部構築状況（南から）
(3) C群第6号墳石室内耳環出土状況（東から）
(4) C群第6号墳調査部須恵器出土状況（東から）
- 5 C群第6号墳出土遺物（1～8・10～13・集合写真）
- 6 (1) C群第8号・9号墳墳丘遺存状況（南西から）
(2) C群第8号墳石室及び閉塞状況（南西から）
(3) C群第8号墳石室完掘状況（北から）
(4) C群第8号墳石室及び地山成形状況（南西から）
- 7 (1) C群第8号墳閉塞状況（北から）
(2) C群第8号墳石室墓壙状況（北から）
(3) C群第8号墳地山成形状況（西から）
(4) C群第8号墳石室内外隅鉄轆・刀子出土状況（南西から）
(5) C群第8号墳石室完掘状況（南から）
- 8 C群第8号墳出土遺物（14～23・集合写真）
- 9 C群第8号墳出土遺物（24～30・35・00027～00044）
- 10 (1) C群第8号・9号墳墳丘遺存状況（南東から）
(2) C群第9号墳石室（南西から）
(3) C群第9号墳墳丘第1区遺物出土状況（南西から）
(4) C群第9号墳石室床面敷石遺存状況（北から）
(5) C群第9号墳石室完掘状況（北東から）
(6) C群第9号墳調査部構築状況（西から）
- 11 (1) C群第9号墳石室墓壙及び前庭部地山成形状況・墳丘祭祀状況（南西から）
(2) C群第9号墳石室墓壙及び地山成形状況（北東から）
(3) C群第9号墳石室墓壙及び地山成形状況（北西から）

- 12 C群第9号墳出土遺物 (36~54)
13 C群第9号墳出土遺物 (55・57~61・63・64・66~74)
14 C群第9号墳出土遺物 (76~86・88)
15 C群第9号墳出土遺物 (89・集合写真)
16 (1) C群第11号・12号墳墳丘遺存状況 (南南西から)
(2) C群第11号墳墳丘及び周溝遺存状況 (南から)
(3) C群第11号墳石室遺存状況 (南から)
17 (1) C群第11号墳羨道部閉塞状況 (石室内部から、北から)
(2) C群第11号墳墳丘除去後の石室遺存状況及び石室墓擴 (北東から)
(3) C群第11号墳石室遺存状況及び地山成形・墓擴遺存状況 (南から)
18 C群第11号墳出土遺物 (90~94・96~98・100~102)
19 C群第11号墳出土遺物 (103~105・107・109・110~112・115・117~119
・集合写真)
20 (1) C群第12号墳墳丘遺存状況 (南西から)
(2) C群第12号墳石室及び床面敷石遺存状況 (南東から)
(3) C群第12号墳羨道部土層堆積状況 (南西から)
21 (1) C群第12号墳石室羨道部及び石室構築状況 (南西から)
(2) C群第12号墳石室及び地山成形状況 (南西から)
(3) C群第12号墳第2区墳丘下遺物出土状況 (北西から)
(4) C群第12号墳第1区墳丘下遺物出土状況 (南西から)
22 C群第12号墳出土遺物 (120~124・126~131・133・134・集合写真)
23 C群第12号墳出土遺物
(135・137・141・145~147・00351~00362・00368~00402)
24 (1) C群第21号墳墳丘及び石室遺存状況 (南から)
(2) C群第21号墳石室遺存状況 (北から)
(3) C群第21号墳石室遺存状況 (西から)
25 (1) C群第21号墳石室及び床面遺存状況 (北東から)
(2) C群第21号墳石室奥壁構築状況 (東から)
(3) C群第21号墳石室内遺物出土状況 (南東から)
(4) C群第21号墳石室内遺物出土状況 (南西から)
(5) C群第21号墳石室南西隅遺物出土状況 (南東から)
26 C群第21号墳出土遺物
(148・149・151~160・163・166・167)
27 C群第21号墳出土遺物
(168~170・集合写真))
28 (1) C群第11・12・22号墳墳丘及び石室遺存状況 (南西から)
(2) C群第22号墳石室及び墳丘遺存状況 (南東から)
(3) C群第22号墳石室及び地山成形状況 (北西から)
(4) C群第22号墳羨門袖石及び石室床面遺存状況 (東から)

- 29 (1) 第1号焼土壙（南西から）
(2) 第2号焼土壙（北から）
(3) 第3・4号焼土壙（北北西から）
(4) 第5号焼土壙（東から）
30 (1) E群第1号墳調査前現況（西北西から）
(2) E群第1号墳墳丘遺存状況（西から）
(3) E群第1号墳墳丘上層断面（西から）
31 (1) E群第1号墳地山成形状況（西から）
(2) E群第1号墳溝道部閉塞状況（北西から）
(3) E群第1号墳石室奥壁構築状況（西から）
(4) E群第1号墳溝道右側壁構築状況（北西から）
(5) E群第1号墳石室内遺物出土状況（東から）
32 (1) E群第1号墳溝道左側壁構築状況（南から）
(2) E群第1号墳石室内遺物出土状況（北から）
(3) E群第1号焼土壙（西から）
(4) E群第2号焼土壙（西から）
33 E群第1号墳出土遺物（171・173～182）
34 E群第1号墳出土遺物（183～210・集合写真）

表 目 次

Tab. 1	相原古墳群C群・E群各古墳計測表	8
2	各古墳出土須恵器分類一覧表	70
3	C群第12号墳出土小玉計測表	73
4	E群第1号墳出土玉類計測表	73
5	各古墳出土土器観察一覧表	75

I. はじめに

1. 調査に至る経過

相原古墳群は、1968年に本市教育委員会が行なった分布調査によって「相原古墳B群」として初めて認知され、その後、1973年に一般林道開設工事に伴い、第3号・4号・6号墳の調査が実施されている。また、1982度に行なった分布調査によって今宿から周船寺地区にまたがる詳細な約350基の後期古墳の分布が把握され、当古墳群は70基からなる群集墳であることが周知されている遺跡である。

1989年に西山主一氏から埋蔵文化財課に対し、土砂採取にあたって所有地内の古墳の事前調査の依頼が出された。埋蔵文化財課ではこれを受け現地踏査を行なったところ、依頼があった古墳は（E群第1号墳）石室の遺存状況は比較的良好だったが、墳丘裾部、周辺およびその周辺がすでに掘削され、墳丘の本来の形状がかなり失われている状況であった。埋蔵文化財課では土砂採取工事を中止させ、西山氏と保存上の措置等も含め協議を行なったが、やむを得ず緊急に調査を行なうこととなり、1990年2月13日から実施する運びとなった（相原E群第1次調査）。

同年4月になり再び西山氏より所有地内の古墳の調査依頼を受けた埋蔵文化財課では、現地踏査を行ない、土砂採取のために相原C群のうち6号墳の墳丘の一部が消失していることを確認した。これに対して、埋蔵文化財課は西山氏に対して調査費用等の一部原因者負担（現物支給）と、所有地内の他の古墳の破壊を最小限に留めるための工法等の検討を要望する旨を申し入れし、調査中の安全管理のため土砂採取工事を一時中止させ、緊急に調査を行なうこととなつた。調査は1990年7月9日から着手した。

1991年度は前年度の協議を踏まえ、1991年4月から調査に着手した。

2. 調査の組織

各年度の調査は下記の体制で実施した。

1989年度

相原古墳群E群第1次調査（遺跡略号ABK-E-1、調査番号8972）

調査原因者 西山主一

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄

調査庶務 埋蔵文化財第1係 松延好文、安部徹

事前審査 文化財七事 橋山邦継

調査担当

山崎龍雄

1990年度

相原古墳群C群第1次調査（遺跡略号ABK-C-1、調査番号9021）

調査原因者 西山主一

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第2係長 柳沢一男

調査庶務 埋蔵文化財第1係 中山昭則、松延好文

事前審査 文化財主事 塩屋勝利、横山邦継

調査担当 埋蔵文化財第1係 下村智、常松幹雄、荒牧宏行、佐藤一郎
菅波正人

1991年度

相原古墳群C群第2次調査（遺跡略号ABK-C-2、調査番号9105）

調査原因者 西山主一

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学

埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄

調査庶務 埋蔵文化財第1係 中山昭則、寺崎幸男、吉田真由美

事前審査 文化財主事 横山邦継

調査担当 埋蔵文化財第2係 田中壽夫、荒牧宏行、大庭康時、小畠弘己

II. 相原古墳群C群・E群の位置と歴史的環境

1. 古墳群の位置

相原古墳群は、福岡市西区今宿上之原・相原・相ノ浦に所在する、70数基からなる古墳群である。今回報告するC群・E群の各古墳は、西区今宿相原地内に所在し、相原古墳群の主体をなすものである。調査地点の位置を、国土地理院発行の1/25,000の地形図「福岡西南部」上に求めると、西側線から10cm、北側線から10.3cmを測る交点に該当する。

本古墳群は博多湾に面して形成された今宿平野部東部西縁に位置している。

今宿平野は叶巌・長垂山山塊を東端とし、西端は、今津湾に流入する端柳寺川下流東岸までの東西約3km、南北1kmほどの狭長な平野である。平野の東部には、叶巌と高祖山との間に扇状台地が形成されている。博多湾に面するこの平野の南縁には、高祖山から派生する舌状の低丘陵がヤツデ状に延び、入り組んだ谷地形が展開している。この台地上には13~15群に分かれる総数320基以上の後期古墳と12基の前方後円墳が造営されており、特に古墳が集中する特異な地域として注目される。本古墳群はこれらの古墳群の分布範囲の最東端に位置している。

2. 周辺の遺跡

考古学の上で、今宿地区の特異性が目立つのは、弥生時代から古墳時代にかけてである。繩文時代や奈良時代以降は当該地区的調査例が少ないとあり、あまり明確ではない。したがってここでは弥生~古墳時代の主要な遺跡を取り上げ、若干の問題点についてみてゆく。

弥生時代の遺跡には、その初期の遺跡として、周船寺に千里シビナ遺跡、今宿地区に大塚遺



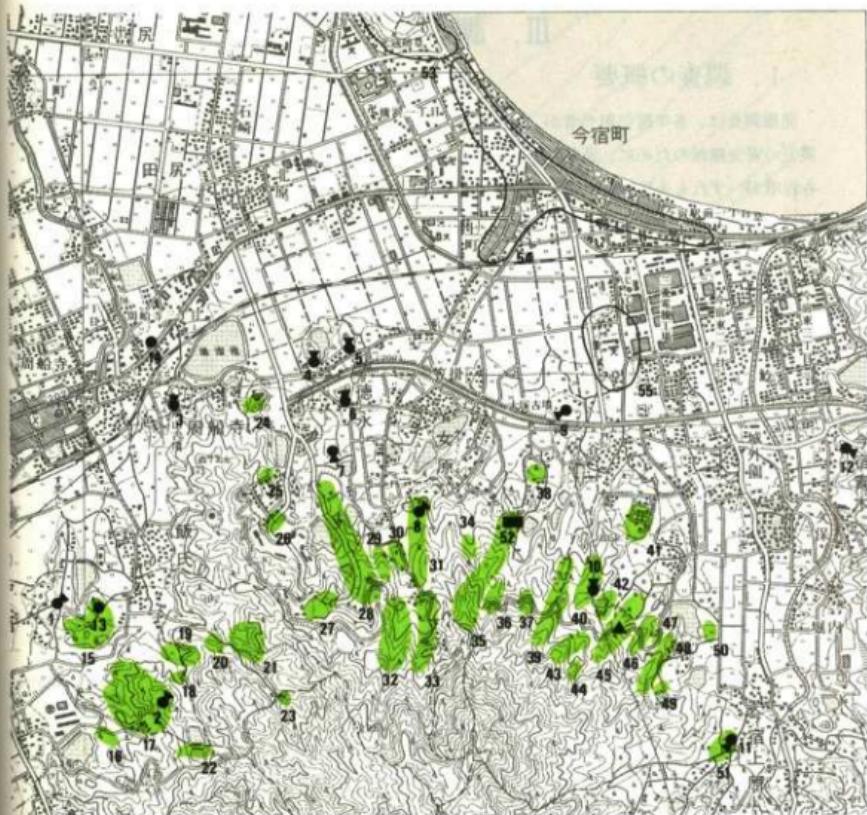
鏡崎古墳遠景（南から）

跡などがあげられるが、集落遺跡については未だ明確となっていない。前期末になると博多湾に沿って形成された砂丘の西端部にあたる今山で、玄武岩を素材とした太形蛤刃石斧の生産が始まる。近接する砂丘上には、今宿横浜遺跡があり、斐棺墓が検出されている。遺構は明確ではないが、細形銅劍、硬玉製勾玉が出土している。弥生中～後期の集落遺跡として注目されるのは、木古墳群に距離的にも近い、今宿五郎江遺跡である。当遺跡は、平面形が橢円形を描くと予想される環濠が確認されている。近接する地点では集落を画すると思われる大溝から小網鐸が出土しており、今宿平野における拠点的な集落である可能性が指摘できる。

古墳時代においては、今宿大塚古墳9周辺に人塚遺跡高田地区、若八幡宮古墳6周辺に女原遺跡など集落遺跡がある。いずれも丘陵部から平野部への変換点にあたる斜面上に集落が形成されている。狭隘な谷部に形成されているために集落規模はさほど大きくはないが、古墳時代後期を中心とするこれらの集落は、山麓に分布する群集墳の成立と展開の担い手であったことは大いに予想されよう。

先述したように、当該地区には高祖山北麓の丘陵部に、12基の前方後円墳と320基以上の後期群集墳が分布している。北部九州の中でも特に際立って集中している旧糸島群域の前方後円墳42基中の約35%が今宿地区にあるということになり、その特異性については注目されてよい。これらの前方後円墳の造営期間は、4世紀半ばまで遡ると考えられる山の鼻1号墳5を初現として、若八幡宮古墳6が、次いで5世紀代になると鋤崎古墳12、丸隈山古墳3、山の鼻2号墳4が、さらに6世紀になると今宿人塚古墳9、下谷古墳7、飯氏二塚古墳が、6世紀半ばから後半にかけては、群集墳の爆発的な増加とともに本村(A1)古墳11、谷上(B1)古墳10、女原(C14)古墳8、飯氏(B14)古墳2が造営されており、古墳時代の全期間を通してみられる。これらの古墳の在り方について柳沢一男氏は、12基の前方後円墳の立地条件や規模によって分類し、丘陵端部に独立して造営され墳丘全長が50m以上の8基の大形古墳と、丘陵上にあって、群集墳に取り囲まれ、30mを越えない規模の4基の小型古墳（本村(A1)、谷上(B1)、女原(C14)、飯氏(B14)）に分けた。そして前者が今宿地区を基盤とした首長層の系列、後者が6世紀半ば以降に急激に群集墳造営を始めた新たな階層の盟主的な墳墓の系列としてとらえている。その実態については今後の研究の進展を待たねばならないが、今宿地区的こうした在り方は古墳時代における社会的、政治的な動向を少なからず反映していると考えられよう。しかし群集墳造営の契機とその具体的な展開をより明らかにするためには、今山下遺跡53における堅壙土器の出土例や、当該地区の後期古墳にしばしばみられる鉄滓供獻などの事例28・29、あるいは新開窓跡52でみられる須恵器生産等を踏まえた生産関係の実態の解明も必要と思われる。

なお当該地区的遺跡関係の文献については74頁の文献一覧を参照されたい。



- | | | | | | |
|------------|--------------|-------------|-------------|-------------|----------------|
| 1. 鎌氏二塚古墳 | 11. 木村A1号墳 | 21. 鎌氏古墳群E群 | 31. 女原古墳群C群 | 41. 谷上古墳群C群 | 51. 木村古墳群A群 |
| 2. 鎌氏B14号墳 | 12. 錦崎古墳 | 22. * I群 | 32. * D群 | 42. 相原古墳群D群 | 52. 銀閣宝路 |
| 3. 丸原山古墳 | 13. 鎌氏(東側)古墳 | 23. * G群 | 33. * E群 | 43. * B群 | 53. 今山道路・今山下道路 |
| 4. 山ノ鼻2号墳 | 14. 山崎古墳 | 24. 徳永古墳群A群 | 34. 新開古墳群B群 | 44. * A群 | 54. 今宿遺跡群 |
| 5. 山ノ鼻1号墳 | 15. 鎌氏古墳群A群 | 25. * G群 | 35. * G群 | 45. 相原古墳群C群 | 55. 今宿五郎江遺跡 |
| 6. 若八幡宮古墳 | 16. * J群 | 26. * D群 | 36. * D群 | 46. * E群 | |
| 7. 下谷古墳 | 17. * B群 | 27. * G群 | 37. * E群 | 47. * D群 | |
| 8. 女原C14号墳 | 18. * F群 | 28. * H群 | 38. * F群 | 48. * G群 | |
| 9. 今宿大塚古墳 | 19. * G群 | 29. 女原古墳群A群 | 39. 谷上古墳群A群 | 49. * H群 | |
| 10. 谷上B1号墳 | 20. * D群 | 30. * B群 | 40. 谷上古墳群B群 | 50. * J群 | |

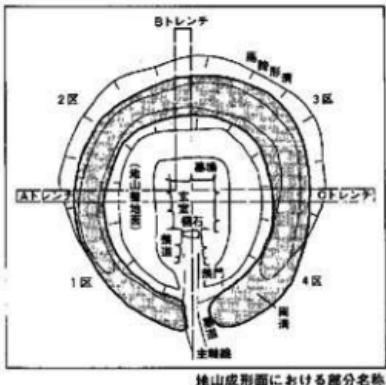
Fig.1 相原古墳群C・E群の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

発掘調査は、各年度の担当者が、調査対象となった各古墳の現状に合わせて実施したが、作業上の安全確保のために、通常の調査よりもかなり省略して行なわざるをえなかった。これは、各古墳がいすれも土砂採取により削平され、調査のための足場確保さえままならない状況が多くあったからである。しかし各担当者の調査方法についてはほぼ共通した問題意識のもとで行なわれたために極端な調査の成果のずれはほとんどなかったといえる。ただし報告にあたっては、古墳の部分名称は下図のように統一し記述した。以下では調査の方法と概要について述べる。

調査の方法 調査は墳丘周辺の伐採、現況地形測量、古墳主軸の設定、墳丘トレント掘削、主体部石室の埋土の掘り下げ、石室床面の観察、羨道部閉塞状況の観察、墓道・周溝等の外部施設の検出、写真撮影・実測作業、地山成形面の検出墓壙の確認、などを順次行なった。伐採作業と表土掘り下げ作業によって、C群では21号墳を新たに確認できた。現況地形測量と、地山成形面測量においては、墳丘の遺存状況と旧地形面の把握を主目的として、調査区全面にわたって25cm毎の等高線を追い、微地形の復元に努めた。墳丘盛上の堆積状況を把握するためのトレントは、石室主軸方向とそれに直交する横軸を玄室中心部で設定し、時計まわりに石室にむかって左からAトレント、Bトレント、Cトレントとそれぞれの壁面において上層断面図を作成した。また第6号墳と第21号墳、第8号墳と第9号墳、第11号墳と第12号墳の築造の先后関係を把握するために任意にトレントを設定し、土層観察を行なった。墳丘と周溝ならびに



地山成形面における部分名称

その周辺部の調査にあたっては石室にむかって左側開口部の周辺を1区として、そこより時計回りに1区～4区に区分し遺物の取り上げなどを行なった。

なお古墳の名称は、福岡市教育委員会刊行の文化財分布地図「西部Ⅱ」に登載の古墳番号に準じ、焼土塗などの遺構は発見順に番号を付した。

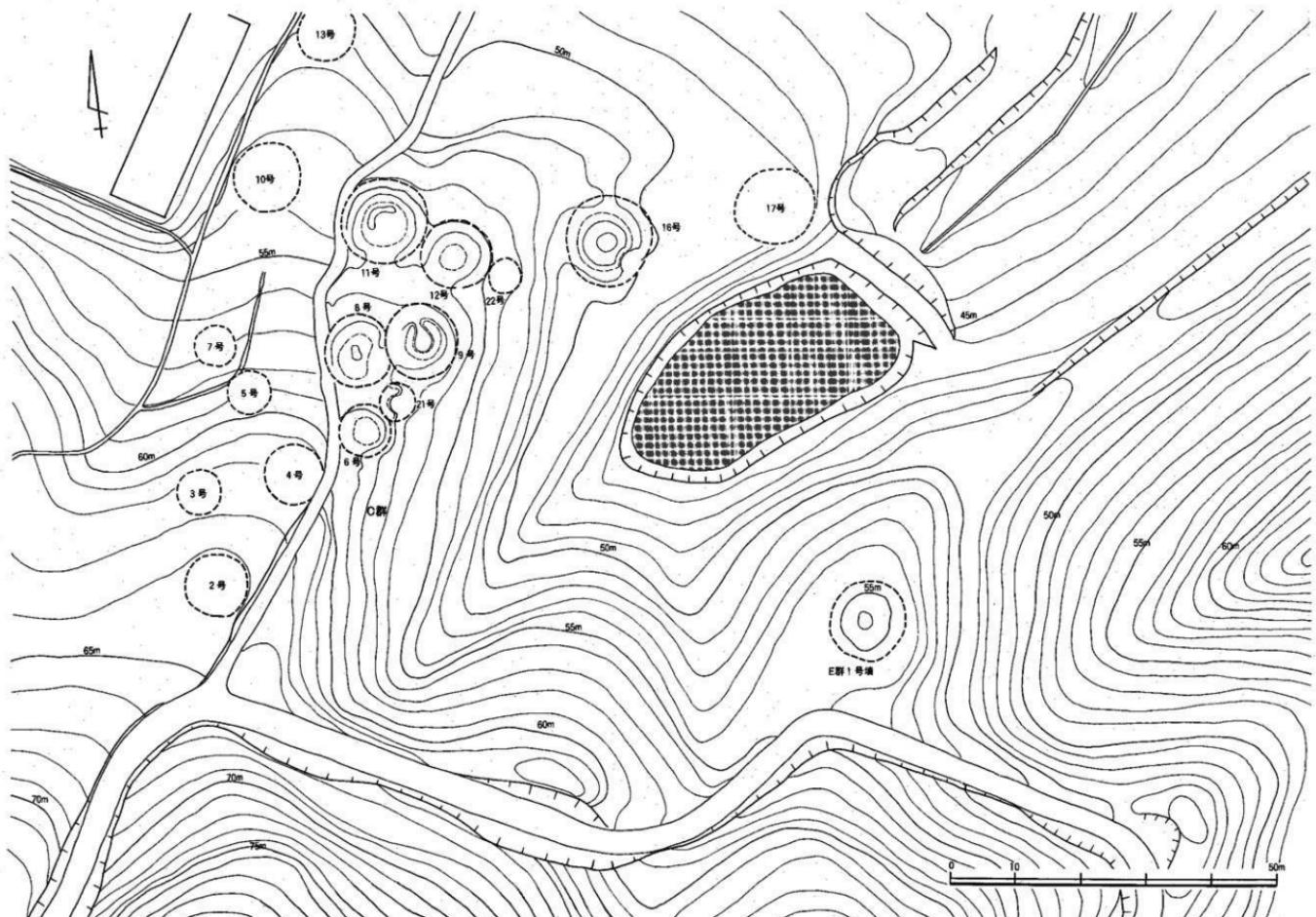


Fig.2 相應古墳群C・E群の現況地形測量図 (1/600)

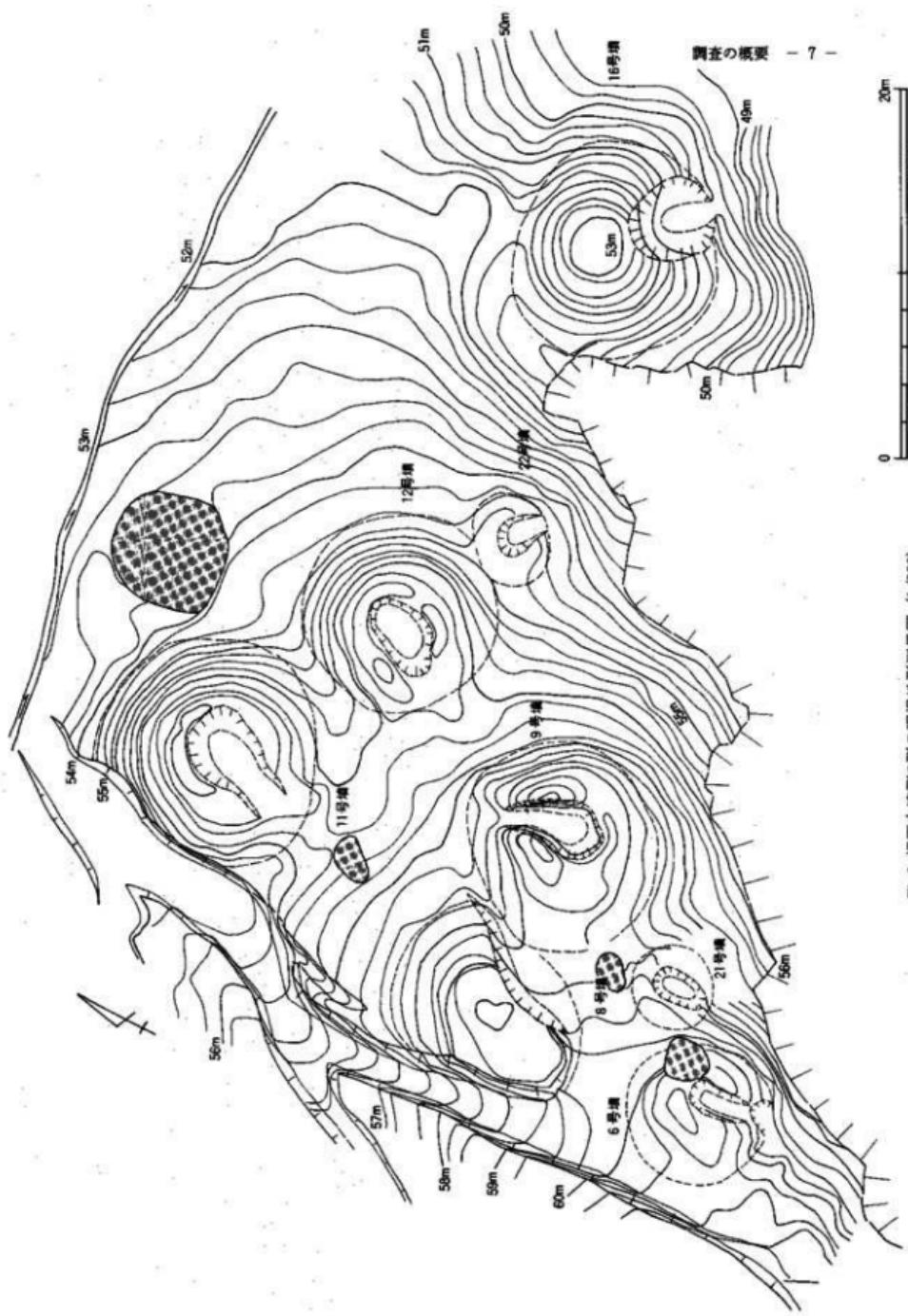


Fig.3 相原古墳群C群の現況地形測量図 (1/300)

2. 相原古墳群C群・E群の立地と現状

相原古墳群が立地する舌状に延びる丘陵は、高祖山山麓からの急な傾斜を保ちながらほぼ北東に延び、C群第1号墳南側付近でいったん傾斜をゆるめると同時に、若干北東に向きを変え、麓の相ノ浦集落まで大小の起伏を織りながら続いている。丘陵の東西には、高祖山から派生した丘陵がほぼ並行して北から東北方向に延びておりこれらに挟まれて狭長な谷地形が形成されている。相原古墳群はこういった丘陵上に大きく10群に分かれて分布する総数73基を数える群集墳である。最高位に位置する古墳は相原古墳群A群の第1号古墳であり標高約95mほどの傾斜面に造営されている。また最低位の古墳はすでに消滅してしまったが相原古墳群J群第4号墳で標高約24mの扇状台地部に占地している。

これらの中にあってC群は総数22基を数え、歴史的にも相原古墳群の中核をなしている支群である。C群の占地する丘陵の中腹から先端部は、ぶどう畑に戰後造成されており、C群中の古墳分布の在り方からみて、相の浦集落にかけて本来は古墳がさらに存在していた可能性がある。一方E群は、地形的なまとまり方からみてもわずかに2基で構成されているにすぎず、第2号墳は造成工事によってすでに消滅している状況である。こうした支群の在り方は地形的な制約による群の規模の差異とするよりも、群を構成した集団間の社会的な背景に起因するものと考えられよう。

なお今回調査した各古墳の概要は下表のとおりである。

号	墳丘(m)			石室(m)								出土遺物				時期
	墳形	径	高	形 式	主室	金 異	宝 宝	宝 宝	美 長	美 長	美 長	美 長	美 長	美 長	美 長	
C群 6	円 墳	8~10	(1.8)	横穴式石室 (内輪・外輪)	N-5°-W	右側長 右側長 左側長	右側長 左側長 前幅	1.1 1.1	1.5 1.1	2.8 2.6	1.2	花崗岩	須恵器 环・筒环	可溶 铁錠	铁錠	6C末 ~7C
8	円 墳	9.5 ~10.5	(2.0)	横穴式石室 (内輪・外輪)	N-17°-E 45° E	右側長 右側長 左側長	右側長 右側長 前幅	2.05 2.35 1.78	1.5 1.12	0.61 0.6	0.42	花崗岩	耳環 铁錠 須恵器 环・筒环・漆器 瓦	须恵器 环・筒环	6C ~7C	
9	円 墳	11.5 ~12	(1.8) ~2.0	横穴式石室 (内輪・外輪)	N-54°-E 30°-E	右側長 右側長 左側長	右側長 右側長 前幅	4.0 4.2 3.85	1.75 1.75 1.7	1.6 1.6 1.6	0.77	花崗岩	須恵器 环・筒环 土師器 环・筒环 瓦	土師器 环・筒环 土師器 环・筒环 瓦	6C後半 ~水	
11	円 墳	12.5 ~13	(2.5) ~3.0	横穴式石室 (内輪・外輪)	N-50°-E 30°-E	右側長 右側長 左側長	右側長 右側長 前幅	2.64 2.64 4.83	1.7 2.51	2.0 1.6	0.82	花崗岩	須恵器 环・筒环 土師器 环	須恵器 环・筒环 土師器 环	6C後半 ~水	
12	円 墳	10.5 ~11	(1.8) ~2.0	横穴式石室 (内輪・外輪)	N-46°-W	右側長 右側長 左側長	右側長 右側長 前幅	4.42 3.35 4.6	2.35 2.2 2.33	2.2 2.2 2.2	0.86	花崗岩	須恵器 土師器片	須恵器 环・筒环 土師器 环	6C後半 ~水	
21	円 墳	7~8	(1.3)	横穴式石室 (内輪・外輪)	N-4°-W	右側長 右側長 左側長	右側長 右側長 前幅	3.9 3.6 3.6	1.5 1.53 1.53	1.6 1.2 1.2	1.1	花崗岩	須恵器 环・筒环 土師器 环・筒环	須恵器 环・筒环 土師器 环	6C後半 ~7C	
22	円 墳	6.5 ~7.0	(1.5)	横穴式石室 (内輪・外輪)	N-51°-E 30°-E	右側長 右側長 左側長	右側長 右側長 前幅	2.06 2.06 2.06	1.89 1.89 1.89	1.62 0.77 1.09	0.62	花崗岩	須恵器 环(身)	須恵器 环(底)	6C後半 ~7C	
E群 1	円 墳	7.8 ~9.0	(2.0)	横穴式石室 (内輪・外輪)	N-59°-E	右側長 右側長 左側長	右側長 右側長 前幅	4.90 4.90 4.30	1.60 1.55 1.80	3.00 2.50	0.94	花崗岩	須恵器 环・筒环 土師器 环・筒环	須恵器 环	6C後半 ~7C	

Tab.1 相原古墳群C群・E群各古墳計測表

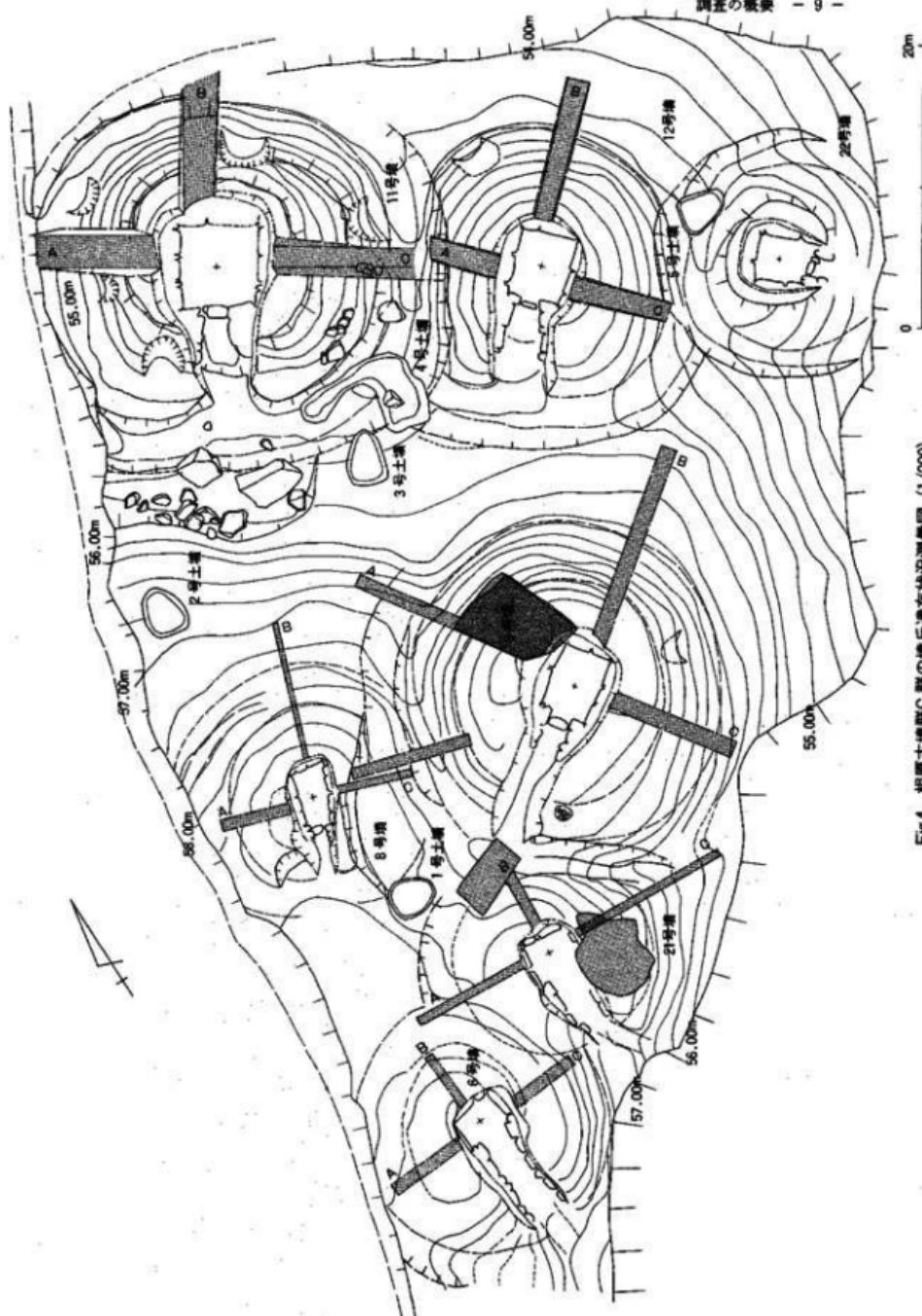


Fig.4 相原古墳群C群の現状遺存状況測量図 (1/200)

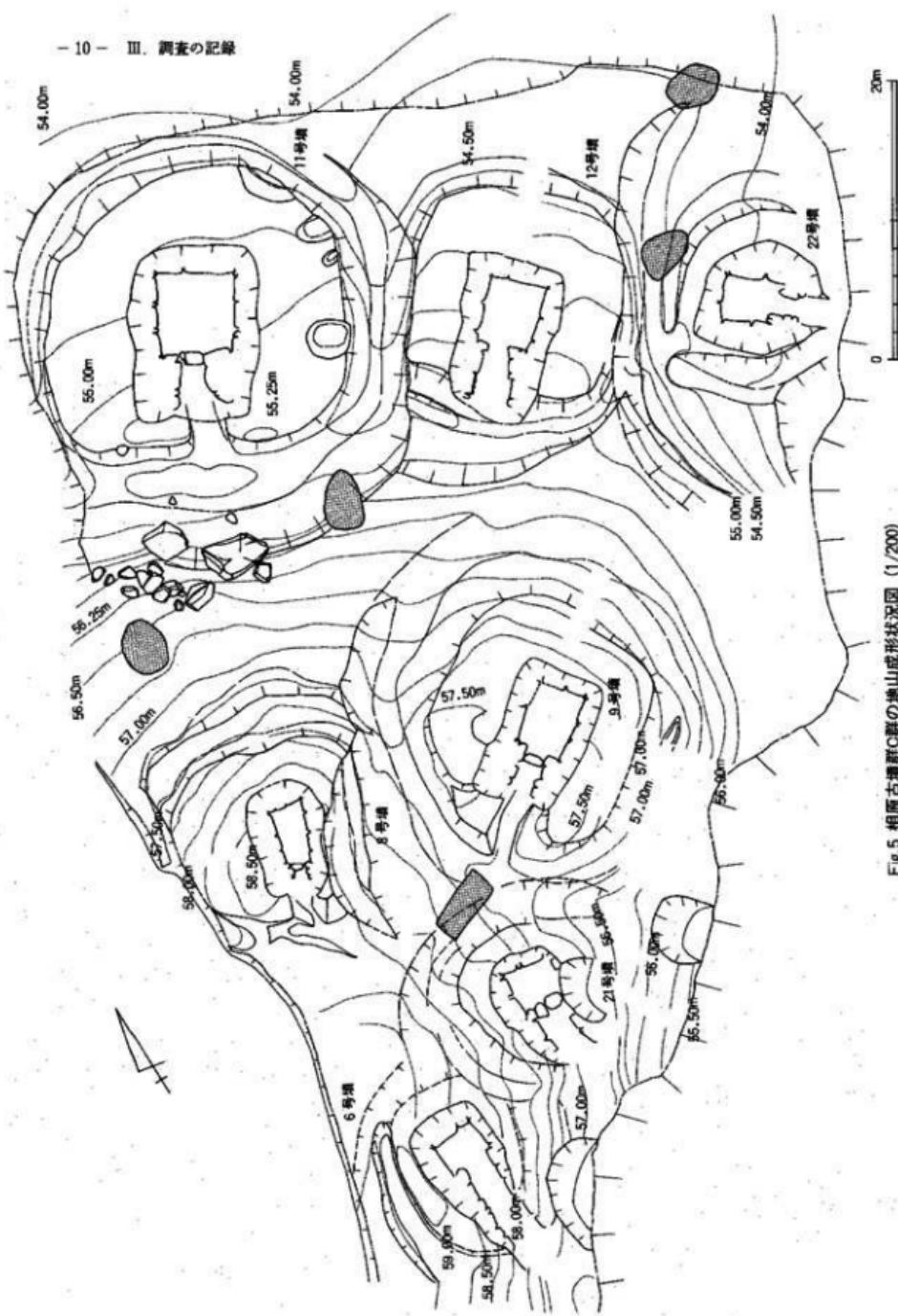


Fig. 5 相馬古墳群C群の地形状況図 (1/200)

(1) 相原C群第6号墳

1) 位置と現状 (Fig. 2 ~ 4, PL. 1 • 2)

古墳群の南西隅に位置し、東側の第21号墳と墳丘端部が接する。墳丘端部の西側は山道で、南側は土取りのため、削られている。墳丘上面は59.2m、東側裾で57.0mを測る。石室は天井部が消失し、土砂が流入していたが、閉塞石は残存していた。

2) 墳丘 (Fig. 3 ~ 5 • 7, PL. 4 • 5)

地山成形 本墳は西から東に延びる丘陵尾根の南側に位置し、南側に開口する石室を構築したものである。地山成形作業は石室の西の溝の掘削と墳丘基底面の整地である。溝は南側部分は切れている。幅0.8~1.4mを測る。基底面は平坦であるが、東側にゆくにつれて、傾斜が増す。標高は58.5mを測る。

墳丘 墳丘は削平のため、遺存状況は極めて悪く、盛土は西側で約0.8m、東側で約0.9mを測る。基底面は西から東に傾斜しているので、東側からの見かけの高さは約1.8mを測る。墳丘は石室の墓壙に腰石を据えたのちに、壁体を構築しながら盛土している。盛土は壁石の裏込め部分は比較的薄く積み上げるが、版築はなされていない。石室構築後、墳形を整えるための盛土が行われる。墳形を整える盛土はあまり締まりがない。したがって、墳丘の盛土は石室構築時のものと墳丘成形時のものに分けられる。墳丘の平面形は西、南側が削平を受けていたため不明瞭だが、円形を呈し、直径は約8~10mを測る。

3) 石室 (Fig. 6, PL. 3 • 4)

本墳の埋葬施設は主軸をN3°Wにとり、南側に開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室は天井部と壁石の上部を消失している。

石室は墓壙の内側に構築され、狭道部の先に墓道が続く。石室は長方形の玄室を有し、玄室の長軸部分に細長の狭道が連結する。左壁で4.4m、右壁で4.6mを測る。石材には主に花崗岩を使用する。

玄室 奥壁幅1.5m、玄門幅1.1m、左壁で1.1m、右壁で1.1mを測る。壁体は幅50~100cm、高さ50cm程の転石を立てて腰石としている。奥壁には2石、両側壁には1石使用する。腰石より上は人頭大の転石を持ち送りながら積み上げている。奥壁と両側壁の隅角における石材の構築は腰石より上は三角持ち送り手法を用いる。天井石は消失しているが、墳丘と奥壁の残存状況から奥壁にあと1段の石が積まれていたと考えられる。それから推定される玄室の高さは約1.4mほどと思われる。

玄門部は素型の両袖で、高さ約70~80cmの転石を立てて袖石としている。袖石幅は左が40cm、

右が20cmを測る。

床面には10~20cm程の転石が敷かれているが、盜掘のため原位置を保つものは少ない。

羨道及び閉塞状況 天井部は欠失しているが、比較的良好な状態で残っている。羨道は玄室長軸に対して、やや西側に偏ってつく。羨道長は左側壁2.6m、右側壁2.8mを測る。幅は墓道側で1.2mを測り、やや広くなりながら開口している。壁体は玄門から2石までは幅60~80

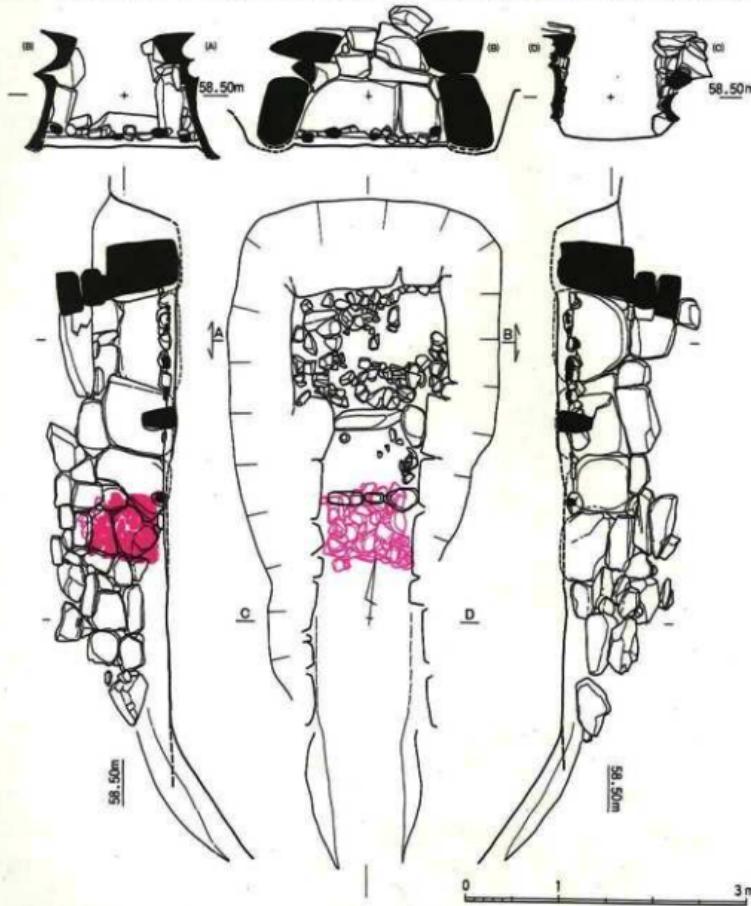


Fig.6 第6号墳石室平面及び断面図 (1/60)

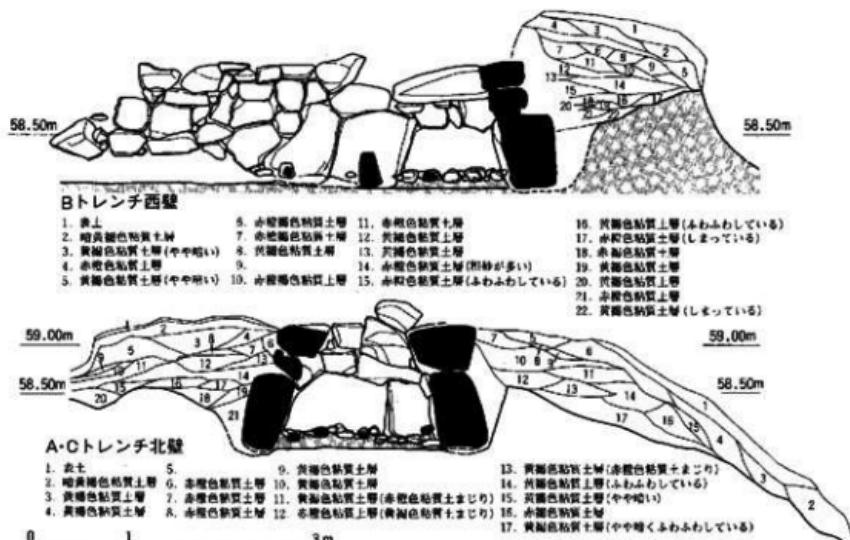


Fig. 7 第6号墳丘土層断面図 (1/60)

cm、高さ50cm程の転石を腰石とし、その上に人頭大の転石を積み上げている。それより先、墓道までは人頭大の転石を下から積み上げている。天井石の架構の有無による相違と考えられる。

床面には2カ所に樋石が配置される。第1樋石は墓道入口から1.9m測る位置にあり、2個の割り石を組み合わせて閉塞石の根石としている。第2樋石は細長い石2個を配置している。床面から約20cmの高さを測る。第1樋石との距離は70cmを測る。床面には敷石は認められず、直接地山となっている。墓道に行くにつれて若干傾斜していく。

閉塞施設 墓道部中央からやや玄室寄りに第1樋石を根石とした閉塞施設が存在する。拳大の転石を積み上げて閉塞するもので、現存高80cm、幅70cmを測る。石積みは雑然とした状態であるが、内側は比較的整然と積まれている。積み方は下部には大きめの石を、上にゆくにつれて小さな石が使用されている。

墓道 墓道は墓道端から直線的に接続する。現存長1.7m、幅1.2m、深さ20cmを測る。墓道は地山を削って造られており、暗褐色粘質土が堆積する。墓道は南にゆくにつれて浅くなり、断面形はU字形を呈する。

墓 墓 地山整地面は北から南に傾斜しており、墓壙はその傾斜に直交して掘りこまれている。墓壙の平面形は、玄室部で隅丸長方形を呈する。墓道付近になると徐々にすぼまって

いる。規模は全長約5.3m、幅約2.9m、深さは整地面から約0.5mを測る。

4) 出土遺物 (Fig. 8・9, PL. 5)

出土状況 石室は天井石が取りされ、玄室敷石も荒らされていることから盜掘を受けていたものと考えられる。遺物は破碎されたものが多く、原位置を保っているものは少ない。玄室からは須恵器、土師器、耳環等が出土した。羨道からは須恵器、土師器、耳環等が出土した。墓道からは少量の須恵器等と共に鉄滓が出土した。この他、墳丘盛土中から須恵器、土師器等が出土した。

石室出土の遺物と墳丘出土の遺物を列記すると以下の通りになる。

	石室	墳丘
装身具		
耳環	2	
容器		
須恵器	7(内羨道)	2以上
土師器	2	
鉄滓	1	

遺物は細片が多く、図化したものは少ない。以下では遺物の特徴を出土地点に関係なく、述べていく。

須恵器

杯蓋 (1~2) 1、2とも石室から出土した。1は天井部は丸みをもち、体部と天井部の境は不明瞭である。口縁部に向かって広がりながら続き、口縁付近で内側に少し折れる。端部は丸く仕上げる。天井部は回転ヘラケズリで、範囲は1/2以下である。2は天井部は丸みがあり、体部と天井部の境は不明瞭な作りである。口縁に向かって広がりながら続き、口縁付近で内側に少し折れる。端部は丸く仕上げる。天井部は回転ヘラケズリで、範囲は殆ど及ぶ。

杯身 (3~5) 3、4は石室、5は墳丘から出土した。3の立ち上がりは低く、内傾する。端部は丸く仕上げる。底部は回転ヘラケズリで、範囲は1/2程度である。底部は平坦である。4は口縁部の立ち上がりは低く、内傾する。端部は丸く仕上げる。底部は回転ヘラケズリで、範囲は1/2程度である。底部は平坦である。5も同様に口縁部の立ち上がりは低く、内傾する。端部は丸く仕上げる。底部は回転ヘラケズリで、範囲は殆ど及ぶ。

高环 (6) 6は墳丘から出土した。环部の口縁は直線的に延び、端部は丸く仕上げる。体部と底面の境には凹線がめぐる。底部は回転ヘラケズリを施す。脚部は筒形で、裾部は緩やか

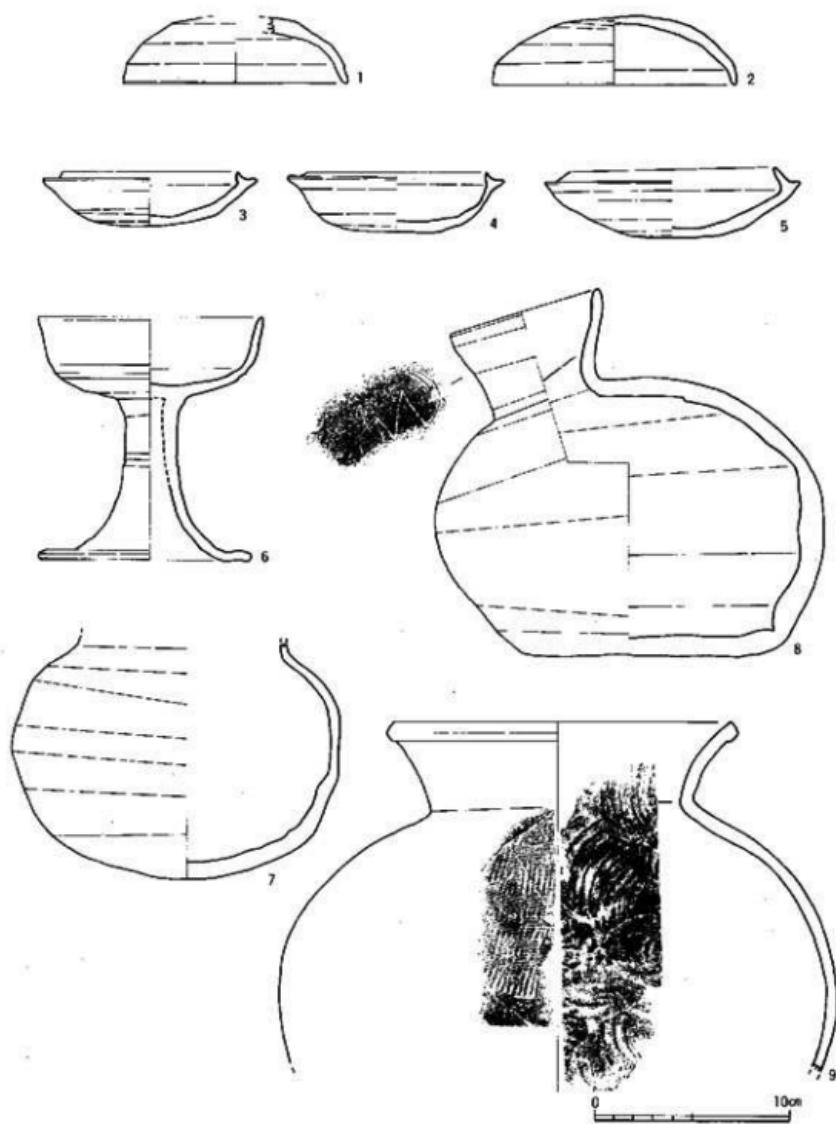


Fig.8 第6号墳出土遺物実測図 (1/3)

に広がる。端部は丸く仕上げる。器内面が接地する。脚中位には二条の凹線があげらる。

短頸壺（7） 7は墳丘から出土した。口縁端部を欠いている。頸部は短く直立する。体部は扁平な球形を呈する。調整は頸部がヨコナデ、それ以下はカキ目を施す。内面はナデ調整である。

平瓶（8） 8は石室から出土した。口縁は直線的に延び、端部付近でわずかに内湾する。体部は丸みをもち、肩部は張る。底部は平底である。底部から体部上半にかけて回転ヘラケズリが施される。頸部にヘラ記サがある。

壺（9） 9は墓道から出土した。口縁部は外反し、端部は肥厚する。体部は球形で肩が弱く張る。体部外面には平行叩きの後、カキ目を施す。内面は同心円文の当て具模が残る。

土師器

脚付壺（10） 10は石室から出土した。器形は丸底壺に脚がついたものである。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。体部は丸みをもち、上半に胴部最大径をもつ。底部は丸底である。外面はヘラミガキが施される。脚は緩やかに聞く。脚部の下半を欠いている。外面はヘラケズリによって面取りされている。

杯（11） 11は石室から出土した。底部は欠損している。口縁はわずかに折れて「く」の字形を呈する。底部は丸底である。

装身具

耳環（12・13） 12は菱造、13は玄室から出土した。12は銅芯に金箔を施したもので、金箔はわずかに残る。外径は長径が1.98cm、短径が1.81cmを測る。13は銅芯で金箔は見られない。外径は長径が1.95cm、短径が1.77cmを測る。

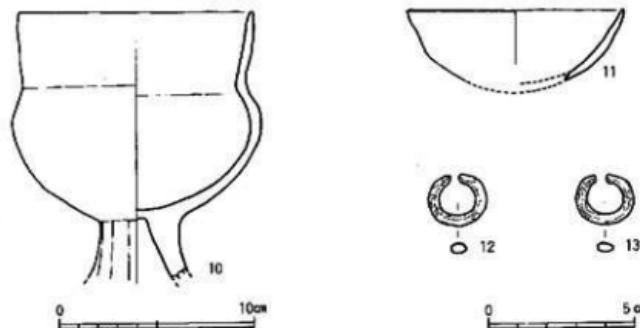


Fig.9 第6号墳出土遺物実測図 (1/3, 1/2)

(2) 相原C群第8号墳

1) 位置と現状 (Fig. 2 ~ 4, PL. 1 • 2)

調査区の西側中央部に位置し、ほぼ真北へ延びる丘陵尾根筋上に占地している。墳丘東南端は第9号墳に接し、第9号墳の地山成形に際して大きく削平されている。西側部分は林道開設時に掘削され消滅している。墳丘は盜掘と石室の崩壊により陥没していた。現存の古墳頂部は、標高59.2mを測る。

2) 墳丘 (Fig. 3 ~ 5 • 11, PL. 2)

地山成形 古墳構築に伴う地山成形は、墳丘の西南側の三日月形の溝の掘削と、墳丘基底面の地山整地が行なわれている。三日月形の溝は後世の削平によってその形状はほとんど留めていないが、溝底部の形状から、尾根筋を横断する形で掘削されたものと思われる。地山整面は斜面の傾斜に沿って平坦な面に仕上げられており、平面形は南北に6.5m、東西に約5.5mのやや不整形な円形である。断面形は台状となり、三日月形の溝基底面との比高差は約0.5mを

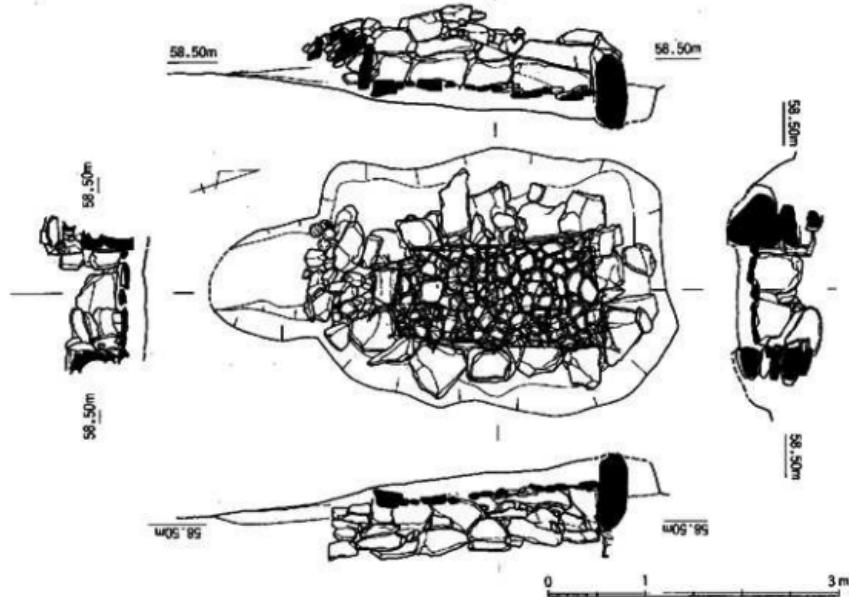


Fig.10 第8号墳石室平面及び断面図 (1/60)

測る。北側は二段に削平されている点が注意される。削平面には木炭片をブロック状に含む凹面がみられた。古墳築造地点の木立の伐開と焼却が整地作業に際して行なわれたことが推定できる。

墳丘 墳丘は、地山整地面を基底として盛上が行なわれているが、盛土のはほとんどは削平または流失しており、土層堆積の状況は不明である。墓壇と石室腰石部分間の裏込めは、厚さ約5~10cm程で版築状に叩き締められているが、締まりは悪い。

なお墳丘東側は第9号墳の地山成形時に大きく削平されており、その原形はほとんど留めていない。

墳丘規模は、現存径が約8.5mで、復元径は約9.5~10mと思われる。

3) 石室 (Fig.10, PL. 6・7)

石室は単室の両袖型横穴式石室である。南に開口し、その主軸はN-17°45'-Eをとる。天井部、側壁上半部は崩落しており、大量の土砂とともに埋没していた。壁体は腰石から2段目ほどが遺存しているのみである。石室右側壁は全長2.86m、左側壁は全長2.40mを測る。

墓壇 地山整地面から約80~90cmの深さで掘り下げている。平面形は不整形な長方形で長さ3.45m、幅2.70mを測る。墓壇の南端は羨道部端に一致し墓道掘り方に連結している。

玄室 平面形は羽子板状の長方形で奥壁幅1.80m、前幅1.12m、右側壁2.35m、左側壁1.78mを測る。北西隅部がやや内側に迫り出しており、左側壁長がやや短くなっている。石室の構築に用いられた石材は花崗岩である。全体的に小振りである。腰石は約20~30cm厚のやや大きめの板石をいずれも垂直に据えている。石室壁体の構築状況は腰石から上の壁体が崩落しているため不明である。玄室床面には厚さが3~5cmの板石を床面全体に二重に敷きつめている。墓壇床面と敷石間は小石をやや多く含む明褐色粘質土により整地している。奥壁周辺は第1面が剥がされており第2面のみ残っている。盜掘によるものと思われる。第2面の北東部隅に刀子、鉄鎌が出土している。

羨道及び閉塞状況 羨道は平面形がハの字形に広がり開口している。前幅0.55m、奥幅0.42m、長さ右側壁0.61m、左側壁0.6mを測る。開口方向は玄室主軸からやや西側に向き、左側壁が短くなっている。墓壇斜面に板石を小口を揃え3~5段積み上げ構築している。閉塞は玄門部から行なわれている。閉塞石として縦50cm、横55cm、厚さ12cmの扁平な板石を櫛石に接して立て、下半部を真土で埋め戻した後に、羨道部いっぱいに長めの練石を積み上げ閉塞している。閉塞後に羨道左壁には、須恵器坏(身・蓋)が供献されている。

墓道 墓壇から連接して南へ延びている。長さ約1.3m、幅約1.2mで確認された。すでに削平されており墳丘外には墓道の痕跡は認められないが、羨道部の方向性から考えて、羨道から南へ続いた後に、西南側に方向を変え延びていたことが予想される。

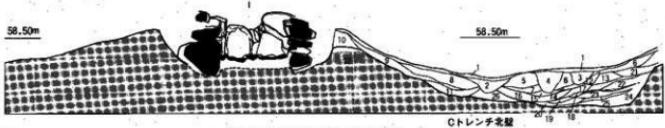
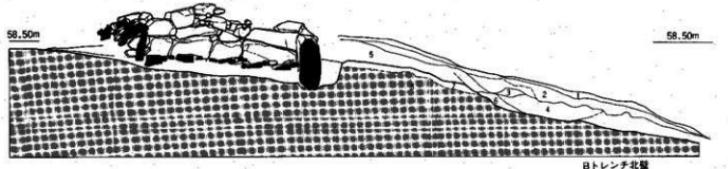


Fig.11 第8号墳埴丘土層断面図 (1/60)

第9号墳Bトレンチ西壁

1. 本褐色土層
2. 暗褐色土層
3. -
4. -
5. -
6. 褐色土層
7. 黄褐色土層
8. 小黄褐色土層
9. -
10. -
11. -
12. 黄褐色土層
13. 中褐色土層
14. 黄褐色土層
15. 明褐色土層
16. 深褐色土層
17. 黑褐色土層
18. 黄褐色土層
19. 深灰褐色土層
20. -
21. -
22. -
23. 明褐色土層
24. 深灰褐色土層 (木炭片が産出)
25. 黄褐色土層
26. 黄褐色土層
27. 本褐色土層

第9号墳Aトレンチ北壁

1. 表土
2. 表土下細褐色～褐色砂土層
3. (3.5m) 黄褐色土層
4. 明褐色土層
5. 明褐色土層
6. 黄褐色土層
7. 黄褐色土層
8. 黄褐色土層
9. 黄褐色土層
10. 黄褐色土層 (水質井戸)
11. 黄褐色土層
12. -
13. 黄褐色土層
14. 黄褐色土層
15. 黄褐色土層
16. 本褐色土層
17. 黄褐色土層
18. 黄褐色土層
19. 黄褐色土層
20. 黄褐色土層
21. -
22. -
23. 明褐色土層
24. 深灰褐色土層 (木炭片が産出)
25. 黄褐色土層
26. 黄褐色土層
27. 本褐色土層
28. -
29. 明褐色土層
30. -
31. -
32. 黄褐色土層
33. 明黄色土層
34. -
35. -
36. 黄褐色土層
37. 黄褐色土層 (H)
38. 本褐色土層
39. 本褐色土層
40. 40cmずつの赤褐色土と
黄褐色土の互層
41. 黄褐色土層
42. -
43. 黄褐色粘質土層 (地II)

第9号墳Cトレンチ北壁

1. 表土
2. (4m) 黄褐色砂土層
3. 黄褐色土層
4. 黄褐色土層 (表土) 削除上
5. 明褐色土層 (削除上)
6. 黄褐色土層 (削除上)
7. 黄褐色土層 (削除上)
8. 黄褐色土層
9. 黄褐色土層
10. 黄褐色土層 (削除上)
11. 黄褐色土層
12. 黄褐色土層
13. 黄褐色土層
14. 黄褐色土層
15. 黄褐色土層
16. 本褐色土層
17. 黄褐色土層
18. 黄褐色土層
19. 本褐色土層
20. 本褐色土層
21. 本褐色土層
22. 本褐色土層
23. 本褐色土層
24. 本褐色土層
25. -
26. 明褐色土層
27. 黄褐色土層
28. 黄褐色土層
29. 明褐色土層
30. -
31. -
32. 黄褐色土層
33. 明黄色土層
34. -
35. -
36. 黄褐色土層
37. 黄褐色土層 (H)
38. 本褐色土層
39. 本褐色土層
40. 40cmずつの赤褐色土と
黄褐色土の互層
41. 黄褐色土層
42. -
43. 黄褐色粘質土層 (地II)

第8号墳Bトレンチ

1. 表土
2. 淡褐色の厚い土層(黏土を多く含む)
3. 相模色の薄い褐色質土層 (淡褐色の軟り方)
4. 暗褐色～褐色質土層 (本褐色の軟り方)
5. 黄褐色土層 (削除上)
6. 黄褐色土層
7. 黄褐色土層 (本褐色を多く含む)
8. 黄褐色土層 (削除上)
9. (4m) 黄褐色質土層 (削除上)
10. 淡褐色の黄褐色土層(水質井戸を若干含む)
11. 淡褐色土層
12. 19m付近の層内埋土褐色～赤褐色土上の2次堆積土層
(1種の植生)
20. 黄褐色土層 (深度が多くならず、下部は底く離離している)

第8号墳Cトレンチ

1. 表土
2. 淡褐色の厚い土層(粘土を多く含む)
3. 相模色の薄い褐色質土層 (淡褐色の軟り方)
4. 暗褐色～褐色質土層 (本褐色の軟り方)
5. 黄褐色土層 (削除上)
6. 黄褐色土層
7. 黄褐色土層 (本褐色を多く含む)
8. 黄褐色土層 (削除上)
9. (4m) 黄褐色質土層 (削除上)
10. 淡褐色の黄褐色土層(水質井戸を若干含む)
11. 淡褐色土層
12. 19m付近の層内埋土褐色～赤褐色土上の2次堆積土層
(1種の植生)
20. 黄褐色土層 (深度が多くならず、下部は底く離離している)

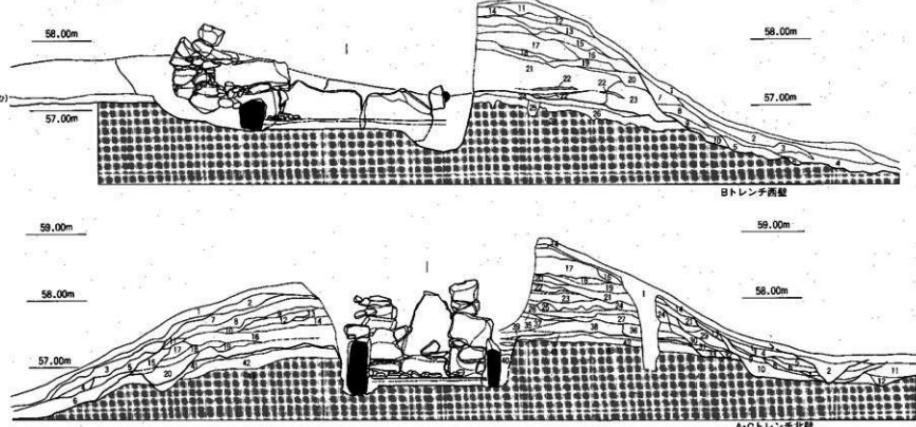


Fig.12 第9号墳埴丘土層断面図 (1/60)

0 1 3m

4) 周溝 (Fig. 4・5、PL. 6)

周溝は遺存状況が悪く、第1区墳丘裾部で幅1.5m、長さ約2m、第3区において幅1m、長さ1.5m程が確認された。暗灰褐色粘質土を覆土としている。第1区では墳丘祭祀に供された須恵器片が二次堆積で出土している。

5) 出上遺物 (Fig. 13~15、PL. 8・9)

出土状況 盗掘を受けているために遺物の出土量は少ない。石室内からは、鉄鎌が約15個体(67片)、刀子が1個体分(4片)、渡道・墓道からは須恵器杯(身3片・蓋13片)、轟2片、甕1個体(10片)、土師器高杯1点、提瓶1点、壺1個体(48片)、墳丘からは須恵器杯(身14片・蓋2片)、甕1個体、表土からは土師器片が出土している。羨道部で出土した14~21は閉塞後の供獻土器と考えられるもので、第8号墳の造営時期の一端を知り得る遺物である。その他はいずれも原位置を留めておらず、盗掘等により二次的に堆積したものである。なお、墳丘第1区で出土した甕の底部は盛土内に据えた状況で出土したが、墳丘祭祀が行なわれた可能性を示している。

羨道部出土遺物 (14~21)

須恵器

杯蓋 (14~16) 口径は13.2~15cm、器高は4.4cmを測る。いずれも天井部と体部の境に弱い沈線がめぐり、口縁部内面端部に段または弱い沈線がめぐる。焼成は良好でよく焼き縮まっており硬質である。天井部はシャープなロクロ回転ヘラケズリにより成形されている。15と16の天井部内面にはシッタ痕が残る。14は回転ナデにより消している。色調はおおむね青灰色である。杯身 (17~19) とはセットとなる。

杯身 (17~19) 口径は11.7~12.8cm、器高は4.7~5.3cmを測る。いずれも底部はシャープなロクロ回転ヘラケズリにより成形されている。口縁部は直線的に引き出されやや内傾している。受け部と立ち上がり部の境には細い沈線がめぐる。18は口径に比して器高がやや高い。焼成はいずれも良好で、よく焼き縮まっており硬質である。胎土はきめ細かく精良。色調はおおむね青灰色である。

提瓶 (20) 復元口径は5.1~5.3cm、器高は17.4cm、体部径は14.8cmを測る。扁平な球形の体部の横位にラッパ状に開く口縁部を接合している。体部の外面は回転カキ目とヘラケズリにより成形している。口縁部はヨコナデ。胎土はきめ粗く、焼成はあまり良くなく脆い。色調は明褐色。

高杯 (21) 口径は12.3cm、器高13.9~14.3cmを測る。焼き歪みがみられる。杯部は底部と口縁部との境に弱い段・沈線をめぐらしている。脚部は脚底部へラッパ状に広がっている。脚

部内外面には絞りの痕跡がみられる。焼成はあまり良くなく脆い。明褐色を呈す。

墳丘出土遺物 (22~30)

須恵器

坏蓋 (22~25) 口径は13.0~14.2cm、器高は3.8~4.2cmを測る。22と24は天井部と体部との

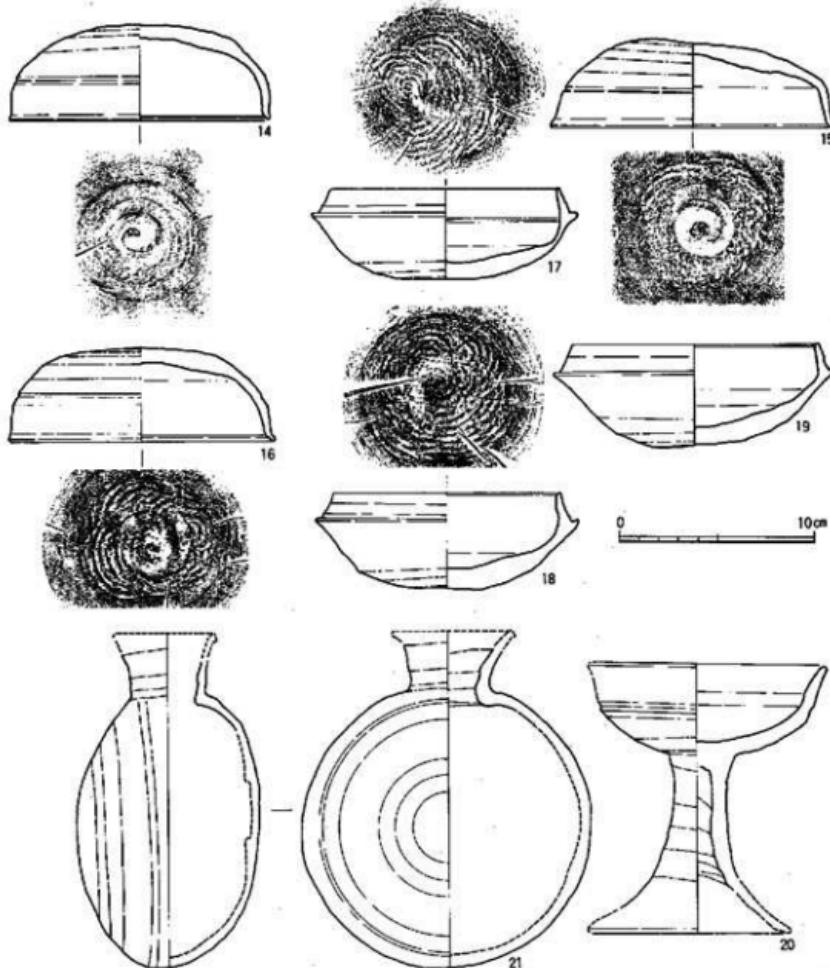


Fig.13 第8号墳埴道部出土遺物実測図 (1/3)

境に弱い沈線がめぐり、口縁部内面端部に段または弱い沈線がめぐる。焼成は良好でよく焼き締まっており緻密である。天井部はシャープな回転ヘラケズリにより成形されている。23と25は22・24と比べやや小振りで、丸みのある作りである。口縁端部は丸くおさまる。焼成はいずれも良好で、堅く焼き締まっている。色調はおおむね灰色～明灰色である。

杯身 (26~28) 口

径は11.6~13.1cm、器高は4.1~13.2cmを測る。底部はいずれも回転ヘラケズリによって成形している。口縁部は内湾気味に立ち上げ引き出された後、わずかに内傾し、端部は丸くおさまる。26はヘラ記号が外面に施されている。焼成は28がやや軟質であるが他は良好で堅く焼き締まっている。色調はおおむね明灰色である。

甕 (29) 口径7.6cm、器高は8.5cm。胎土は精良で焼成良好。胴部は丸みがあり、肩はやや下がったながらかなカーブを描いており、張りは弱い。口縁部は肥厚している。

土師器

杯 (30) 口径13.3cm、器高6.3cm。体部中位からやや上部で弱く屈曲し直線的に立ち

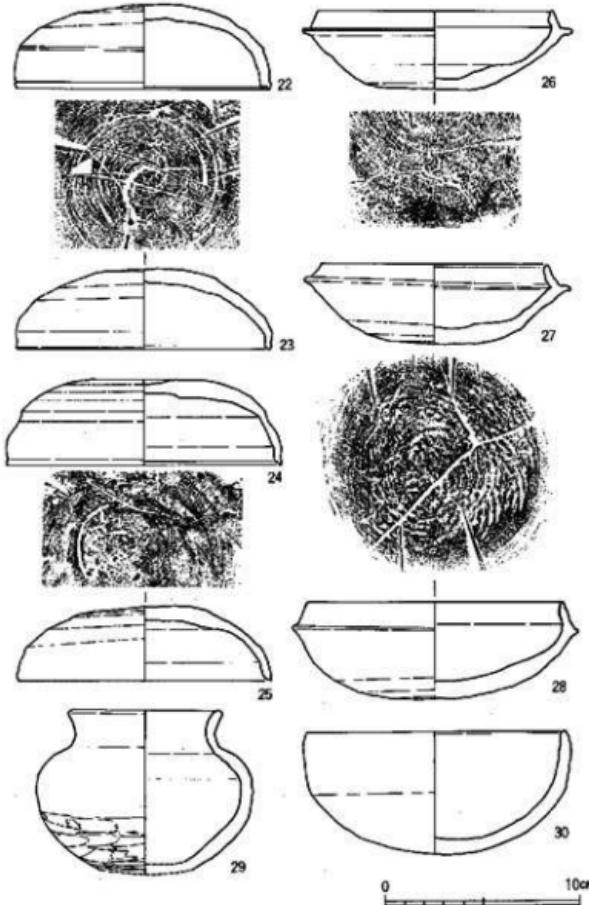


Fig.14 第8号墳埴丘表土出土遺物実測図 (1/3)

上がる。器面が粗れているため調整痕は不明。焼成不良。明褐色を呈す。

石室出土遺物 (31~35)

鉄製品

鉄鎌 (31~34) 図示したものは形態的に特徴のあるものである。破片総数78点で、個体数で15点以上あるものと思われる。31は広鋒両丸造三角形式に属する。茎がわずかに欠損している。現存長は10.8cm、鋒長4.6cm。32は片丸造棘笠被鑿箭式である。現存長は9.6cm。鋒長4.4cm。33・34は関無両丸造棘笠被鑿箭式である。いずれも先端および基端が欠損している。

現存長は33が6.4cm、34が7.3cm、鋒長は33が4.6cm、34が2.3cmである。

刀子 (35) ほぼ完形であるが3つに折損している。全長は16.6cm、茎長は6.2cm、身長は10.4cm、鋒厚は0.35cmである。切っ先がわずかに反っている。茎には木質が若干付着している。

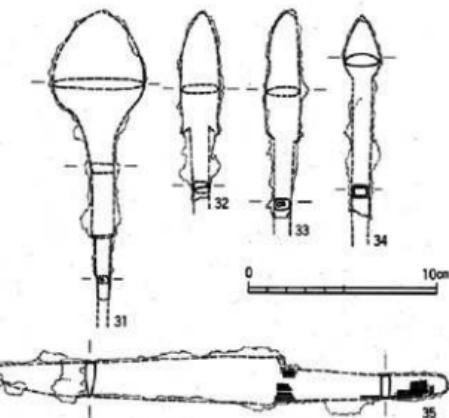


Fig.15 第8号墳石室床面出土遺物実測図 (1/3)



O群第9号墳閉塞石除去作業風景

(3) 相原C群第9号墳

1) 位置と現状 (Fig. 2 ~ 4, PL. 1 • 2 • 10)

調査区の西南部に位置し、ほぼ真北へ延びる丘陵尾根筋の東南側斜面に占地している。墳丘西側は第8号墳に接し、南端は第21号墳に接している。墳丘頂部は盜掘と石室の崩壊により陥没していた。盜掘痕は墳丘北側から石室奥壁にかけて開けられ、石室床面下まで及んでいる。石室の遺存状況はあまり良くない。現存の古墳頂部は、標高59.1mを測る。

2) 墳丘 (Fig. 3 ~ 5 • 12, PL. 6 • 10 • 11)

地山成形 古墳構築に伴う地山成形は、丘陵尾根筋の西側斜面の溝の掘削と、墳丘基底面の地山整地が行なわれている。溝は、尾根筋に平行して設定され、第8号墳東側墳丘を約半分ほど削平し、さらに第9号墳の北側まで及んでいる。平面形は三日月形を呈している。遺存している溝の長さは約12.5mで、溝の上端と基底面との比高差は1.1mを測る。地山整地は斜面の傾斜に沿ってほぼ平坦な面に仕上げられている。平面形は南北に9.5m、東西に約8.5mのやや不整形な隅丸長方形である。断面形は台状で、三日月形の済基底面との比高差は0.5~1.0mを測る。斜面の傾斜が急になっている東南側には、幅0.55m、長さ3m程の直線的な溝が掘削されている。削平面には木炭片をブロック状に含む凹凸面がみられた。古墳築造地点の木立の伐開と焼却が整地作業に際して行なわれたことが、第8号墳同様推定できる。

墳丘 墳丘は、地山整地面を基底として盛土が行なわれている。墳丘は本墳の立地の関係上西南側の流失が目立つ。また、西側墳丘は第21号墳築造時に若干削平されている。盛土の形成過程は大きく三段階にわけられる。第1段階は、墓壙掘り方上端まで（石室腰石の裏込め）で、第2段階は石室側壁から天井部までの裏込めと被覆で、第3段階が墳丘整形である。第3段階の墳丘整形はBトレンチでその一部が認められた。第2段階の盛り土は叩き締めが十分ではなく全体に軟質である。石室腰石の裏込めは、赤褐色粘質土、灰褐色粘質土の互層が観察された。厚さ約5~10cm程で版築状に堅く叩き締められている。墳丘規模は、現存径が約1.05mで、復元径は約11.5~12mと思われる。高さは墳丘地山整地面から1.8~2.0mほどと考えられる。

3) 石室 (Fig. 4 • 16, PL. 10 • 11)

石室は単室の両袖型横穴式石室である。西南に開口し、その主軸はN-54°30'-Eをとる。天井部、側壁上半部は石材が抜かれ消滅しており、腰石が遺存しているのみである。とくに玄室奥壁は腰石まで抜かれており破壊が顕著である。石室右側壁は全長4.0m、左側壁は全長3.86mを測る。

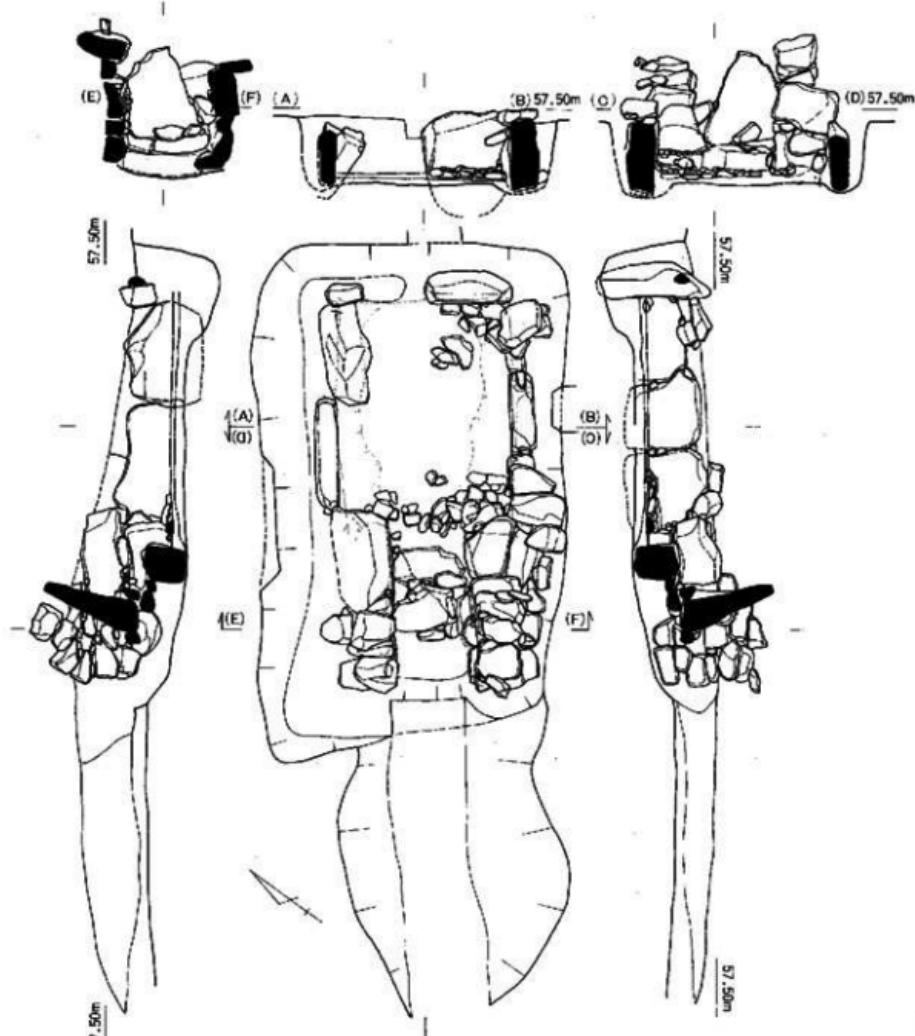


Fig.16 第9号墻石室平面及び断面図 (1/60)

0 1 3 m

墓 墓 地山整地面から約70~90cmの深さで垂直に掘り下げている。葬道部床面は緩やかな傾斜をつけている。平面形はやや不整形な隅丸長方形で右側辺5.26m、左側辺4.87m、奥壁側3.15mを測る。墓壙の西南端は葬道部端に一致し葬道掘り方に連結している。

玄 室 北西隅部の側壁腰石は盜掘によってやや内側に迫り出しておらずまた奥壁の腰石が抜かれている。玄室床面の平面形は長方形で奥壁幅1.75m、前幅1.7m、右側壁2.42m、左側壁2.30mを測る。石室の構築に用いられた石材は花崗岩である。腰石は約20~30cm厚のやや大きめの板石をいずれも垂直に据えている。

石室壁体の構築状況は腰石から上の整体が消滅しているため不明である。玄室床面には厚さが2~5cmの板石や転礫を床面全体に敷きつめていたと思われるが、盜掘によって奥壁部分と右袖周辺にわずかに残るのみである。墓壙床面と敷石間は丸い小石（川原石か）を多く含む褐色粘質土により整地している。土質は堅く縮まっている。右袖石の下に、須恵器壺（身）、捷瓶が出土している。

葬道及び閉塞状況 葬道部は平面形がコの字形で、わずかに広がりながら開口している。床面は粗石を据えた後にはほぼ水平に埋め戻され整地されている。葬道部の壁体は墓壙斜面に一抱えほどの石を小口を揃え4~6段積み上げ構築している。前幅0.85m、奥幅0.77m、長さ右側壁1.6m、左側壁1.6mを測る。開口方向は玄室主軸にほぼ沿っている。閉塞は玄門部から行なわれている。縦0.50m、高さ約1m、幅0.56m、厚さ0.35mの扁平な板石を粗石に接して立てて、下半部を真土で埋め戻した後に小礫を若干積み上げ閉塞している。

墓 道 墓壙および葬道から連接して南へ延びている。石室主軸よりやや南にかたよっている。長さ約3.3m、幅約2.1m（掘り方上端）を測る。出土遺物はいずれも墳丘祭祀用の須恵器片が二次的な堆積でみられた。東南方向に向きを変え、第21号墳の北側を抜けてさらに延びていたと思われる。

4) 周 溝 (Fig. 4 • 5, PL. 11)

周溝は遺存状況が比較的良好で、第1区から墳丘第2区裾部で確認できた。第4区では第21号墳から削平されており遺存していない。幅2.0m、長さ約10mほどを測る。黒灰色~黒褐色粘質土を覆土としている。第1区では墳丘祭祀に供された須恵器片が二次堆積で多数出土している。なおこの中には、本来第8号墳の墳丘第3区での祭祀で用いられたものがかなり混入している。

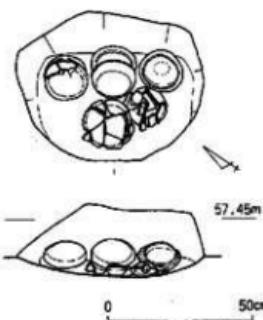


Fig. 17 第9号墳墳丘第4区供献土器
出土状況図 (1/20)

5) 出土遺物 (Fig.19~23、PL. 13~15)

出土状況 遺物の出土量は今回調査した7基中ではもっとも多いが、本墳も盗掘を受けていたため遺物のはとんどは原位置を留めていない。石室内からは須恵器壺（身・蓋）、高杯、提瓶2、長頸壺1などが、狭道・墓道からは須恵器壺（身・蓋）、甕、上部器高杯、壺、墳丘からは先述の器種のほかに長頸壺、短頸壺、土師器甕、鉄滓などが出土している。これらの中で墳丘第1区で出土した88・89や第4区で出土した80~87は、一括して供献されたもので、出土状態からみて古墳築造時に最も近い資料と考えられる。石室内から出土した36・41、狭道から出土した42~44は造営期間の推定の手掛かりとなる遺物である。

石室内出土遺物 (36~41)

須恵器

壺蓋 (36・37) 口径は11.6~13.6cm、器高は4.2~5.0cmを測る。36はつまみがつく。つまみの周間に櫛歯押捺文をめぐらしている。天井部と口縁部の境、また口縁部内面端部には弱い段を有する。37の天井部は丁寧なヘラケズリにより成形される。口縁部は丸くおさまる。いずれも焼成良好で、よく焼き締まっている。

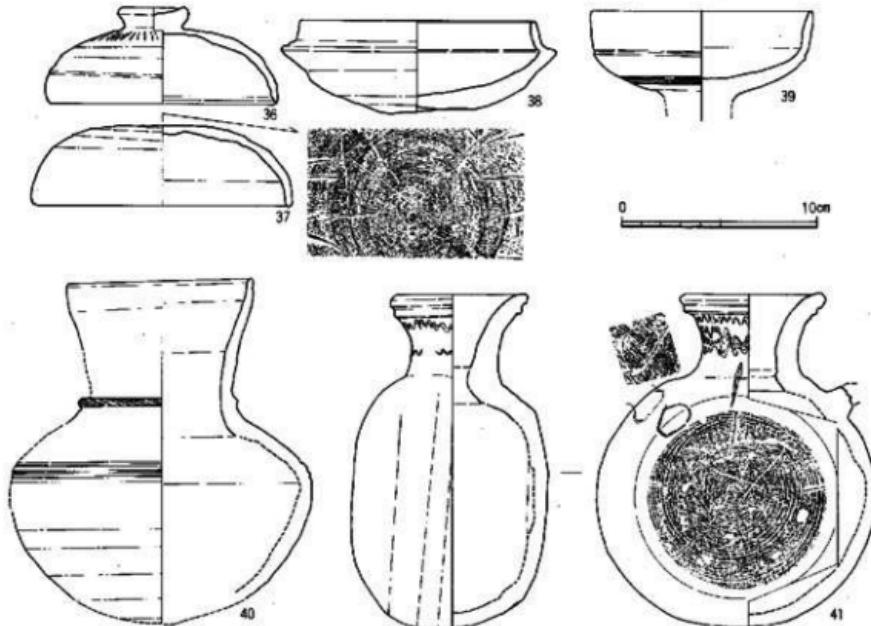


Fig.18 第9号墳石室内出土遺物実測図 (1/3)

坏身 (38) 口径11.9cm、器高4.6cmを測る。口縁部はやや内傾し端部は丸くおさまる。底部はシャープなヘラケメリによって成形されている。焼成良好。

高坏 (39) 坏部のみで、脚部は欠損している。口径11.6cm。底部と口縁部の境には沈線がめぐる。底部はカキ目仕上げ。焼成良好。黒灰色を呈す。

長頸壺 (40) 口径9.7cm、器高17.8cmを測る。腹部最大径は肩部にあり、肩部には浅い凹線が三条めぐる。頸部下端には突穴を貼付け、斜位の沈線を施している。頸部はやや開き気味に口縁へ延び、口縁端部下でわずかに屈曲し直立する。頸部から肩部にかけて薄い様灰色の自然釉がかかっている。

提瓶 (41) 口径7.0~7.2cm。器高17.3cm。把手が肩部に2つつくがいずれも欠損している。口縁部外面には段を有し、頸部に櫛描き波状文を施す。波状文はやや粗く乱れている。頸部と肩部、胴部にヘラ記号がみられる。

築道部・周溝出土遺物 (42~45)

須恵器

坏蓋 (42~44) 口径は11.3~13.1cm、器高は3.4~3.7cmを測る。42は平坦な天井部にヘラ切り離し痕をそのまま残す。いずれも口縁部は丸くおさめ、天井部と口縁部の境は不明瞭である。焼成は42がやや悪いが他は良好で、よく焼き締まり硬質である。41は長めのかえりを持つ。

甕 (45) 口径は約25cm。口縁部は肥厚し内面は浅く窪んでいる。胴部内面には同心円文の印が、外面には平行印が残る。焼成はあまり良くなく脆い。灰白色を呈する。

墳丘 (第1区) 出土遺物 (46~79)

須恵器

坏蓋 (46~56) 46は口径6.4cm、器高4.0cmを測り、長めのかえりを持つ。47~49の口径は8.7~9.5cm、器高は2.5~3.5cmである。他の口径は11.5~14.9cm、器高は3.5~4.9cmを測る。48はつまみがつき、口縁端部内面には段を有す。天井部と口縁部の境には明瞭な境はないが、弱い凹線がめぐら

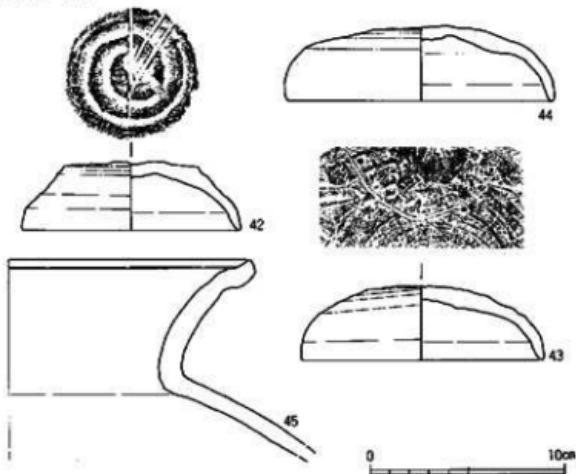


Fig.19 第9号墳築道・周溝出土遺物実測図 (1/3)

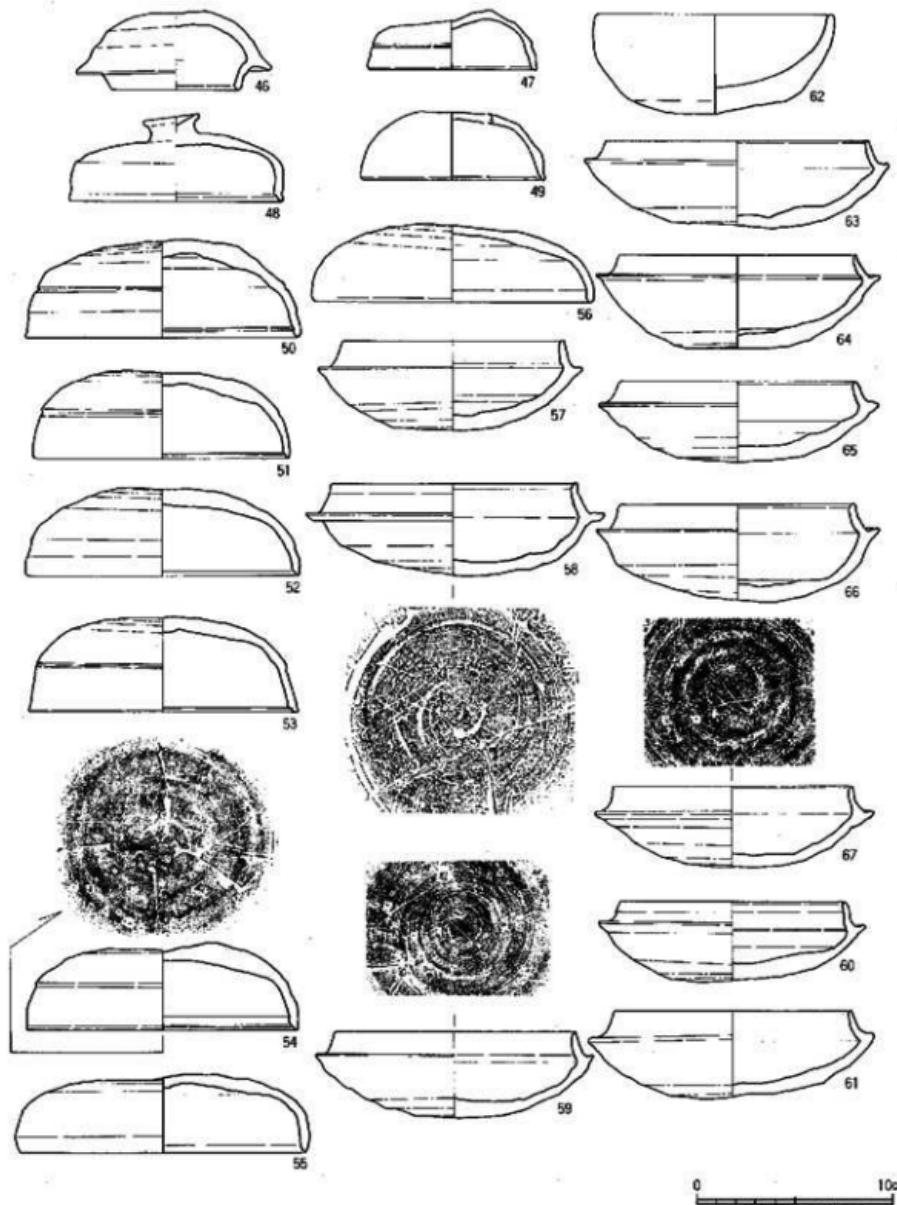


Fig.20 第9号墳墳丘（1区）出土遺物実測図（1/3）

ている。50・53・54は天井部と口縁部との境に段を有し、口縁端部内面に弱い段が認められる。いずれも焼成は良好で、硬質である。色調はおおむね灰白色～淡青灰色を呈す。その他は、全体的に丸みを帯びた作りで、天井部から口縁部にかけては境が明確ではない。口縁部も丸く

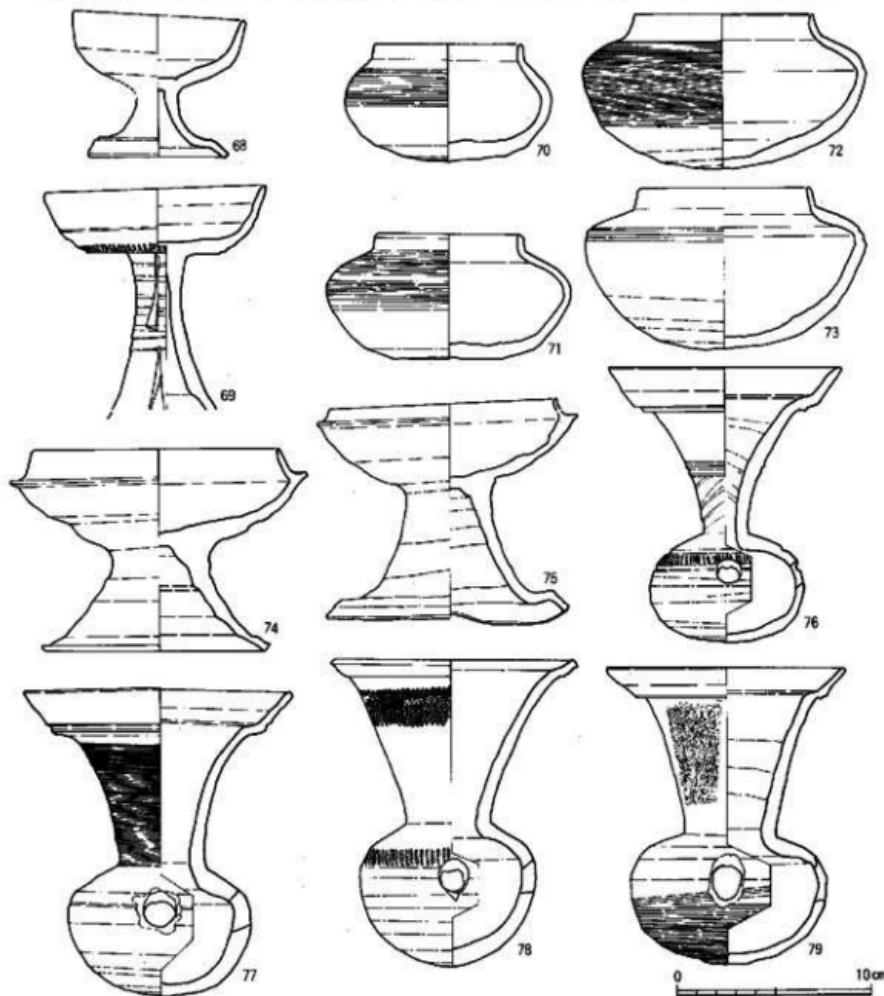


Fig.21 第9号墳墳丘（1区）出土遺物実測図（1/3）

おさまりやや厚手である。焼成はやや良好で、硬質である。色調は灰白色～灰色を呈する。

坏身 (57~61・63~67) 口径は11.4~13.6cm、器高は4.1~5.2cmを測る。最大径のものは63である。58が直線的な口縁端部に弱く段の名残を留め、型式的にやや古い様相を示しているのに対して、その他は内溝気味に立ち上げ、口縁端部は丸くおさめている。口径に比して器高が高いものは57・61・64・66である。焼成は、58・60・63が軟質で焼き締まりが悪いが、他は良好で硬質である。

高坏 (68・69・74・75) 68は口径8.7cm、器高7.2cmを測る。坏部は体部中央で弱く屈曲する。脚部は段を有し大きく開く。焼成はあまり良くない。69は口径11.3cmである。脚裾部は欠損している。坏部底部にはヘラ先押捺文を施し、脚部には二段の三角形の透しを入れている。74・75は有蓋高坏である。口径は74が13.0cm、75が12.0cm、器高は74が10.5cm、75が11.8cmを測る。いずれも太めの脚部を有している。坏部の立ち上がりはやや長めに上方へ引き出されている。

短頸壺 (70~73) 大小ふたつのタイプがある。70・71は口径7.2~7.5cm、器高6.1~6.4cmを測る。72・73は口径

8.6~9.2cm、器高8.0~

8.3 cmを測る。いずれ

も底部は回転ヘラケズ

リ、体部から肩にかけ

ては目の細かなカキ目

で器面を仕上げている。

瓶 (76~79) 口径

は12.2~13.7cm、器高

は14.3~16.1cmを測る。

いざれも体部は扁平な

球形をなす。76の頸部

はやや細身で、下部が

締まっている。頸部に

は、二条の沈線がめぐ

るもの (76)、カキ目

を残すもの (77)、櫛

指波状文を施文するも

の (78・79) がある。

焼成はいざれも良好。

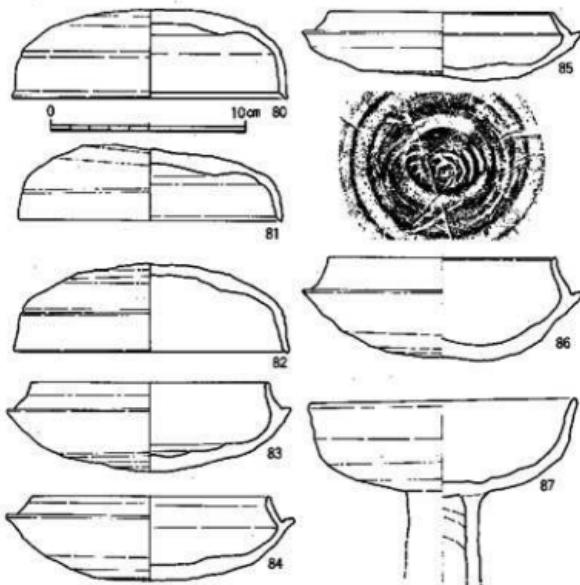


Fig.22 第9号墳埴丘(4区)出土遺物実測図(1/3)

なお78には底部にヘラ記号を残す。

壺 (88・89) 88は口径23.5cm、器高47.0cm。89は口径23.7cm、器高35.5cmを測る。88は端正な卵形の体部で、中位よりやや上に最大径を測る。内面は同心円の、外面は格子目の叩き痕が残る。89はかなり焼き歪みが顕著で、器形がかなり歪んでいる。頸部には丁寧な櫛目波状文を施している。

墳丘（第4区）出土遺物（80～87）

須恵器

坏蓋（80～82） 口径は13.5～14.1cm、器高は3.8～4.6cmを測る。いずれもシャープな回転ヘラケズリで天井部を仕上げている。80は口縁端部の内面に段を有し、天井部と口縁部の境には弱い段と凹線がめぐっている。81・82の口縁端部は丸くおさめている。

坏身（83～86） 口径は11.5～12.3cm、器高は3.3～5.1cmを測る。86以外はやや扁平な器形である。作りはいずれもシャープで、硬質である。80と86、81と85、82と83がセットである。

土師器

高坏（87） 口径13.8cm、現存器高5.0cmを測る。坏部の底部は回転ヘラケズリで成形している。口縁部は体部中位でわずかに外反している。胎土はやや粗く砂粒を含む。

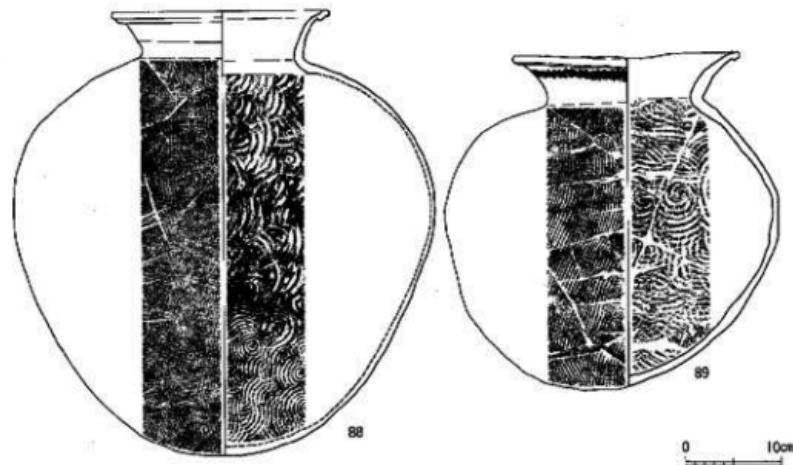


Fig.23 第9号墳墳丘出土遺物実測図 (1/6)

(4) 相原C群第11号墳

1) 位置と現状 (Fig. 3 ~ 5, PL. 2 • 16)

調査区の西北部に位置し、ほぼ真北へ延びる丘陵尾根筋からややはざれた東北側斜面に占地している。墳丘東側は第12号墳に接し、西側～東側裾部は林道と今回の十取り作業によって消滅している。墳丘頂部は盜掘と石室の崩壊により大きく陥没していた。盜掘墳は墳丘頂部から石室床面下までおよんでいる。壁体石材はほとんど抜き去られており玄室の遺存状況はあまり良くない。現存の古墳頂部は、標高56.7mを測る。

2) 墳丘 (Fig. 4 • 5 • 25, PL. 16 • 17)

地山成形 古墳構築に伴う地山成形は、丘陵尾根筋に直交する馬蹄形の溝の掘削と、墳丘基底面の地山整地が行なわれている。馬蹄形溝は、墳丘西側から第12号墳西側墳丘中位を削平し、墳丘第3区まで掘削されている。古墳前庭部にあたる南側は花崗岩が露出している。林道開設によって消滅した西側端部の位置を推定すると馬蹄形溝は墳丘の約2/3を取り込むように設定されていたものと思われる。両端部の推定長は約14.5mで、溝の上端と基底面との比高差は1.2mを測り、かなり深く溝の掘削が行なわれている。

地山整地 は斜面の傾斜に沿ってほぼ水平な面に仕上げられている。平面形はやや不整形な隅丸方形で、南北に11.0m、東西に約12.5mを測る。断面形は台状で、馬蹄形溝の基底面との比高差は0.8~0.5mを測る。整地面には木炭小片が比較的多く分布し、また木炭片をブロック状に含む凹凸面が、第8・9号墳同様みられた。整地作業に際して古墳築造地点の木立の伐間と焼却が行なわれたことが推定できる。

墳丘 墳丘は、地山整地面を基底として盛土が行なわれている。墳丘は今回調査した7基中ではもっとも良好に遺存していた。墳形は円錐台状を呈している。盛土の形成過程は大きく三段階にわけられる。第1段階は、墓壙掘り方上端まで（石室腰石の裏込め）で、第2段階は石室側壁から天井部までの裏込めと被覆で、第3段階が墳丘成形である。第3段階の墳丘成形はA~Cの各トレンチでその墳丘裾部に一部が認められた。第2段階の盛り土は墳丘中位まで一挙に多量の土砂を盛土したものと思われる。各層は叩き締めが十分ではなく全体に軟質である。石室腰石の裏込めは、小礫を含む赤褐色粘質土、灰褐色粘質土の互層が観察された。厚さ約10~15cm程度で版築状に堅く叩きしめられている。墳丘規模は、現存径が約12.0m、現存高が地山整地面から2.1mである。復元径は約12.5~13mと思われる。高さは墳丘地山整地面から2.5~3.0mほどで、今回調査した7基中ではもっとも規模が大きい。

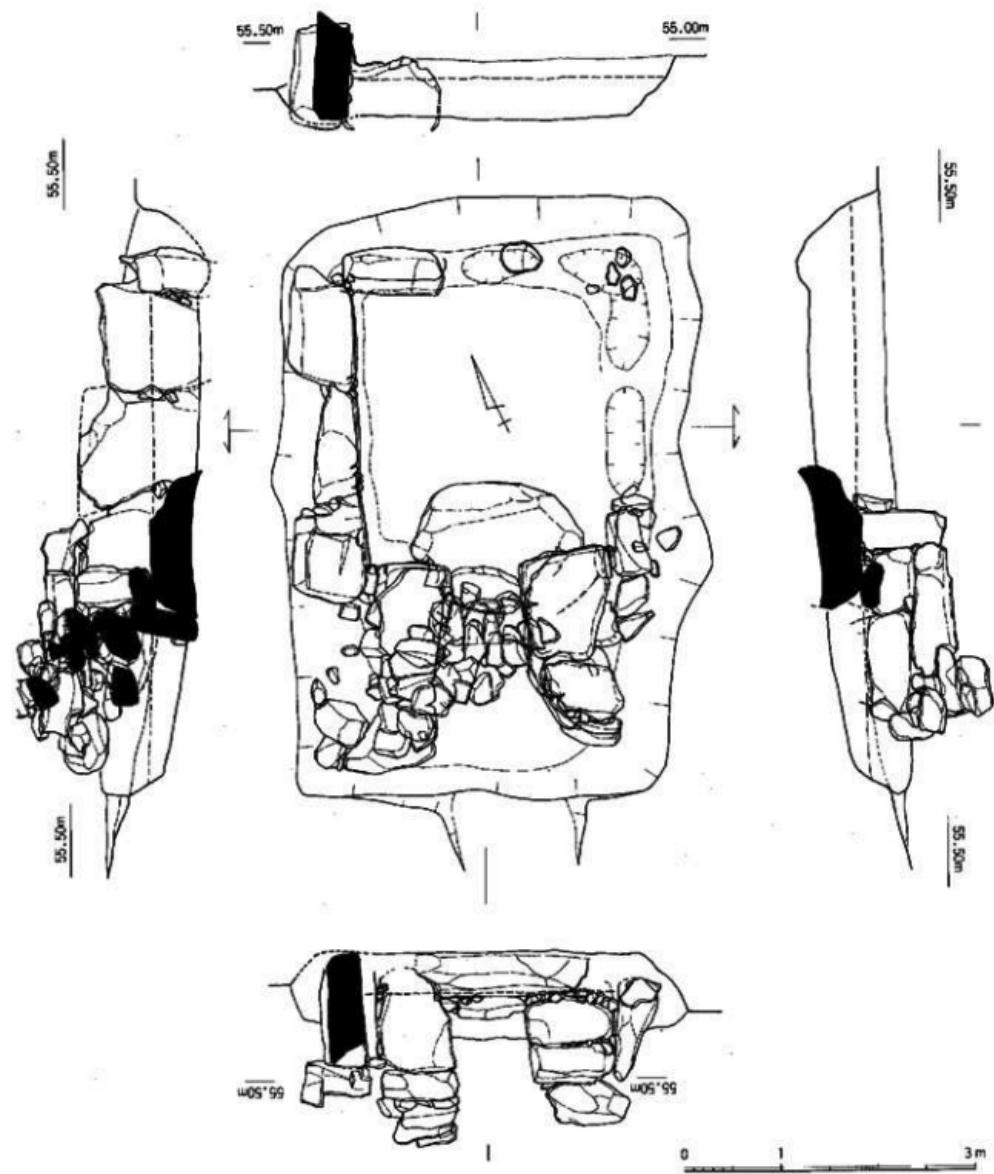


Fig.24 第11号墳石室平面及び断面図 (1/60)

3) 石室 (Fig.24、PL.16)

石室は単室の両袖型横穴式石室である。西南に開口し、その主軸はN-30°30'-Eをとる。天井部、側壁上半部、奥壁、東側壁腰石は石材が抜かれ消滅している。床面はほぼ全面にわたって掘り下げられており、本来の墓壙床面は残っておらず、きわめて破壊が顕著である。石室右側壁は全長4.83m（推定）、左側壁は全長4.83mを測る。

墓 壁 地山整地面から約30～60cmの深さでほぼ垂直に掘り下げている。玄室樋石の下部には花崗岩が露出しているが、墓壙床面はこの岩盤の平坦面にあわせて掘削したものと思われる。羨道部床面は緩やかな傾斜をつけている。平面形はやや不整形な隅丸長方形で右側辺6.10m、左側辺6.20m、奥壁側4.55mを測る。墓壙の南壁は羨道部を取り込み、墓道掘り方に連結している。

玄 室 東北隅部の奥壁・側壁腰石は盗掘によって抜き去られている。玄室床面の平面形は長方形で奥壁幅2.51m（推定）、前幅2.51m、右側壁2.64m、左側壁2.95mを測る。石室の構築に用いられた石材は花崗岩である。腰石は約30～40cm厚の大きめの板石をいずれも垂直に据えている。石室全体の構築状況は腰石から上の壁体が消滅しているため不明である。玄室床面には板石や転砾を床面全体に敷きつめていたと思われるが、完全に破壊され本来の形状は留めていない。樋石と右袖石付近にわずかに残っているのみである。

羨道及び閉塞状況 羨道部は平面形がハの字形で、わずかに広がりながら開口している。床面は樋石を据えた後にはほぼ水平に埋め戻され整地されている。羨道部の壁体は墓壙内に斜面大坂の花崗岩を小口を揃え2～4段積み上げ構築している。前幅1.60m、奥幅0.80m、長さ右側壁2.0m、左側壁1.6mを測る。開口方向は玄室主軸から東にやや偏っている。閉塞は玄門部から行なわれている。高さ約0.7m、幅0.60m、厚さ0.25mの扁平な板石を樋石に接してやや内傾させ立てかけ、下部を粘質土を突き固めて埋め戻した後に長めの小砾を積み上げ閉塞している。

墓 道 墓壙および羨道から連接して西南へ延びている。石室主軸よりやや東に偏っている。長さ約1.5m、幅約1.4m（掘り方上端）を測る。出土遺物はいずれも墳丘祭祀川の須恵器片が二次的な堆積でみられた。墓道は西南方向に向きを変え、墳丘西側を抜けたと思われる。

4) 周 溝 (Fig. 4・5、PL.16・17)

周溝は遺存状況が比較的良好で、墳丘第1区から第3・4区裾部で確認できた。幅1.5～2.0mほどを測る。黒灰色～黒褐色粘質土を覆土としている。第12号墳との境にあたる第3・4区では墳丘祭祀に供された須恵器片が二次堆積で多数出土している。この中には、本来第12号墳の墳丘第1区で祭祀で用いられたものがかなり混入している。なお周溝は、第3号焼土壙、第4号土壙によって切られている。

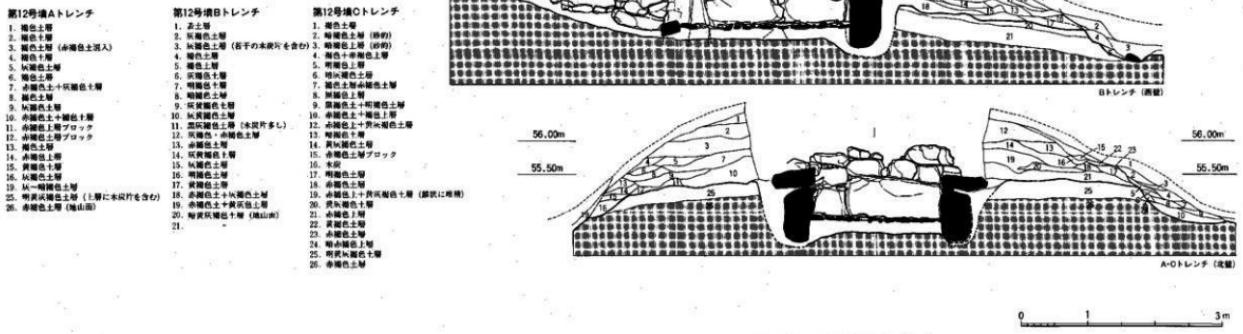
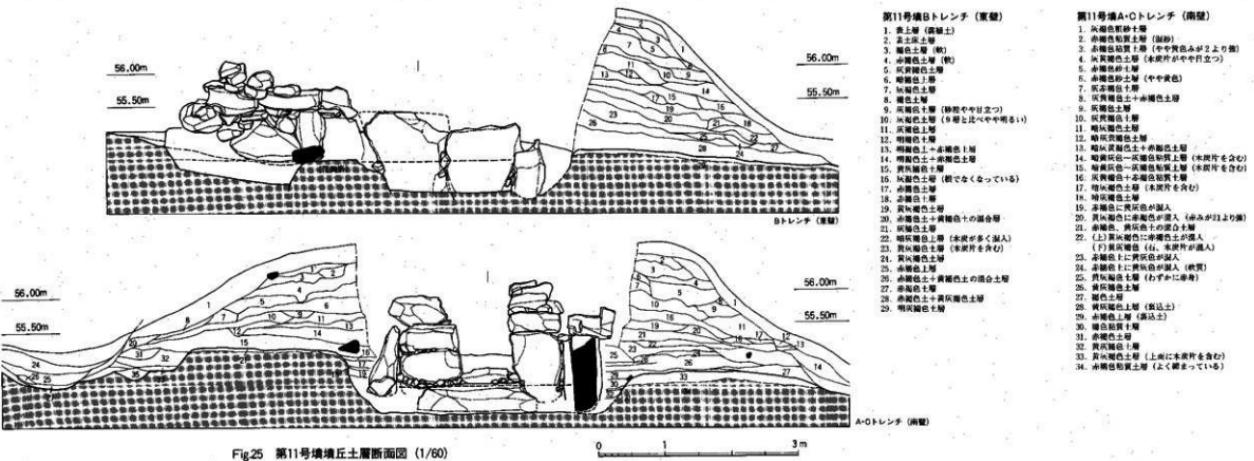


Fig. 26 第12号埴埴丘土層断面図 (1/60)

5) 出土遺物 (Fig.27~30、PL.18・19)

出土状況 盗掘を受けているために出土量は少ない。特に石室内からは、埋上より須恵器小片が数点出土したのみである。墳丘からは須恵器壺(身・蓋)、高壺、罐、甕、土師器甕、高壺などが出土している。特に第1区墳丘下位から裾にかけて遺物がまとまって出土している。周溝からは先述の器種のほかに須恵器脚付長頸壺・短頸壺・土師器壺も出土している。周溝第4区では、本来第12号墳墳丘第1区で供獻されていたと思われる遺物が多く出土している。

墳丘出土遺物 (90~102)

須恵器

壺蓋 (91~93) 口径は10.7~15.3cm、器高は4.1~4.4cmを測る。91はつまみを有する。いずれも天井部と口縁部の境に弱い沈線がめぐり、口縁部内面端部に段または弱い沈線がめぐる。91以外は焼成良好でよく焼き締まっており硬質である。天井部はシャープな回転ヘラケズリにより成形されている。92の内面天井部にはシッタ痕が残っている。

壺身 (94~99) 口径は12.0~13.6cm、器高は4.0~5.2cmを測る。口縁部はいずれも内湾気味に受け部から延び、丸くおさまる。回転ヘラケズリはシャープで作りは良好である。ただし99は厚手で作りがやや鈍い。95・98はシッタ痕をそのまま残している。96はヨコナデでナデ消している。焼成は良好。暗灰色~灰色を呈する。

短頸壺 (100) 口径8.5cm、器高8.6cmを測る。底部はやや上げ底氣味で、全体に扁平な作りである。直立する口縁部はやや長めである。肩部には自然釉が薄くかかっている。焼成良好。明灰色を呈する。

高壺 (101・102) やや長めの脚を有する。壺部はいずれも底部にヘラ先の押捺文、カキ目が施されている。102の脚には細長い三角形の透かしが三ヶ所切りこまれている。焼成良好。堅く焼き締まり硬質である。

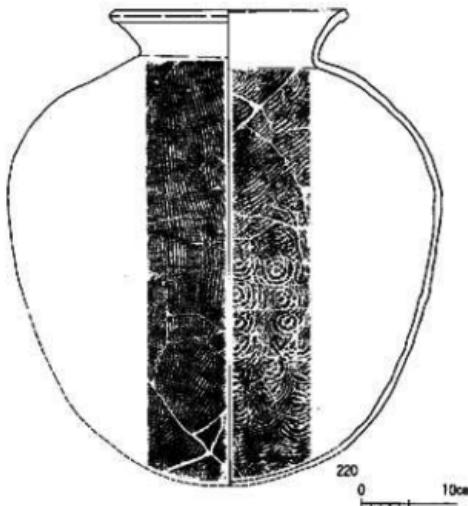


Fig.27 第11号墳墳丘出土遺物実測図 (1/6)

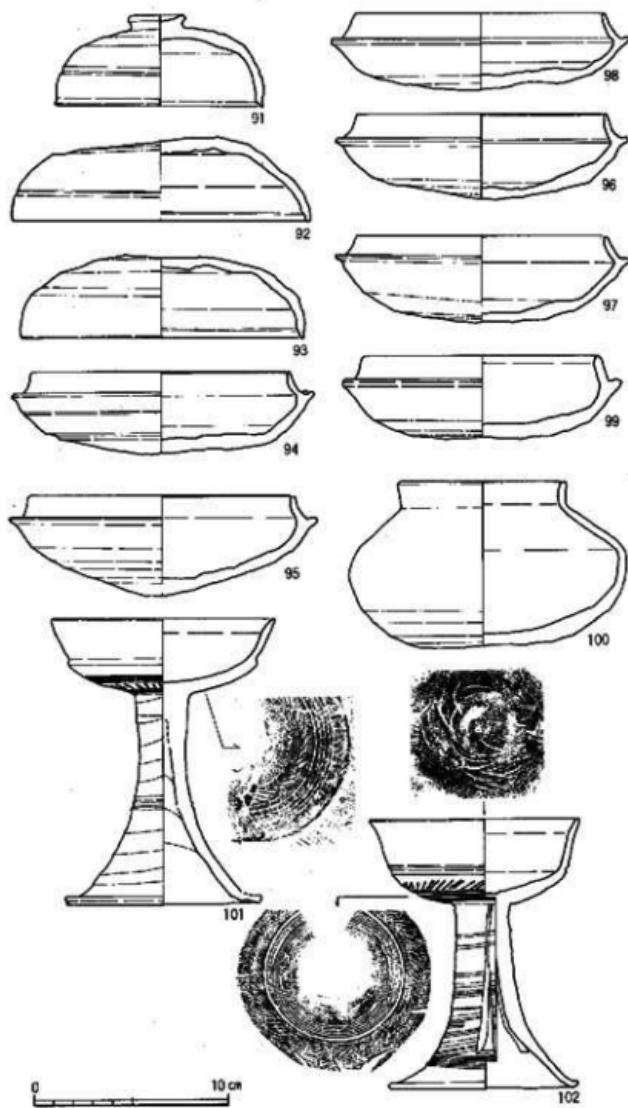


Fig.28 第11号墳墳丘(1・2・3区)出土遺物実測図(1/3)

周溝出土遺物 (103~119)

須恵器

坏蓋 (103~110) 口径は13.0~14.8cm、器高は3.1~4.4cmを測る。天井部と口縁部の境が不明瞭な丸みのある作りのもの (107・108) 以外は、比較的明確に段または凹線がついている。108以外は口縁端部の内面には沈線または凹線がめぐる。焼成は良好。色調はおおむね褐色白色~灰白色を呈す。106・108天井部内面にシッタ痕を残す。

坏身 (111~115) 口径は11.5~12.1cm、器高は3.5~4.9cmを測る。器形の特徴から2類に分類できる。111~113は全体に厚手で扁平なつくりである。209・211は器高がやや高く作りがシャープである。口縁部の立ち上がり角度も垂直に近い。焼成はいずれも良好で、堅く焼き結まっている。

短頸壺 (117) 口径7.0cm、器高6.7cmを測る。底部は回転ヘラケズリにより成形されている。肩から口縁部にかけては回転ナデ仕上げ。口縁部はかなり内傾している。体部は扁平である。焼成は良好。黒灰色を呈する。

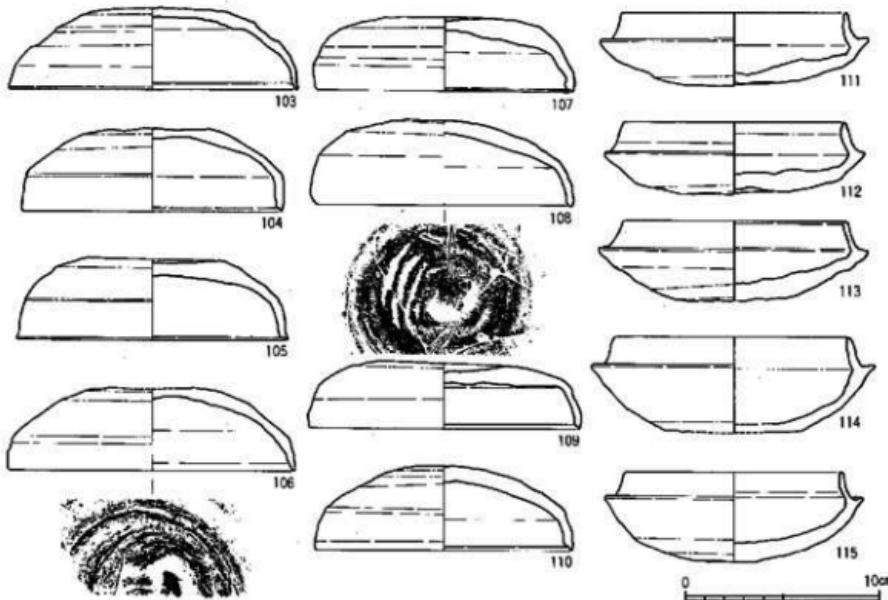


Fig.29 第11号墳周溝出土遺物実測図 (1/3)

長頸壺 (118) 口径11.2cm、器高20.9cmを測る。肩部は叩きの後カキ目調整、ナデ仕上げし、浅い凹線を二条めぐらす。頸部はその中位でわずかに屈曲し反りを強めている。口縁部内面には沈線が一条めぐる。頸部から肩には自然釉がかかる。焼成は良好。堅く焼き締まる。

提瓶 (119) 口径9.0cm、器高19.9cmを測る。頸部は直線的に外方に延び、口縁部は丸く肥厚しきや強く外反する。体部は正円に近い。背部はヘラケズリ・カキ目調整され扁平に仕上げている。色調は暗灰色。焼成良好。

土師器

杯 (116) 口径13.2cm、器高5.2cmを測る。全体に厚手である。内底部には指圧痕が残る。内外面ともナデ仕上げ。底部は平底に近い丸底。焼成は悪く脆い。色調は褐色を呈す。

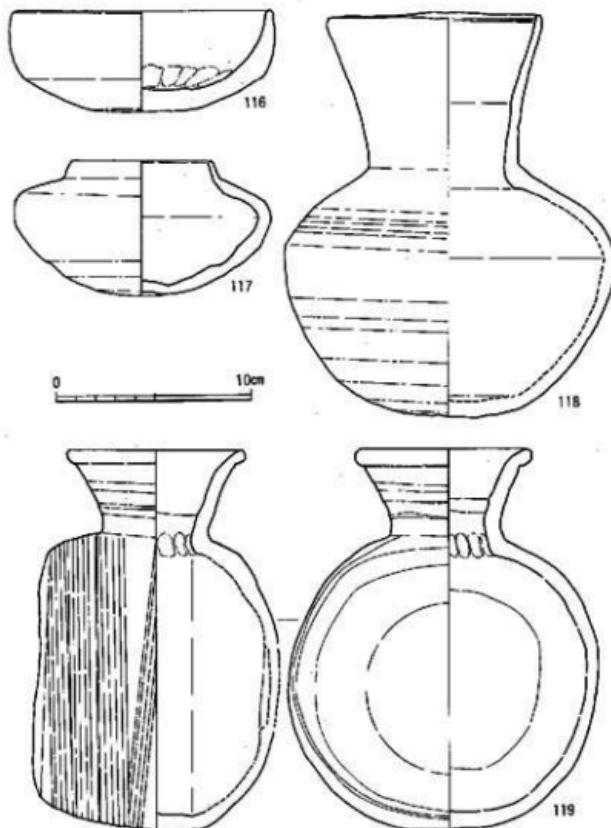


Fig.30 第11号墳周溝出土遺物実測図 (1/3)

(5) 相原C群第12号墳

1) 位置と現状 (Fig. 3 ~ 5、PL. 2 • 20)

調査区の北部に位置し、ほぼ真北へ延びる丘陵尾根筋からはずれた北東側斜面に占地している。墳丘西側は第11号墳周溝によって切られ、東側裾部は第22号墳周溝によって切られている。真南に位置する第9号墳とは石室中央間で約15m離れている。墳丘頂部は盃掘と石室の崩壊により大きく陥没していた。玄室の遺存状況はあまり良くない。現存の古墳頂部は、標高56.48mを測る。

2) 墳丘 (Fig. 4 • 5 • 26、PL. 20 • 21)

地山成形 古墳構築に伴う地山成形は、等高線に平行する馬蹄形の溝の掘削と、墳丘基底面の地山整地が行なわれている。馬蹄形溝は、墳丘西側部分が遺存しており、馬蹄形西側は第11号墳の地山成形時に、東側は第22号墳地山成形時にそれぞれ削平され消滅している。馬蹄形溝は墳丘の約1/3を取り込むように設定されていたものと思われる。溝の上端と基底面との比高差は0.25mを測る。

地山整地は斜面の傾斜に沿って平坦な面に仕上げられている。平面形はやや不整形な隅丸方形で、南北に7.30m、東西に約7.50mを測る。前部は緩やかな斜面となっている。平面形はやや不整形な隅丸長方形である。断面形は台状で、馬蹄形溝の基底面との比高差は約0.3~0.5mを測る。第2区の旧地表面は他の面より窪んでいるため、黄褐色粘質土を埋め立て整地面を平坦にしている。旧地表面と考えられる整地面は木炭小片が比較的多く分布している。また木炭片をブロック状に含む凹凸面が、第11号墳同様みられた。整地作業に際して古墳築造地点の木立の伐開と焼却が行なわれたことが推定できる。

墳丘 墳丘は、地山整地面を基底として盛土が行なわれている。墳丘は比較的良好に遺存していた。盛土の形成過程は、第9・11号墳同様大きく三段階にわけられる。第1段階は、草廻掘り方上端まで（石室腰石の裏込め）で、第2段階は石室側壁から天井部までの裏込めと被覆で、第3段階が墳丘成形である。第3段階の墳丘成形は明確に遺存していないが、B~Cの各トレンチでその墳丘裾部に一部が認められた。第2段階の盛り土は墳丘中位から上位にかけてまで一挙に多量の土砂を盛土したものと思われる。各層は叩き締めが十分ではなく全体に軟らかである。石室腰石の裏込めは、小礫を含む赤褐色粘質土と灰褐色粘質土を厚さ約10cm前後で版築状に堅く叩き締めている。墳丘規模は、現存径が約9.50m、現存高が地山整地面から1.4~1.6mである。復元径は約10.5~11mと思われる。高さは墳丘地山整地面から1.8~2.0mほどと思われる。

なお、墳丘第1区において、須恵器杯（身・蓋）による墳丘祭祀が行なわれている。

3) 石室 (Fig.31、PL.21)

石室は単室の両袖型横穴式石室である。南西に開口し、その主軸はN-46°-Eをとる。天井部、側壁上半部は崩壊し大量の土砂とともに石室内に埋没していた。壁体は腰石から2~3段目ほどが遺存しているのみである。石室右側壁は全長4.42m、左側壁は全長4.46mを測る。

墓 壇 地山整地面から約80~100cmの深さではば垂直に掘り下げている。羨道部床面はやや急な傾斜をついている。平面形はやや不整形な隅丸長方形で右側辺5.60m、左側辺5.40m、奥壁側3.45mを測る。墓壇の南壁は羨道部を収込み、墓道掘り方に連結している。

玄 室 玄室の遺存状況は、7基の古墳中ではもっとも良好である。玄室床面の平面形は奥壁が若干広い長方形で、奥壁幅2.0m、前幅1.8m、右側壁2.35m、左側壁2.33mを測る。石室の構築に用いられた石材は花崗岩である。腰石は約25~30cm厚の大きめの板石をいずれも垂直に据えている。この腰石の上に扁平な板石を積み上げている。墓壇床面上に小礫・木炭片を多く含む褐色粘質土を厚さ約15cmほど埋め整地して、その上から扁平な板石や転礫を床面全体に敷きつめている。盜掘によってその一部は剥ぎ取られているが、遺存状況は良好である。玄室中央からやや南側の床面上に、直径約30cm程の範囲内に薄く赤色顔料が散布していることが観察できた。ガラス小玉や、鉄錫片が東側壁側に若干出土している。

羨道及び閉塞状況 羨道部は平面形がへの字形で、広がりながら南南西にむかって開口している。開口方向は玄室主軸から東にやや偏っている。羨道部床面は墓壇床面から連続した傾斜角度で徐々にせり上がりながら墓道へ接続している。墓道壁体は扁平な花崗岩を小口を揃え2~4段積み上げ構築している。前幅1.3m、奥幅0.85m、長さ右側壁2.1m、左側壁1.7mを測る。閉塞は玄門部から行なわれている。高さ約0.61m、幅0.65m、厚さ0.22mの扁平な板石を框石に接してやや内傾させ立てかけ、墓道側から褐色粘質土で突き固めて埋め戻し、若干の小礫を積み上げ閉塞している。

墓 道 墓壇および羨道から連接して南西へ延びている。石室主軸よりやや東に偏っている。墓道は南方向に向きを変え、墳丘南側から第22号墳南側を抜けていたと思われる。長さ約0.8m、幅約1.7m(掘り方上端)を測る。出土遺物はいずれも墳丘祭祀用の須恵器片が二次的な堆積でみられた。

4) 周溝 (Fig.4・5、PL.20・21)

周溝は遺存状況が比較的良好で、墳丘第1区から第4区裾部で確認できた。幅約2.0m、深さ20~28cmを測る。暗褐色~黒褐色粘質土を覆土としている。出土遺物はわずかである。第5号鏡十墳によって切られている。

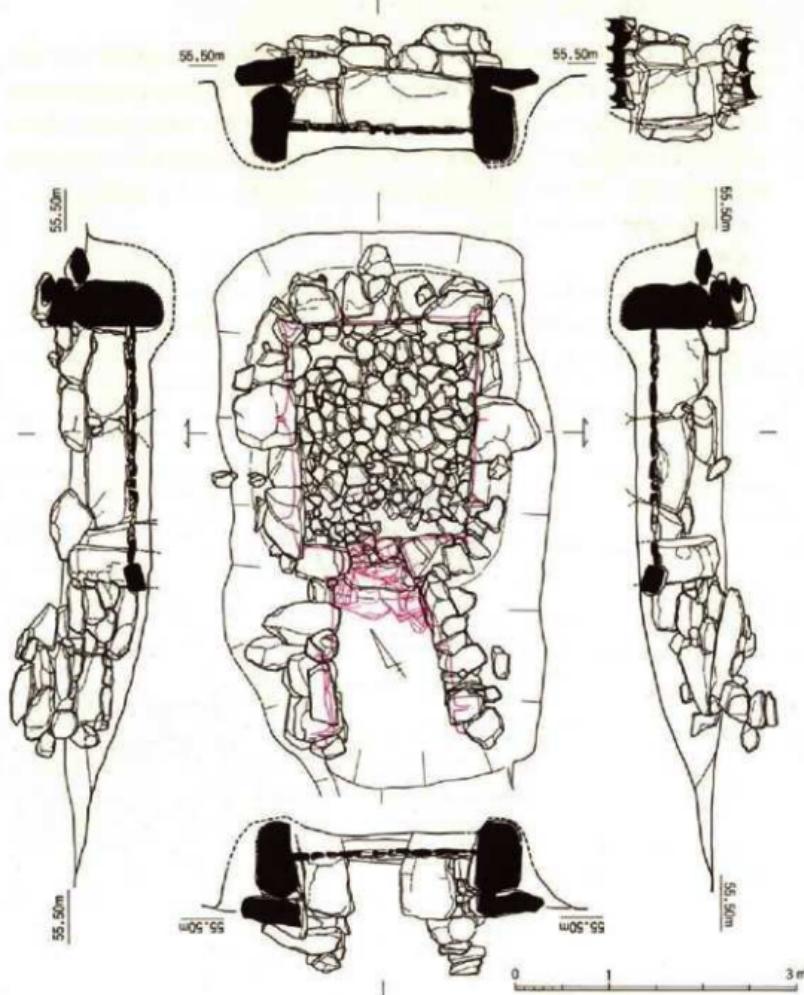


Fig.31 第12号填石室及び断面図 (1/60)

5) 山土遺物 (Fig.32~34、PL.22・23、Tab.2)

出土状況 本墳も他の古墳と同様遺物の出土量は少ない。石室内からは須恵器坏（身・蓋）高坏片、長頸壺等のはかガラス小玉・鉄鏃が出土している。ガラス小玉と鉄鏃は石室埋土の水洗選別によって検出した。玄門～羨道部にかけて須恵器坏（身・蓋）が出土している。墳丘第1区からは墳丘裾部にまとまって須恵器高坏等が出土。いずれも二次的に堆積したもので原位置は留めていない。なおガラス小玉・鉄鏃は図示していない (PL. 23、Tab.2参照のこと)。

石室内出土遺物 (120・122・124・125)

須恵器

坏蓋 (122) 口径13.7cm、器高3.6cmを測る。天井部は回転ヘラケヅリによる成形。器形は扁平である。天井部と口縁部との境は弱い段を有し、口縁端部には非常に弱い沈線をめぐらす。

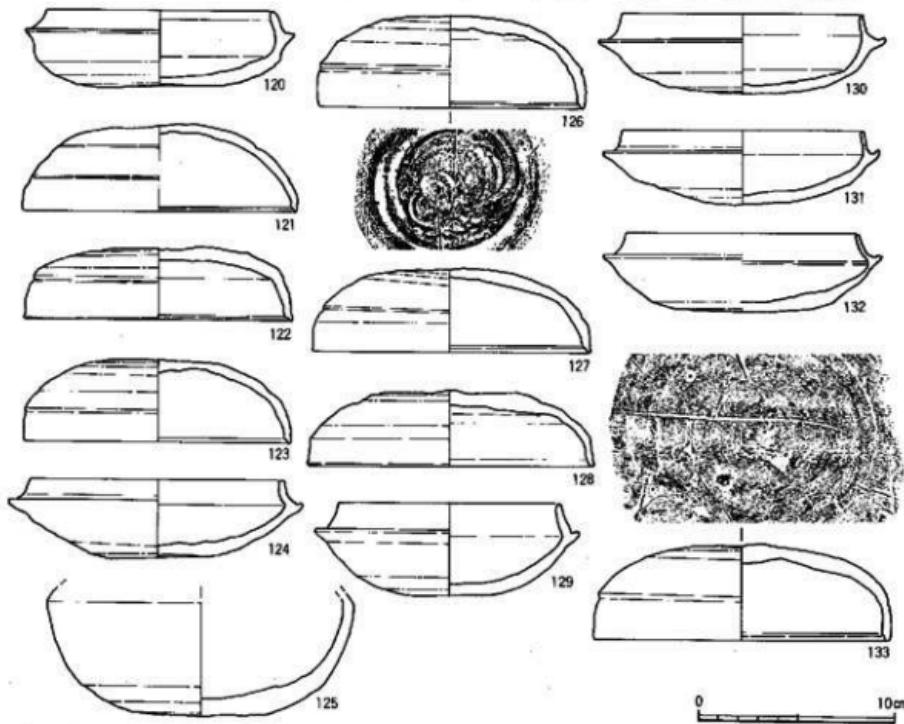


Fig.32 第12号墳石室・羨道・羨門出土遺物実測図 (1/3)

焼成は良好。灰白色を呈する。

坏身 (120・124) 口径は11.4~12.8cm、器高は3.9~4.0cmを測る。底部はいずれも回転ヘラケズリ。120の内底部にはシッタ痕が残っている。124はナデ消している。124の体部は受け部下で強く屈曲し、立ち上がっている。全体に丸みがあり厚手である。口縁部はいずれも内傾する。焼成良好。明灰色~灰色を呈する。

壺 (125) 長頸壺もしくは短頸壺の底部片である。底部は厚く安定感がある。外面はヘラケズリによって成形。焼成良好。色調は灰~黒灰色。

装身具

小玉 (00368~00402) ガラス製小玉は33点出土した。大きさは最小のもので径3.3%、最大のもので径5.0%を測る。色調は黄色(00368~00369・00370~00373・00380)、透明な青緑色(00386~00391)、透明な濃紺色(00374~00379・00381~00385・00392~00399・00401)赤色(00400)がある。

糞道部出土遺物 (121・123・126~133)

須恵器

坏蓋 (121・123・126~128・133) 口径は13.5~14.2cm、器高は4.0~4.7cmを測る。いずれも天井部から口縁部の境には弱い凹線をめぐらし、全体に丸みのある作りになっている。口縁端部は128以外はいずれも弱い段を有する。133は口縁端部内面側に沈線を強くめぐらす。123・126の天井部内にはシッタ痕が残る。127はナデ消している。焼成は123以外は良好。色調は暗灰色~黒灰色を呈する。なお133の天井部にはヘラ記号がある。また自然釉が薄くかかれる。

坏身 (129~132) 口径は11.3~12.4cm、器高は3.9~4.8cmを測る。129は他と比べ器高が高い。他はやや扁平な器形となっている。いずれも胎土は精良で焼成良好。132の内面にはヘラ記号がある。

墳丘出土遺物 (134・135~137・140・142~147)

須恵器

坏蓋 (135・136・140・141) 口

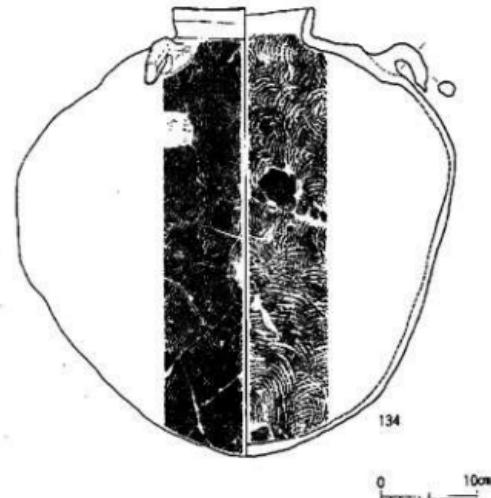


Fig. 33 第12号墳墳丘出土遺物実測図 (1/6)

径は12.4～14.8cm、器高は3.2～4.8cmを測る。140以外は口縁端部に段もしくは沈線を有す。いずれも口縁部と天井部との境に弱い沈線をめぐらしている。

环身（137・142～145） 口径は11.9～13.1cm、器高は3.7～5.0cmを測る。143の口縁部は内湾しながらほぼ直に立ち上がる。他は受け部が斜めに引き出され、口縁部は直線的に内傾している。焼成は144が軟質で脆いが、他は良好。色調は灰色～青灰色。143・144は赤褐色。

高杯（146・147） 口径は12.8～13.4cm、器高は15.0～18.0cmを測る。146は焼成時の歪みが大きい。147は脚部に長方形の二段の透かしを三方に配する。杯部底には櫛描波状文を施す。焼成はいずれも良好。色調は146は暗灰色で、147が明灰色。

三耳付甕（134） 口径14.7cm、器高46.8cmを測る。口縁部は短く直立する。肩部には粘土組の一方のみを接合している。器形は卵形であるが、焼き歪みのため凹凸が激しい。体部には自然釉が薄くかかる。

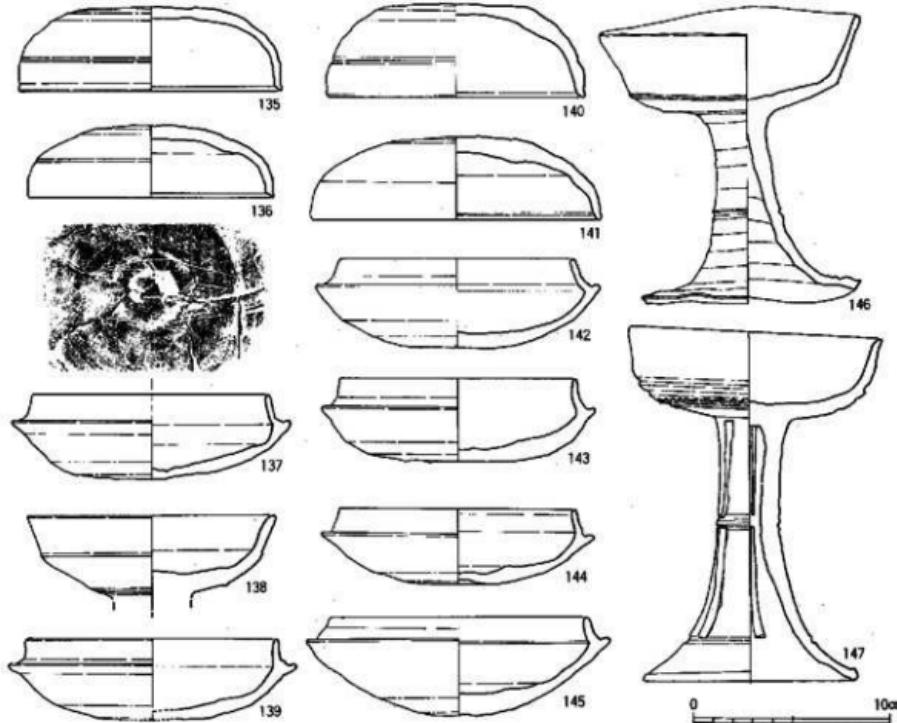


Fig. 34 第12号墳周溝・墳丘出土遺物実測図 (1/3)

(6) 相原C群第21号墳

1) 位置と現状 (Fig. 2 ~ 4, PL. 1 • 2)

古墳群の南西隅に位置し、第9号墳と第6号墳との間に占地する。西側の第6号墳と墳丘端が接する。墳丘の東側は土取りのため、大きく削られている。墳丘上面は58.5m、東側裾で56.2mを測る。石室は土取りの際に東壁が破壊されている。

2) 墳丘 (Fig. 3 • 4, PL. 24)

地山成形 本墳は西から東に延びる丘陵の斜面に位置し、南側に開口する石室を構築したものである。地山成形作業は墳丘基底面を整地している。基底面の整形は主に石室構築のためかあまり広い範囲で行ってはいない。東側にゆくにつれ、傾斜が増す。標高は約58.0mを測る。

墳丘 墳丘は削平のため、ほとんど残っていない。盛土は西側で約0.5m、東側で約0.3mの厚さを測る。墳丘は石室の墓壙に腰石を据えた後に、石室を構築しながら盛土している。盛土は壁石の裏込め部分は比較的薄く積み上げるが、版築はなされていない。

本墳では墳丘の前面で墓道に直交するように外護列石が検出された。列石は墓道東側の墳丘

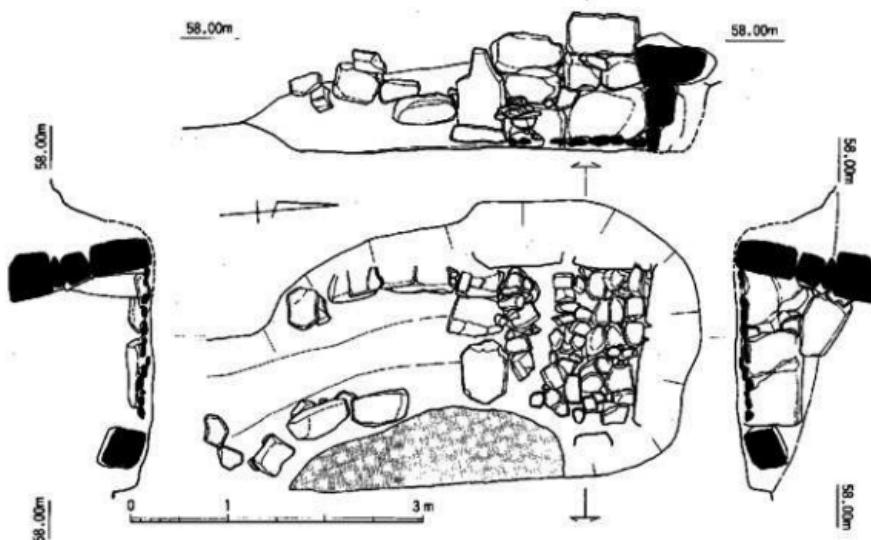


Fig.35 第21号墳石室平面及び断面図 (1/60)

端に約2m分が残存する。高さ0.40cmを測る。石は人頭大の花崗岩で3段に積まれる。

墳丘の平面形は東、南側が削平を受けているため、不明瞭だが、円形を呈し、直径約7~8mを測るものと思われる。

3) 石室 (Fig.35・36、PL.24・25)

本墳の埋葬施設は主軸をN4°-Eにとり、南側に開口する単室の両軸型横穴式石室である。石室は天井石と右側壁石を欠失している。

石室は墓の内側に構築され、葬道部の先に墓道が続く。墓道は削平されている。石室は長方形の玄室を有し、玄室の長軸部分に細長の葬道が連結する。左側壁で3.6m、右側壁で3.9mを測る。石材には主に花崗岩を使用する。

玄室 奥壁幅1.6m、前幅1.2m前後、左側壁で1.5mを測る。右側壁は不明である。壁は幅60~100cm、高さ50cm程の転石を立てて腰石としている。奥壁に2石、左壁2石使用する。腰石より上は人頭大の転石を持ち送りながら積み上げている。奥壁と側壁の隅角の體の構築は腰石より上は三角持ち送り手法を用いる。天井石はすでに消失している。残存する玄室の内

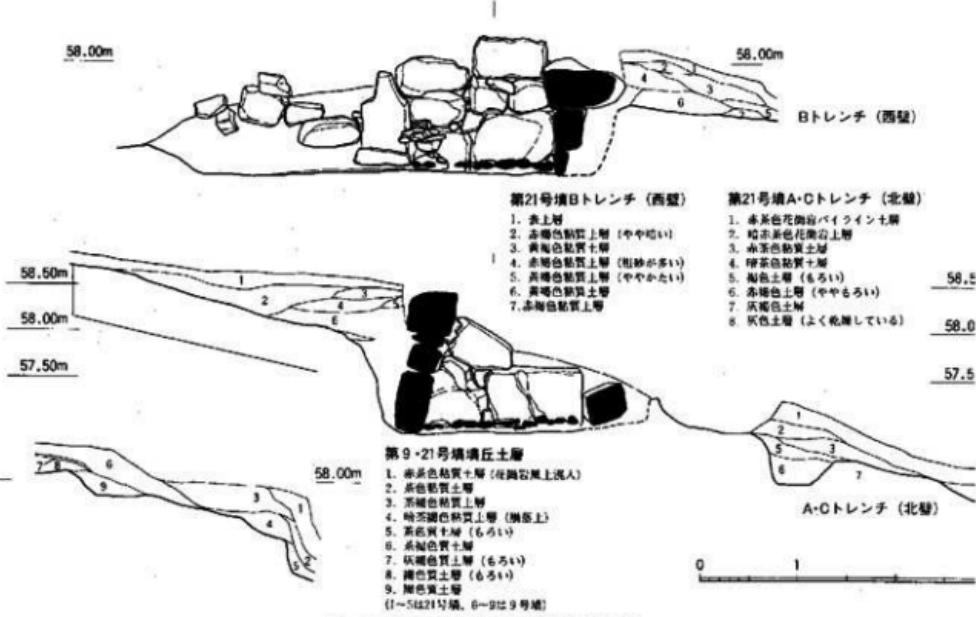


Fig.36 第21号墳墳丘土層断面図 (1/60)

側の高さは約1.3mを測る。

玄門部は素型の両輪で、高さ約70~80cmの転石を立てて袖石としている。袖石幅は左が30cmを測る。

床面には10~20cm程の転石が敷かれている。敷石は比較的良好に遺存している。

葬道及び閉塞状況 天井部は欠失し、両側壁とも腰石が残るのみである。葬道は玄室長軸に対して、やや右向きにつく。葬道長は左側壁が1.7m、右側壁が2.1mを測る。幅は墓道側で1.1mを測り、やや開く葬道である。壁は玄門から1石までは玄室の基底面と同じ高さに幅60cm、高さ40cm程の転石を腰石とし、その上に人頭大の転石を積み上げていく。それより先、墓道までは人頭大の転石を地山から30~40cm浮いた所から積み上げている。天井石の架構の有無による相違と考えられる。

床面には1カ所樋石が配置される。樋石は奥壁から1.5mにあり、2個の割石を組み合わせて閉塞石の根石としている。幅約50cmを測る。床面には敷石は認められず、直接地山となっている。墓道にゆくにつれて若干傾斜していく。

閉塞施設 樋石を根石とした閉塞施設が存在する。人頭大の転石を積み上げて閉塞するもので現存高40cm、幅100cmを測る。石積はほとんど崩れている。積み方は下部には大きめの石を、上にゆくにつれて小さい石が使用されている。

墓道 墓道は葬道端から直線的に接続する。現存長1.0m、幅1.0m、深さ0.4mを測る。墓道は地山を削って造られており、暗褐色粘質土が堆積する。墓道は南にゆくにつれて浅くなり、断面形はU字形を呈する。

墓壙 地山成形面は東から西に傾斜しており、掘り方はその傾斜に直行して掘りこまれている。掘り方は玄室側では墓壙の平面形は隅丸長方形を呈する。葬道付近になると徐々にすぼまっていく。規模は全長4.5m、幅2.9m、深さ0.8mを測る。

4) 遺物 (Fig.37~39, PL.26・27)

遺物出土状況 石室は天井石が取り去られ、側壁の一方が完全に失われているが、遺物は比較的良好な遺存状態で出土した。玄室の遺物は奥壁側で出土した。玄室からは須恵器、土師器、耳環等が出土した。葬道からは須恵器、土師器、耳環等が出土した。墓道からは少量の須恵器等と共に銅鏡が出土した。この他、墳丘盛土中から須恵器、土師器等が出土した。特に墳丘東側から多量に出土したが、型式的にみて本墳よりかなり遅るものが多く、これらは第9号墳に本来伴うものと考えられる。

以上、石室出土の遺物と墳丘出土の遺物を列記すると以下の通りになる。

石室

墳丘

装身具

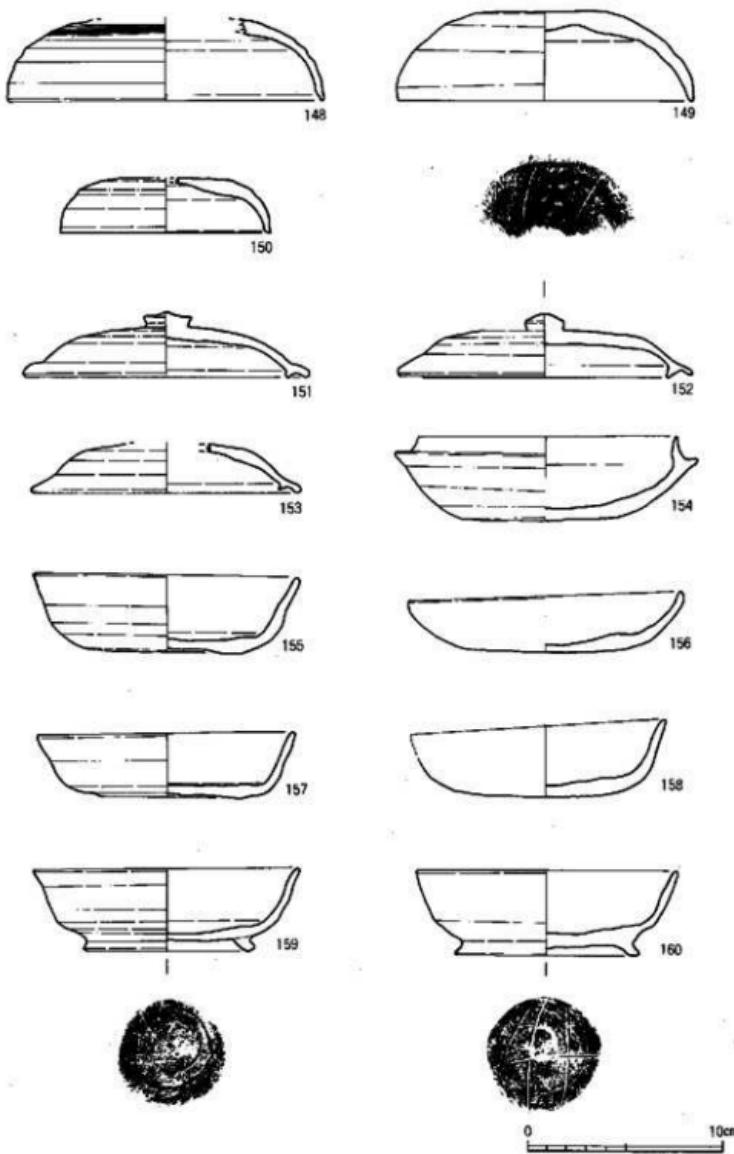


Fig.37 第21号墳出土遺物実測図 (1/3)

耳環	2	
容器		
須恵器	12	8以上
土師器	1	
鉄滓	3	

石室内の遺物は比較的良好に残っている。墳丘出土のものは破碎されているものが多い。以下、遺物の特徴を出土地点に関係なく述べていく。

須恵器 (148~169)

坏蓋 (148~153) 坏蓋は天井部が丸く、体部との境が不明瞭のもの (148~150) と内側にかえりをもち、天井部に宝珠つまみがつくもの (151~153) がある。前者はすべて墳丘から出土した。148は天井部にカキ目を施す。口縁端部はわずかに段がつく。高坏の蓋である。149は口縁端部を丸く仕上げる。天井部の1/2に回転ヘラケズリを施す。150は口縁端部を面取りする。天井部の約1/2に回転ヘラケズリを施す。後者は石室内で出土した。151、152は天井部に扁平な宝珠つまみがつく。152は天井部にヘラ記号がある。153は天井部を欠いている。

坏身 (156~160) 坏身は受け部をもつもの (154) ともたないもの (155~160) がある。さらに後者には底部に高台がつくもの (159、160) がある。154は墳丘から出土した。受け部は短く内傾して立ち上がる。端部は丸く仕上げる。底部の約1/2に回転ヘラケズリが施される。155~157は石室、158は墳丘から出土した。158の体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。底部はナデである。159、160は石室から出土した。体部は直線的に立ち上がる。底部にはハの字形に開く高台がつく。いずれも、底部外面にヘラ記号がある。

高坏 (163~166) 高坏は有蓋のもの (163、165)、無蓋のもの (164、166) がある。163、165は墳丘から出土した。坏部の口縁部は内傾し、端部は丸く仕上げる。163は底部にカキ目を施す。脚部は長脚の二段透かしである。長方形の透かしが二段に開けられる。中央には二条の沈線が施される。164は墳丘、166は石室から出土した。166は坏の外面にヘラ記号がある。

長頸壺 (167、169) いずれも石室から出土した。169は底部にはハの字形に開く高台がつく。

土師器坏 (170) 170は石室から出土した。丸底で、底部はヘラケズリが施される。

平瓶 (168) 石室から出土した。体部は丸く、肩部は張る。体部上半にカキ目を施す。

装身具 (Fig.38)

耳環 (161、162) 161は銅芯に金箔が施されている。部分的に剥落しているが比較的良好に残っている。162は、銀芯である。161の外径は長径が2.2cm、内径が2.1cm、162の外径は長径が2.1cm、短径が1.8cmを測る。

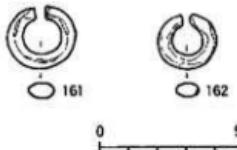


Fig.38 第21号墳出土遺物実測図(耳環・1/2)

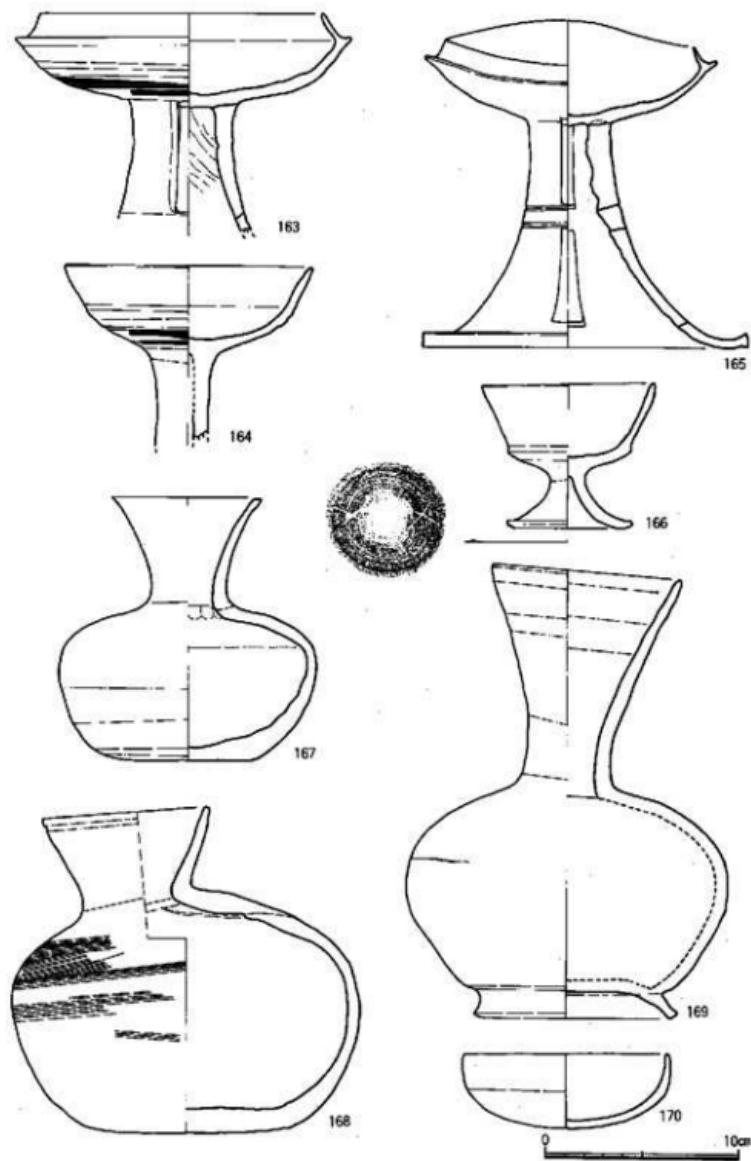


Fig.39 第21号墳出土遺物実測図 3 (1/3)

(7) 相原C群第22号墳

1) 位置と現状 (Fig. 3 ~ 5, PL.28)

調査区の北東部に位置し、丘陵尾根筋から東側の斜面に占地している。墳丘西側は第12号墳に接し、北側～東南側裾部は自然崩落と今回の土取り作業によって消滅している。墳丘頂部は盜掘と石室の崩壊により大きく陥没していた。現存の古墳頂部は、標高54.7mを測る。

2) 墳丘 (Fig.40, PL.28)

地山成形 古墳構築に伴う地山成形は、丘陵尾根筋に直交する馬蹄形の溝の掘削と、墳丘基底面の地山整地が行なわれている。馬蹄形溝は、墳丘南側から第12号墳墳丘裾部を一部削平し、北側の墳丘第3区まで掘削されている。溝両端は現存していないが、墳丘の約3%を取り込むように設定されている。両端部の推定長は約8mで、溝の上端と基底面との比高差は0.25~0.45mを測る。地山整地は斜面の傾斜に沿って平坦な面に仕上げられている。平面形はやや不整形な橢円形で、長軸が5m、短軸が3.75mを測る。断面形は台状で、馬蹄形溝の基底面との比高差は0.3~0.5mを測る。

墳丘 墳丘は、地山整地面を基底として盛土が行なわれているが、盛土のほとんどは流失しており、盛土の形成の状況は不明である。復元径は6.5~7.0m、高さは地山整地面から1.5mか。

3) 石室 (Fig.40, PL.28)

石室は单室の両袖型横穴式石室である。東に開口し、その主軸はN-51°30'-Wをとる。壁体は腰石から1段目が遺存している。石室右側壁は全長2.66m、左側壁は全長2.68mを測る。

墓壙 地山整地面から約1.0~1.1mの深さで掘り下げている。平面形はやや不整な方形で長さ4.2m、幅4.0mを測る。墓壙の南端は羨道部端に一致している。

玄室 平面形は奥壁がやや外湾する方形で奥壁幅1.62m、前幅1.47m、右側壁1.89m、左側壁1.59mを測る。石材は花崗岩を用いる。腰石はいすれもやや内傾気味に据えられており一抱え以上ある大石を小口を内傾させ積み上げている。玄室床面は敷石が部分的に残存している。墓壙床面と敷石間は小石をやや多く含む明褐色粘質土により整地している。

羨道及び閉塞状況 羨道は平面形がコの字形でやや広がり開口している。前幅0.75m、奥幅0.6m、長さ右側壁0.77m、左側壁1.09mを測る。羨道壁体は墓壙内に玄室と同様な大石を据え構築している。閉塞は玄門部から行なわれている。羨道部いっぱいに人頭大の礫石を積み上げ閉塞している。

墓道 墓壙から連接して南へ延びている。長さ約0.53m、幅約1.2mで確認された。

すでに削平されており墳丘外には墓道の痕跡は認められない。墓道部の方向性からみて、東側斜面を下り、未調査の第16号墳の南側に抜けるものと思われる。

4) 周溝 (Fig. 4・5, PL.28)

周溝は遺存状況が悪く、墳丘第2区・3区で幅1.5m程が確認された。第5号土塗により切られている。

5) 出土遺物

石室内がかなり荒らされていたということもあり、遺物の出土量はきわめて少ない。須恵器坏（身・蓋）片が、石室内埋土から、土師器片が、周溝から若干出土しているのみである。小片のため図示しえないが、須恵器坏身片は、小田氏編年のⅢb・Ⅳ期に含まれる破片が出土している。いずれも二次的な混入品である。



C群第22号墳石室遺存状況（南西から）

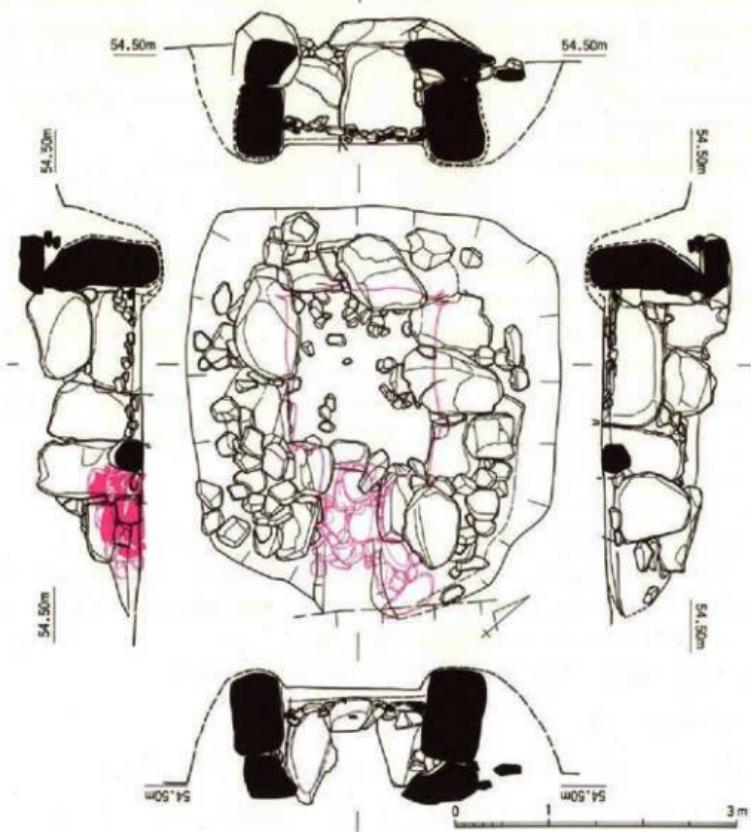


Fig.40 第22号墳石室平面及び断面図 (1/60)

(8) 焼土壙 (Fig. 41. , PL. 29)

1) 第1号土壙

第8号墳の南東側に位置する。第9号墳周溝埋土を切り、掘削している。平面形は隅丸の羽子板状を呈している。断面形は逆台形で、床面は平坦である。長軸は第9号墳周溝の傾斜に直交して設定されている。埋土は木炭片、焼土片が多く含む暗褐色粘質土、黒褐色土である。壁面は中位から上部が、2~3cmの厚みをもって赤褐色に焼けた状態である。主軸長1.6m、幅1.28m、深さ0.36m前後を測る。

出土遺物は須恵器の小片が二次的に混入している。図示し得るものはない。

2) 第2号土壙

第8号墳から第11号墳の傾斜面に位置する。ちょうど真北へ延びる尾根筋上にあり、かなり傾斜の強い地点である。平面形は隅丸の羽子板状を呈している。断面形は逆台形で、床面は中央部がわずかに盛んでいる。長軸は斜面の等高線に直交している。埋土は木炭を多く含む黒褐色土が床面上にあり、その上部には木炭層が約10cmの厚さでレンズ状に堆積している。傾斜の高い側の壁（奥壁と呼ぶ。以下同じ）と両側壁の中位から上部が特に強く焼けており、3cm前後の厚さで赤褐色を呈している。主軸長1.9m、幅1.23m、深さ0.28m前後を測る。

3) 第3号土壙

第11号墳の南側に位置する。第11号墳周溝が浅い窪み状になっている段階に掘削されたもので、周溝埋土を切って掘削している。平面形は隅丸の羽子板状の長方形。長軸は溝の傾斜方向に直交している。埋土は全体に大量の木炭片を含んでいる。奥壁と両側壁は焼けて赤褐色になっている。主軸長1.98m、幅1.35m、深さ0.38m前後を測る。

出土遺物は須恵器と土師器小片が数点出土しているのみで図示し得るものはない。

4) 第4号土壙

第3号土壙の北側にL字形をなして位置している。第11号墳周溝を切って掘削している。全面にわたって木炭片がみられ、特に第3号土壙の主軸上の北側部分には木炭片が層をなして堆積しており、木炭を搔きだしたかのような状況であった。第3号土壙と関連した遺構であろうと考えられる。

5) 第5号土壙

第12・22号墳の墳丘および周溝を切って掘削されている。平面形は隅丸の羽子板状を呈する。

断面形は逆台形。長軸は周溝壁斜面の等高線に直交している。壁は上記の土壤と同様な焼き結まりがみられる。木炭片はわずかしか検出されていない。主軸長1.45m、幅1.33m、深さ0.24m前後を測る。

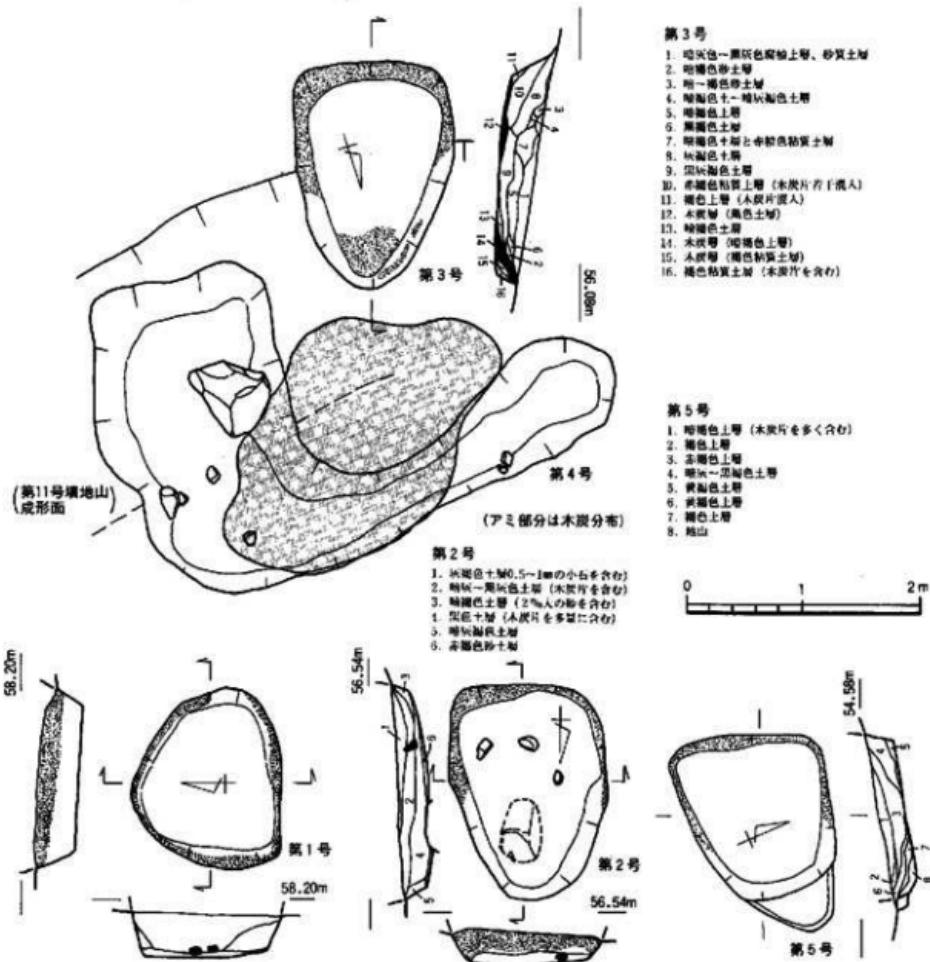


Fig.41 烧土壤 (第1~5号) 平面及び断面図 (1/50)

(9) 小 結

以上、調査で得られた所見について述べてきたが、ここではC群の調査成果について簡単に整理しておく。なお細かな時期比定や古墳群形成等の問題点については総括で検討したい。

- 1) 今回調査した第6号・8号・9号・11号・12号・21号・22号墳はC群の中では最上位から中位に位置する。いずれも標高54~60mを測る尾根筋上もしくはその近辺の東側斜面上に占地し、石室は、東側谷部に開口する第22号墳以外は南に向かって開口している。
- 2) 墓丘規模は直径が8~13m、高さは2~3mを測る規模のもので、いずれも单室の両袖型横穴式石室である (Tab.1)。出土遺物からみると (Tab.5)、全体的には、小田富士雄氏編年の須恵器Ⅲa期からⅥ期にわたる時期がおおむね考えられ、実年代6世紀半ばから7世紀半ばにかかる約1世紀の造営期間が考えられる。
- 3) 各古墳の周囲から、平面形が羽子板状をなし、側壁が焼けた土壌が確認された。うち4基は傾斜面に対して主軸を直交させ、床面は傾斜しており、幅の広い側の壁（奥壁）が特に強く火を受けており、いずれも木炭片が多く含むという共通点がみられた。
- 4) 以上の遺構の直接の切り合い関係が明確なものは下記のとおりである。
第8号墳→第9号墳→第21号墳、第6号墳→第21号墳、第12号墳→第11号墳、第12号墳→第22号墳。第11号墳→第3号・第4号焼土壙、第22号墳→第5号焼土壙である。
第1号~5号焼土壙の時期は、時期比定の目安となるべき遺物が皆無であるため明確ではないが、古墳周溝との切り合い関係からみて古墳営墓の最終時期と並行もしくはその後のものと考えられる。その性格等については総括で述べたい。
- 5) 出土遺物は、それぞれの古墳がかなり激しい盗掘に遭っているために、古墳被葬者を特色づける資料に欠けた。第6号・21号墳では耳環が、第8号・12号墳では鉄鎌・刀子などが若干出土しており、また第6号・9号墳では鉄滓が墓道および墓壙に供獻されていることなどが注意される。また墓道の両脇における墳丘祭祀の痕跡が、第9号・11・12号墳で確認された。

3. 相原E群

(1) 第1号墳

1) 位置と現状 (Fig. 3 PL.30)

本墳は西側に東北から入り込む谷を臨む丘陵の尾根筋に占地する。この尾根筋には本墳が属するE群の古墳が20基分布するが、本墳は一番高所部、墳頂で標高55.9mを測る地点に立地する。今回の調査の原因は土取り造成ということであったが、調査時点では本墳の墳丘際まで上取り作業が進行しており、発掘作業を行う事が非常に危険な状況にあった。また土取りの為の仮設道路が墳丘裾を削って作られていたり、墳丘盛土が流失し、天井石の一部が取り去られ、石室部が土砂によって埋没し陥没しているなど、遺存状況は余り良く無かった。

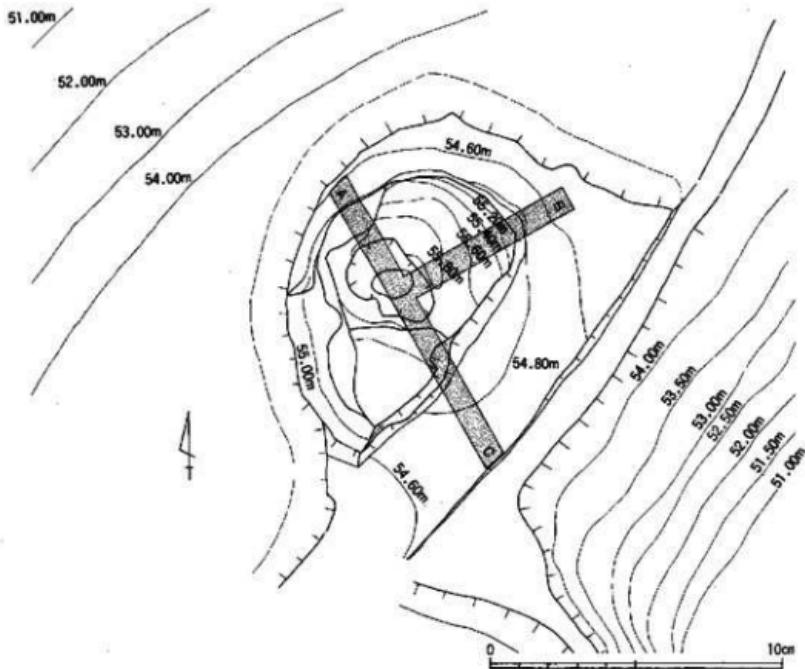


Fig.42 相原古墳群E群第1号墳現況地形測量図 (1/200)

2) 墳丘 (Fig.42~44、PL.31)

地山成形 本墳は尾根筋を平坦に地山成形して作り上げたものであるが、前述したように土取り造成工事でかなり破壊を受けていることや、調査範囲が墳丘のみに限定されたことから、通常認められる馬蹄形溝などの地山成形地業は確認出来なかつた。ただし、基盤面（地山）の花崗岩バイラン土面の高所部が石室北東側にあることから、尾根筋のやや高まり部分を造成したことが考えられる。その造成範囲は、北側では玄空中心から3.2mあたり、東側では3.5mあたりになる。基盤土は西から南側に向かって低くなり、特に南西側では花崗岩の露頭を抜いた為であろうか基盤面が乱れ、その上に黄褐色から明赤褐色の余り締まらない土が二次的に堆積していた。

墳丘 墳丘は基盤面から黄褐色又は橙色土を主体とする上で盛り上げられている。残存状況は不良な為確定は出来ないが、現存規模は規定面で東西7.8m、南北9.0mで、墳丘高は最大で1m前後を測る。墳丘平

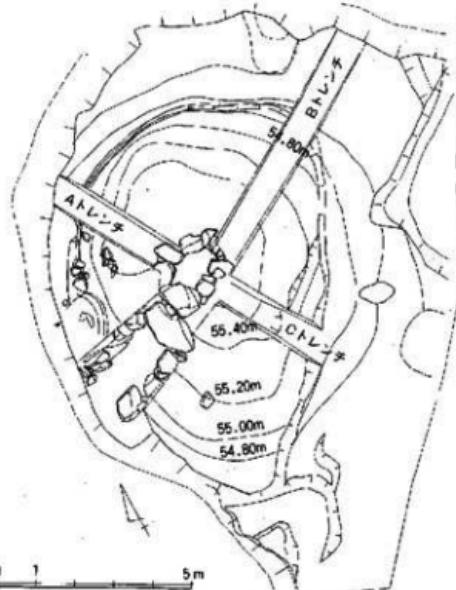


Fig.43 相原古墳群E群第1号墳墳丘遺存状況測量図 (1/150)

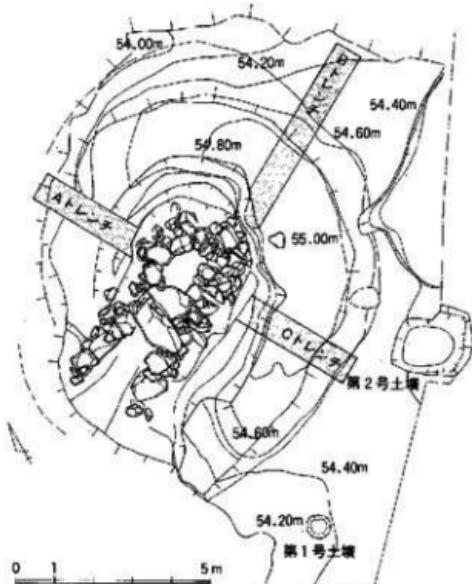


Fig.44 相原古墳群E群第1号墳地山成形状況図 (1/150)

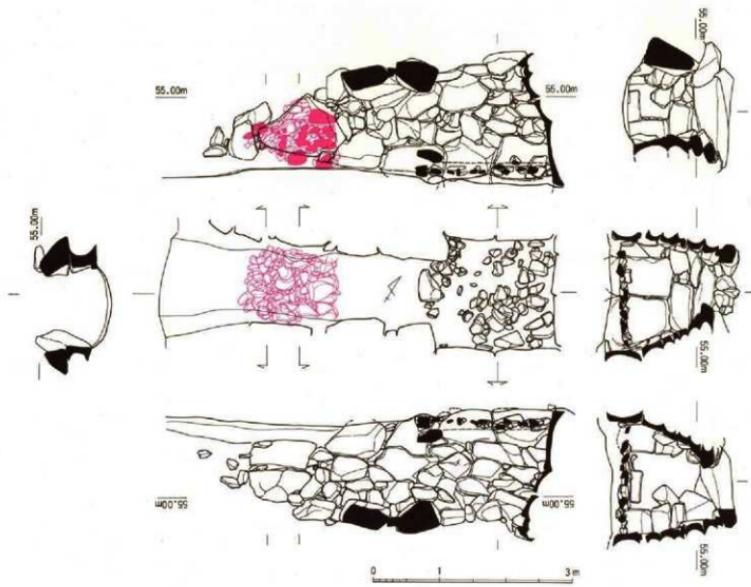


Fig.45 E群第1号墳石室平面及び西面図 (1/60)

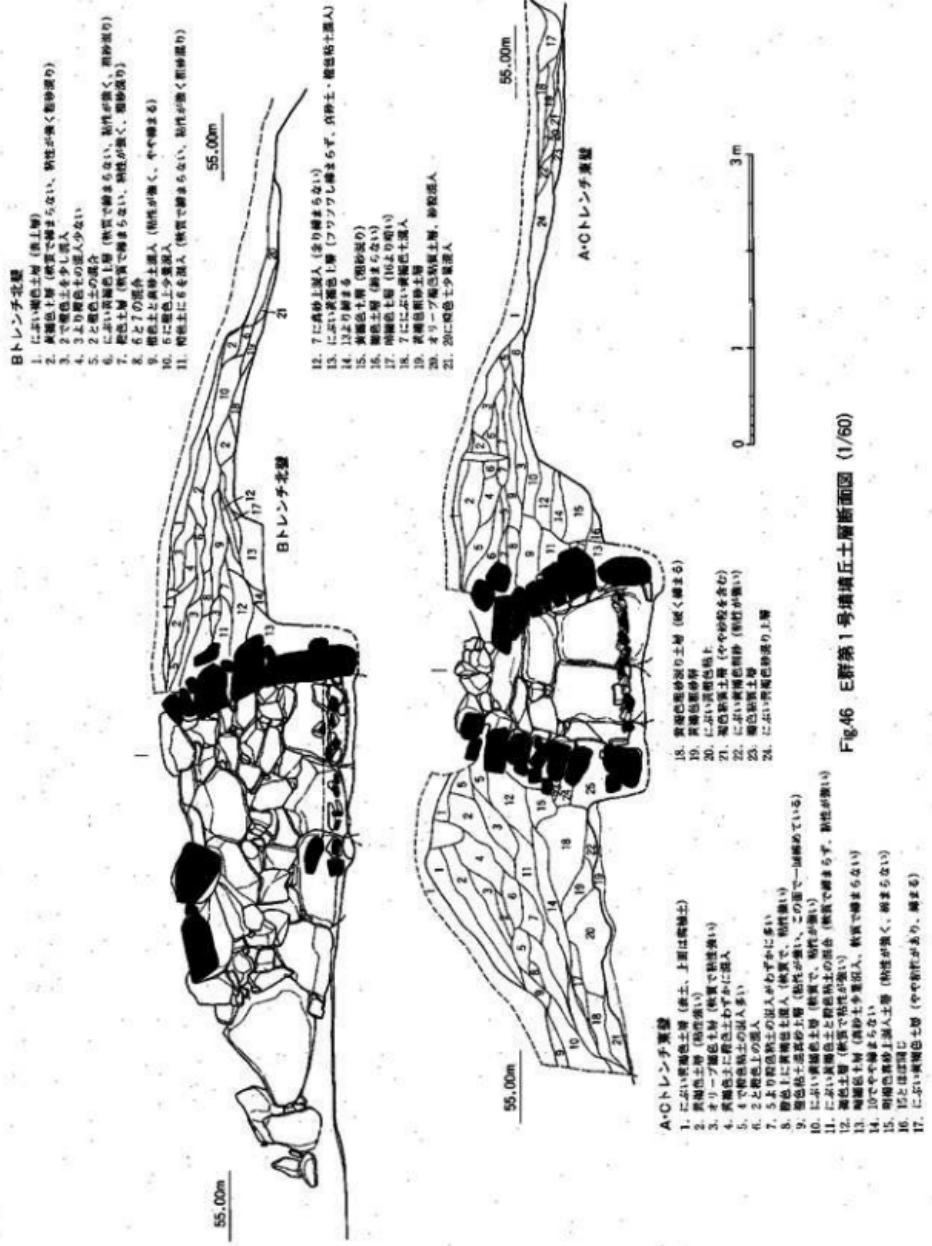
面は円形に近い形であろう。盛土造成作業は土層観察から大きく2段階に分かれる。第1段階は側壁4~5段までの作業、この段階では裏込め作業と並行して行っている。奥込土は周りの土よりやや細まらないが粘性の強い粘土を混入している。壁石の隙間には粘土をつめて目張りしている。この面の上面は砂混じり土でやや締めている。西側の1トレンチではこの面は再堆積土のレベルに一致する。第2段階は天井石を載せ墳丘を一気に盛り上げる作業で、粘土が強く柔らかい黄褐色土などで盛り上げている。上面には部分的に黒褐色腐植土の表土などが残っている。

3) 石室 (Fig.45, PL.31・32)

石室 本墳の埋葬施設は主軸をN-59°-Eに取り、西南側の谷頭に向かって等高線に斜交するよう開く、単室の両袖型横穴式石室である。墓道・前部は既に土取り等で消滅しているが、石室本体は天井石が2石残るなど遺存状況は良い。石室平面形は方形の玄室に狭長な羨道がつくもので、右壁全長4.60m、左壁全長4.30mを測る。両羨道側壁には更に貼石状の石がつきそれを入れると右壁5.0m、左壁で5.2mまで延びる。石室に使用している石材はすべて花崗岩である。

墓壙 平坦に造成した地山成形面に南北長7.0m、東西幅5mを測る不整椭円形状の石室掘り方を掘削している。この掘り方は玄室部あたりでは深く幅広いが、羨道部入口では浅く狭くなる。墓壙は2段掘りで、西北から西側と東側に30~80cm幅のテラスを持つが、東北側は狭くなりテラスを持たない。石室本体は2段目の掘り方に余裕を持って構築している。この2段目の掘り方は羨道部側では狭くなり、入口部近くで腰石腰石に収束する。掘り方底面は玄室部では腰石を安定させる為にその部分を一段掘り下げているが、羨道部ではそのまま安置している。石室内基底面は羨道部分が一番高く、玄室や開口部分は一段低くなっている。

玄室 奥幅1.65m、前幅1.70m、左壁長1.60m、右壁長1.80mを測り、右壁長が20cm程長い。天井石はないものの遺存状況は比較的良好で、奥壁部は天端面まで残っていた。壁石は腰石以上は持ち送りして積み上げているが、壁体の構成は奥壁と側壁でやや異なる。腰石は各壁2石ずつ用いる。基盤面を一段掘り下げ、その中に腰石を埋置して安定させている。奥壁では側壁より大振りな石を縦方向に埋置しており、左側の隙間が出来た部分は、二回り小さい石材を2石継ぎに積み込み補填している。そして更に3段目迄は長さ40~90cmの細長い石材を2石横位に積み、4段目は小振りな石材を雜然と積み上げ天端面としている。左右壁の腰石は横位に埋置し、その上は腰石よりやや小さい石材を5~6段まで雜に積み上げる。各腰石隙間には小砾を充填し補強している。壁面高は最大で床面から1.7m程である。玄門部の袖石は、羨道部につながる腰石を代用している。その上には右壁には腰石とほぼ同大、左壁は小振りの石材を積み上げている。左壁の2段目以上は土圧によるものか、かなりせり出していた。



床面はかなり擾乱を受けていたが、部分的には敷石が残存している。敷石は長さ10~40cmの不揃いな花崗岩転石を用いている。基盤から10cm程床土を置き、その上に敷きつめるが、かなり雑然としており、粗れている感じを受ける。

樋道 全体的に遺存状況は良い。奥幅は樋石部分で0.94m、開口部で1.3mを測り、左側がやや拡がる状態を示す。腰石は右壁が3石、左壁が4石で開口部に近づく程、腰石基底のレベルはせり上がっている。左壁の3石目は特に石材が大きく、長さ1.3m、高さ0.95m、厚さ0.5mを測る三角形状の石材を用いている。2段目以上は両壁とも持ち送り気味に積み上げているが、かなり雑でせり出しているものもある。樋石は玄門部に長さ50~55cm、幅20~25cm、厚さ25cmの横長の石材を2石並べている。この樋石を置く為に基盤面を一段掘り下げている。この樋石の上に、石長さ50cm、幅35cm、厚さ15cm程の台形状の石材があった。樋石の可能性も考えたが、石自体水平でなく玄室内に内傾しており、床面より浮き上がり、歎貫の十の上にのっていることなどから、樋石とするにはやや疑問が残る。閉塞施設としては羨道中央、腰石の2番目から3番目の位置に、羨道幅一杯に長さ1.4mの範囲で認められた。最高残存高は約1mを測る。積み方は玄室側と開口部側で異なる。玄室部では比較的大きな長方形の石材を小口積みに垂直に面を整える。開口部側は小石を雜に積み上げている。また上面の石を取り上げると基底の石は四辺をきっちと揃えていた。羨道床断面は浅いU字形を呈すが、地山面の上に黄褐色粘土と橙色粘土の混合土を最大厚さ10cm程貼りつけ床面としていた。

4) 遺物 (Fig. 47~51, PL. 33・34)

遺物出土状況 既に盗掘をされている為か、遺物の出土は少なく、また完形のもの、原位置を保つものも少ない。遺物は主に玄室床面から出土しているが、埋上中や壙丘出土のものと接合したものもある。例えば176は玄室内出土の破片と壙丘出土の破片が接合している。玉類などは玄室埋上を精査中出土している。出土遺物数は以下の通り。

須恵器は杯蓋6、杯身4、壺4、平瓶2、提瓶1、鉄製品は鉄鎌3、刀子2、装身具は耳環1、勾玉2、小玉15などである。

装身具

いずれも玄室埋上や床面上から出土している。

耳環 (183) 銅芯金張りのもので、径は2.6×2.4cm、断面は径0.7×0.9cmと梢円形である。遺存状況は悪く金箔はほとんど残っていない。

勾玉 (184・185) いずれもコンマ形のもの。184は滑石製で長さ2.4cmを測る。断面は頭部が中窪みの角が丸い長方形、他が梢円形である。色調は淡い青味がかった灰色。185は頭部片で材質はガラスか。断面は梢円形で、色調は少し緑がかった乳白色を呈す。184よりやや小振りである。

小玉（186～200） 186～189は土製。直徑は4mm、6.5mm、6mm、6mm、厚さ2mm、5mm、4.5mm、5mmを測る。186は両端を擦っている。色調は外面黒色を呈すが、186は内面赤褐色を呈す。190～192は滑石製の円筒で、直徑8mm、7mm、6mm、厚さ4mm、2mm、3mm、孔径は2mm前後である。191は断面算盤形を呈す。193～197は土製のもの。直徑は5～7mm、厚さは3～4mm、孔径1.5～3mmを測り、色調は外面黒色、内面暗赤褐色を呈す。形態は雑な調整で丸いもの193・195・196、上下両面を擦って平坦面を作るもの194・195に分かれる。198は直徑4mm、厚さ2.5mm、孔径1.5mmを測る小形のもので、材質は土製。色調は外面黒褐色を呈す。胎土は良質である。199・200はガラス小玉で直徑3mm、3.5mm、厚さ1mm、1.5mmを測る。色調は199が暗青色、200が明緑色を呈す。

鉄製品

鉄鎌（201・202・204） いずれも闇の部分を持つ茎部。201は閉塞部埋上から出土。201は残存長4cmを測る。鎌身断面は長方形、茎部断面は方形を呈す。鎌がひどい。202は残存長4.7cmを測る。木質が残る。204は刀子とも考えられるが、身の断面から見て、広根の斧箭式の鎌とする。鎌がひどくかなり彫れている。202・204は玄室出土。

刀子（203・205） いずれも刀片と思われる。203は残存長7.3cm、205は1.9cmを測る。刀部断面は二等辺三角形を呈し、厚みは203が3.5～4mm、205が4mmを測る。表面は鎌がひどいが、203は木質が全面に残っている。

須恵器

壺蓋（171～174・206・207） 6個出土した。171～174は玄室内。206は1区墳丘、207は羨道部出土。171は口徑（10.4cm）の壺には天井部が高く（3.6cm）、かつ口縁部が短く直立し、

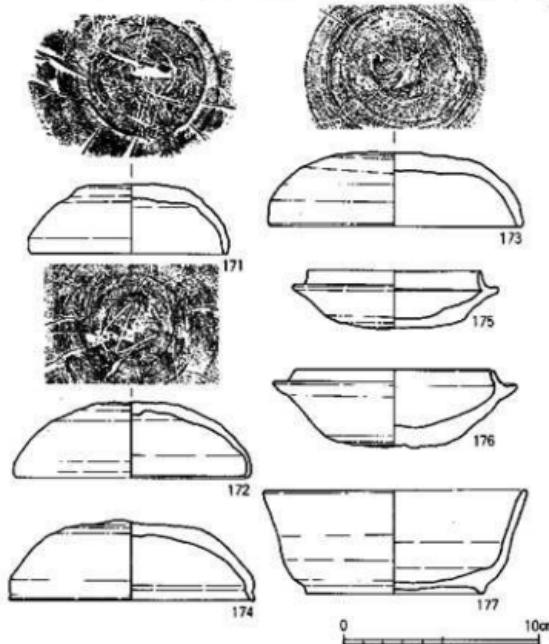


Fig.47 E群第1号墳玄室内出土遺物実測図（1/3）

天井部が平坦なもの。天井部にヘラ記号がある。172～174は口径が12.2～12.7cmとやや大きく、天井部が丸味を帯びる。172は口縁部がやや内傾する。173はやや外へ開く。174は内湾して外反する。172と173にはヘラ記号がある。206・207は口径が10.2cm、10.4cmと小さい。いずれも端部が丸く口縁部が直立する器形。206は天井部がヘラケズリによってやや平坦を呈す。色調は明赤褐色を呈す。207は天井部がやや丸味を帶び、天井部は回転ヘラケズリのうち部分的に手持ちヘラケズリ。

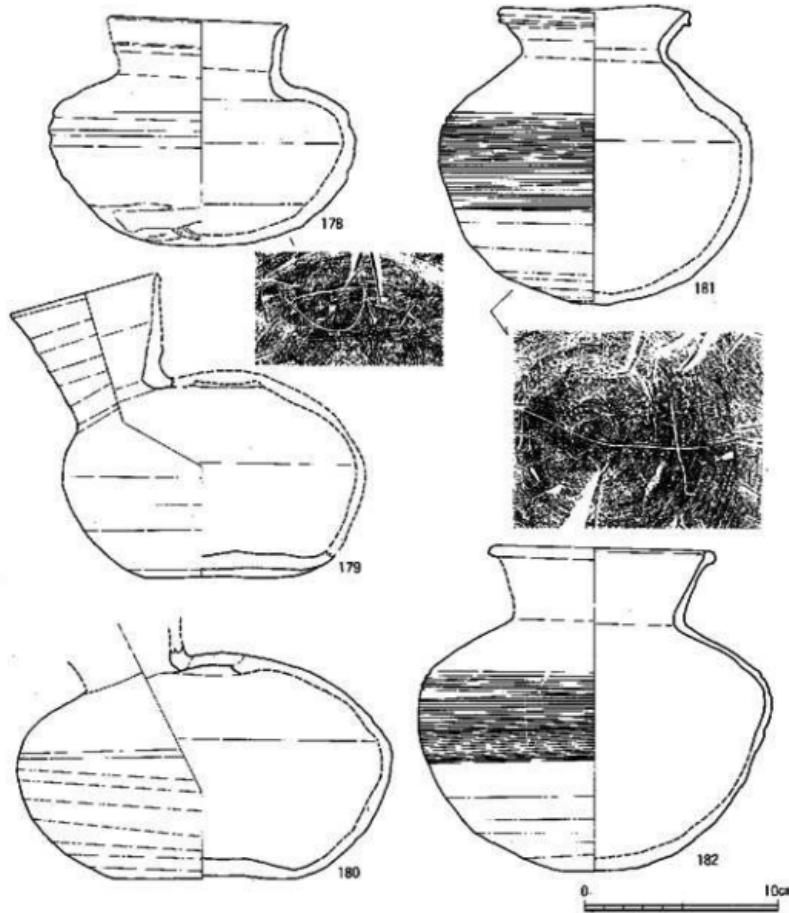


Fig.48 E群第1号墳玄室内出土遺物実測図 (1/3)

环身 (175~178・208) 4個体出土した。175~177は玄室、208は閉塞部出土である。大きさと形態から3類に分ける。I類の175は口径8.6cm、受部径10.7cmを測る。立ち上がりは比較的直立気味である。II類の176・208はやや大振りで、口径は10.1cm、10.6cm、受部径は12.65cm、12.2cmを測る。いずれも立ち上がりの内傾は強いが、208は受部の引き出しが176に比べ弱い。底部は、176がやや平底、208がやや丸底で、ヘラ記号がある。208は焼きが悪く軟質、色調は明褐色白色を呈す。III類は177で奈良時代の高台付杯である。高台部から体部が明瞭な段を持たず開く器形。外面は表面の磨滅が著しいが、内面は回転ナデである。焼きは悪く軟質で、土師器風である。

壺 (178・181・182・209) 4個体出土。178は口縁部を一部欠失するが、肩の張る体部から口縁部が直立し、口端部がやや外に開く器形、口縁部に一条、体部上半に幅広の浅い凹線が四条めぐる。体部では凹線下が右方向に走る手持ちヘラケズリを行う。底部にはヘラ記号がある。181は復元完形で、綺まり気味の頸部から外へ開く短い口縁部を持ち、口端部は肥厚し段を持つ。体部上半にはカキ目、肩部との境には二条凹線がめぐる。体部下半から底部は回転ヘラケズリののちナデ調整。底部にはヘラ記号がある。182は181とほぼ同様の器形であるが、一回り大きい。口縁部は肥厚し丸みを持った段を持つ。焼成は軟質で色調は灰色を呈す。209は口縁部を欠失するが長頸壺と思われる。底部は平底であるが、わずかに上げ底である。体部外面は細かいカキ目、底部はケズリののちナデ調整。外面は自然釉がかかる。漢道部から出土した。

平瓶 (179・180) 玄室より2個体出土。179は口縁部から体部の半分程を欠失する。体部は丸味を持って緩やかに湾曲し、底部は平底をなすが、わずかに上げ底。やや外開きの口縁部は体部中心をはずしてつけられる。焼きは悪く、器壁もやや磨滅するが、体外面カキ目痕、回転ヘラケズリ痕が認められる。180は口縁部を欠失するが、179より一回り大きく、更に扁平な丸い体部がつく。体部下半から底部にかけてカキ目。179は色調明褐色を呈す。

提瓶 (210) 墳丘より出土。小片から接合復元した。口縁部と底部を欠失する。肩部には1対の粗略な耳を貼りつける。体部前面は平坦、背面は丸味を持って張り出す。

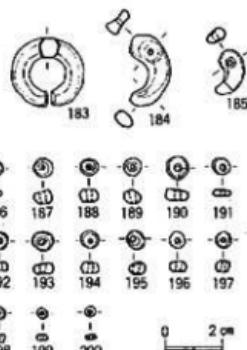


Fig. 49 E群第1号墳玄室内出土五類
実測図 (1/2)

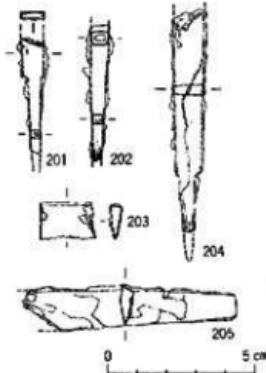


Fig. 50 E群第1号墳玄室内出土鉄器
実測図 (1/2)

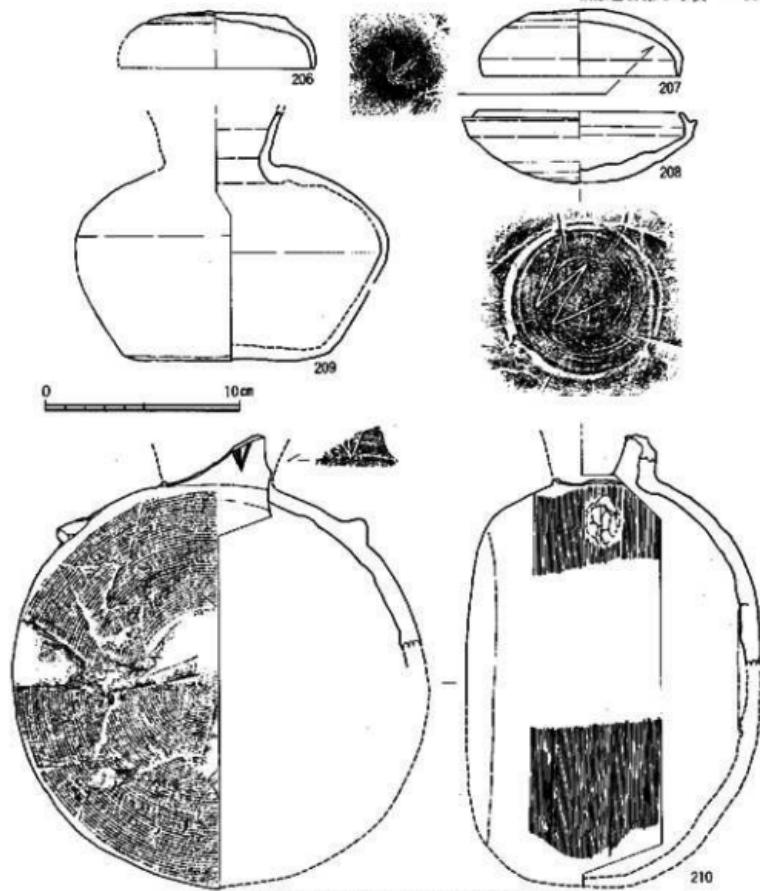


Fig.51 E群第1号墳築道・埴丘出土遺物実測図 (1/3)

体外面は全体にカキ目を施すが、前面の平坦面には指おさえ痕が残る。色調は外面は灰色から黒色を呈す。

(2) 焼土壙 (Fig. 52, PL. 32)

第1号焼土壙

埴丘南側で表土除去後に検出した平面形が不整円形を呈す土壙で、規模は直径0.58×0.57m、最大深18cmを測る。断面形は船底形である。壁面は西側を除いて焼けているが、焼け具合は悪い。壁面には粘土を貼りつけたような状況はなかった。埋土は黄褐色土で、下層に炭化物を含

むが、新しい時期の上である。遺物の出土はなかった。

第2号焼土壙

東側境界地で検出した平面形が不整方形を呈す上壙で、規模は直径 $1.80 \times 1.43m$ 、最大深40cmを測る。断面形は逆台形を呈すが、北側が若干深くなる。壁の焼け具合は弱く、部分的に焼壁画が残る程度。埋土付暗褐色土で、下方に焼土塊・炭化物を含む黒褐色土層が薄く堆積する。遺物の出土はなかった。

(3) 小結

以上調査の概要について述べた。整理すると以下のようになる。

- (1) 本墳は尾根筋に分布する丘群20基の中で最も高所に位置する。地山成形面を見ると周囲より一段高くなっている。本墳は尾根筋の周囲より一段高くなつた所を選んで造営したのかもしれない。
- (2) 墳丘規模は土層状況や地山成形面の状況から見て、東西径7.8m、南北径9mを測り、平面形は円形に近い。墳裾がかなり削られているので、本来はもう少し大きかったのであろう。
- (3) 石室は南西方向に開口する単室の両袖型横穴式石室であるが、墓道等は土取りで消滅し確認できなかった。
- (4) 石室平面形はほぼ方形の玄室に狭長な羨道がつく形態で、規模は右壁長4.60m（玄室長1.80m+羨道長2.80m）、左壁長4.30m（玄室長1.60m+羨道長2.70m）を測る。玄室と羨道の長さの比率は1:1.55、1:1.70となる。壁高は床面から最大で1.70mを測る。
- (5) 出土遺物は少なかったが、須恵器の坏蓋・身の形態が小田富士雄氏編のⅢb期～Ⅳa期、Ⅴb期、Ⅶ期の3時期に分かれることから、6世紀後半～末頃の初葬で追葬が2回程行われた可能性がある。
- (6) 装身具として土製の丸玉ないし小玉が10件出土しているが、市内では土製の小玉類を副葬する古墳はそう多くない。吉武塚原7号墳(35個)、早苗田D群10号墳(11個)、草場古墳群6号墳(20個)・12号墳(21個)、相原古墳群A-2号墳(7個)、堤ヶ浦古墳群1号墳(7個)・7号墳(48個)、神松寺御陵古墳(21個)などがある。それらの古墳群の限られた古墳からまとめて出土している。このことはそれらの出土古墳の被葬者の階級性を表すものなのか、それとも単に古墳の残り具合によるものなのか、土製小玉が土という性質上、残りにくく見つけにくいものなのか、今後の検討課題であろう。

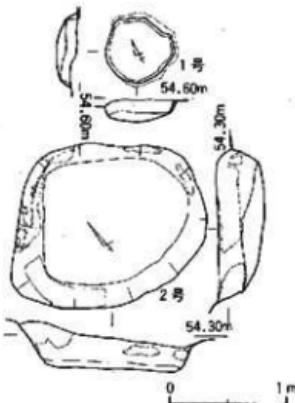


Fig. 52 焼土壙（第1～2号）
平面及び断面図（1/50）

IV. 総 括

前章においてはC群・E群の各古墳および焼土壙について個別具体的にみてきたが、ここでは発掘調査の成果を踏まえ、須恵器の編年作業、石室の構築・石室平面形の検討を行い、築造時期と造営期間、群の形成過程などについて考察を加える。

1. 須恵器について

すでにみてきたように、各古墳はいずれも盜掘や石室石材の抜き取りなどによって、本来副葬されていた遺物のかなりの部分は失われていると考えられる。石室内の遺物は全般的に少なく、また出土したものも墳丘や周溝内から2次的な混入品として出土した例がほとんどである。したがって編年作業にあたってはかなり限られた資料で行なうことになる。

出土した須恵器のうちほぼ原位置を保ち、古墳の造営時期をより正確にうかがえるものは、Tab. 2 のゴシック体で示した例がある。一括資料としては第8号墳後室出土品 (Fig. 13) と第9号墳丘第4区出土品 (Fig. 17・22) があり、編年作業のポイントとなる資料である。編年にあたっては、比較的型式差が認めやすく、量的にも出土例の多い須恵器杯身と环蓋を中心に分類作業を行ない、従来の編年観も加味して便宜的にI～V類とした (Tab. 2、Fig. 54)。Tab. 2 には出土土器の分類結果を遺物番号で表記し、杯については諸特徴をまとめた。Fig. 54 はTab. 2 をもとに図化したものである。

全般的にみて型的には従来の編年の枠を越えるものではないが、第II類においては同型式内における若干の形態的な特徴の差異が看取される。これを微妙な時期差とみると、同時期における製作集団、特に製作窯場、供給元の異なりを反映しているとみるかは今後の課題であろう。各類における杯の諸特徴はTab. 2 に記載したとおりである。なお杯に限って法量上の変化をみると、最も大きなピークを示すのはII-b類である。口径は蓋が14.5cm前後、身が12.3cm前後、器高は蓋が4.4cmほど、身が4.5cm前後を測る。II-a類がそれに次いで大きく口径は蓋が13.7cm前後、身が11.9cm前後、器高は蓋が4.7cmほどで、身が4.5cm前後を測る。ついでI類で、口径は蓋が13.5cm前後、身が11.7cm前後、器高は蓋が4.9cmほど、身が5.1cm前後を測る。III類では口径は蓋が11.4cm前後、身が11.0cm前後、器高は蓋が3.4cmほど、身が2.9cm前後を測る。IV類では、口径は蓋が14.6cm前後、身が13.6cm前後、器高は蓋が3.6cmほど、身が4.3cm前後を測る。器種の組成については資料が少ないとあってその把握までにはいたらなかったが今後補い組成を明らかにしてゆきたい。つぎに以上の編年案を従来の編年観と比較してみたい。北部九州の須恵器の編年については小田富士雄氏による八女古窯跡群の調査成果などを踏まえた

一連の研究があるが、最近では舟山良一氏などによる総括的な記述がある。これらを参考にすると、本古墳群のI類はIII-a類に、II類はIII-b類にIII類はIV類にV類はVI類に比定できよう。ただしII-c類は法量の減少と製作手法の粗略化という点からVI類に入る可能性がある。

小田氏編年の実年代観については未だ若干の検討の余地を残しているが、C群・E群の各古墳から出土した土器群は概ね6世紀前半もしくは半ばから7世紀後半頃に位置づけられよう。

2. 石室平面形について

石室の分類 ここでは古墳石室の形態的な特徴についてふれたい。石室構築の状況・平面形態の特徴などからみれば、以下のように大きく3類に分けられる。

1類：第8号墳

2-a類：第9号・12号墳、2-b類：第11号墳、2-c類：第22号・E群第1号墳

3類：第6号・21号墳

1類とした8号墳は、平面形が羽子板状をなす長方形の両袖型石室で、袖石は貧弱で、「ハ」の字形に聞く羨道部は短くまた狭い。羨道床面は玄室から羨門に向かって徐々にせり上がっており、堅穴系横口式石室の名残を留めている特徴を有す。玄室天井石の架構は現存の石室床面からそう高くないことが推定される。2類は正方形に近い平面形を有するものである。天井石架構の技術的配慮から、石室壁体下部の腰石も大きく、安定した構造を持つもので、袖石も発達し大きく、玄室から羨道部にかけての壁体の持ち送りの手法や、玄室隅角部の壁体の構築には三角持ち送りの手法を用いるなど技術的にも高い築造がなされている。羨道部が短く石室規模の小さなa類と大型の石室のものb類、作りがやや雑で、羨道部が長く付くc類に分けられる。3類は、全体に規模が小さくなり、長方形の玄室の短軸を石室の主軸として羨道を付設するもので終末期の古墳である。天井の高さは低く、したがって壁体下部の腰石も2類と比べ貧弱になっている。

これらの古墳石室は、1類→2類→3類の順に変化を遂げてきていることは、後述の古墳築造の先後関係の項で明らかである。また出土遺物からみて1類は6世紀前半から半ばにかけて、2類は6世紀半ばから後半にかけて、3類は6世紀後半から末もしくは7世紀初頭にかかる石室の形態であるといえる。

使用尺の検討 古墳の築造にあたっては、なんらかの企画性に基づいて施工が行なわれたことが推定されており、前方後円墳等の実測図をもとにしたコンピューター解析などにより使用尺の検討が行なわれている。さらに築造企画性の問題は、単に古墳築造の上木技術上の問題にとどまらず被葬者の系譜の手掛かりにも現在及んでいる。北部九州における後期古墳の平面企画性についてはすでに柳沢一男氏の詳細な検討があり、検討の手掛かりとして、使用尺の抽出がなされている。ここでは柳沢氏の手法を援用し、各古墳の使用尺について検討する。

実測値とともに各古墳石室の公約数を算出すると、第8号・9号・11号・12号墳では23~25cmが求められた。同様に第6号・22号・E群第1号墳では33cm前後の値が求められた。これに基づき各古墳の石室平面図にそれぞれの値の方眼をかけて、操作したところFig. 53に示したような結果が得られた。第8号墳は、石室全長12コマ(尺)のもとで、玄室が9コマ(尺)、奥壁が5コマ(尺)、羨道が幅2コマ(尺)の企画性を持っていることがわかる。左袖石がややずれ、左奥壁が1コマ分ずれているが右奥壁と右側壁が石室構築の基準になり、基準壁体の構

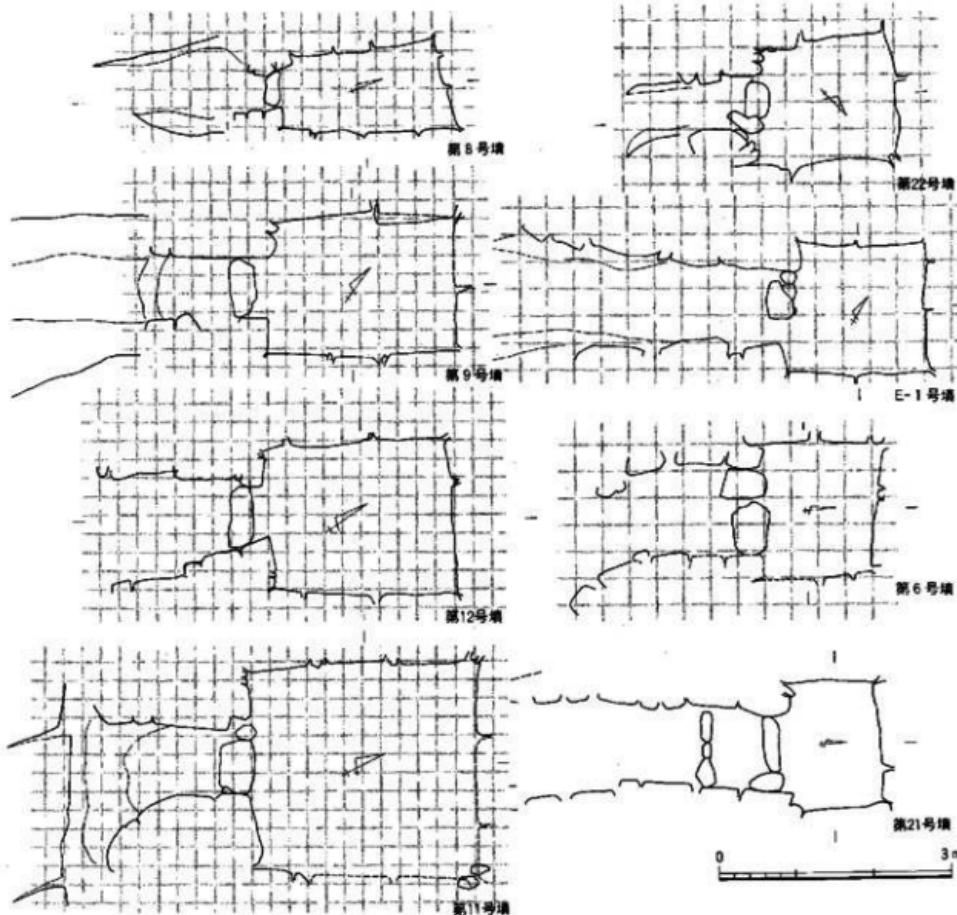


Fig.53 C群・E群各古墳集成図 (1/75)
(第21号墳の使用尺については不明)

築後におおむね合わせる形で残りの構築がなされたものと思われる。第9号墳は石室全長17コマ(尺)の企画のもとで、玄室が10コマ(尺)、奥壁が7コマ(尺)、羨道幅が3コマ(尺)となり、かなり整った企画性で平面形が構成されていることがわかる。以上のようにみると、23~25cmの公約数を持ったグループの使用尺は柳沢氏のいう晋後尺(1尺=24.5cm)にかなり近いことが考えられる。また33cm前後の値が求められたグループは高麗尺(1尺=35cm)に近いことが推定される。この結果をみると、先に分類した石室の1類と2a・2b類とに晋後尺が、2c類と3類に高麗尺が使用されたことになる。この使用尺の変化が何に基づくもののかを明らかにすることが今後の課題となろう。

3. 古墳の造営期間について

古墳築造の先後関係 古墳の造営期間について述べる前に、調査によってえられた遺構間の先後関係をみてゆきたい。遺構間の直接の切り合い関係が明確なものを簡単にまとめる下

類	小出浜 編年表	特徴	第6 号墳	第8 号墳	第9 号墳	第11 号墳	第12 号墳	第21 号墳	已開拓 1号墳	遺構番 号	測量点	表	その他	
Ⅰ	Ⅱa	西	・天井板と口縁部の板は切替を有する。 ・口縁部は、また天井板を有しないで作成する。		14.15, 16.22, 24	36.48, 55.80	91, 103, 105	122, 135, 140				29	46 18 51 182	
			・立ち上がりはなく、直立する。やや内傾する。 ・口縁部は直立、または比較的直立する。 ・天井板は天井板を有し、やや外反する。 ・受部は水平にひだられる。		19	56.88								
		東	・天井板と口縁部の板は切替を有する。 ・口縁部は直立、または比較的直立する。			47.83, 52.81, 52	97.93, 105.10, 109	131.10, 135.10, 141		79	147	134		
Ⅱb	Ⅱb	西	・立ち上がりは長く、直立する。やや内傾する。 ・口縁部は直立、または比較的直立する。 ・天井板は天井板を有し、やや内傾する。 ・受部は水平にひだられる。		17.16, 29	38.57, 66.83	114, 118	131.10, 137.19, 140						
			・天井板と口縁部の板は切替を有する。 ・口縁部は直立、または比較的直立する。 ・天井板は天井板を有し、やや内傾する。 ・受部は水平にひだられる。		25	57.44, 66.56, 56.51	136, 138	131.10, 140.34		28	178	88 89 90	41 179	
		東	・立ち上がりはやや短く内傾する。 ・口縁部は直立、または比較的直立する。 ・天井板は天井板を有し、やや内傾する。 ・受部は水平にひだられる。			59.85, 59.84, 58	96.95.10, 97.95.10, 101.10.10	130.24, 130.32, 131.10.10						
Ⅱc	Ⅲ	西	・天井板と口縁部の板は消失する。 ・天井板は天井板を有する。 ・口縁部は直立、もしくは斜めに傾く板を有する。		2	23	43.49		120.15, 124	76.77	100	100	140, 210	
			・立ち上がりはやや短く内傾する。 ・口縁部は直立、もしくは斜めに傾く板を有する。 ・天井板は天井板を有する。 ・受部は水平にひだられる。 ・底盤の減少化がみられる。		3	26.27								
		東	・天井板は平ら、もしくはぼんやり近くに近く、体部は直立的になる。 ・口縁部は直立、もしくは斜めに傾く板を有する。		1	42		125.25, 127	171		6.39,40	70	119 9 21	
Ⅲ	Ⅳ	西	・立ち上がりは直立で無くならず、強く内傾する。 ・底盤には天板を付ける、底盤は平底を基とする傾向がみられる。		3,4			208	175.10.10			75 117 164		
			・天井板中央に底盤を取つておらず、口縁部は直立か少し下を向く。					191.18, 193					7 167 168 199	
		東	・口縁部は外上方にのび、端部は丸い。 ・底盤は平底を有するか、もしくは「人」の字形の高台を付ける。					191.181 13.99, 19						
V	Ⅴ	東	・高台は直線的に立ち上がる体部と両部との接合部に貼付される。						177					

Tab.2 各古墳出土須恵器分類一覧表

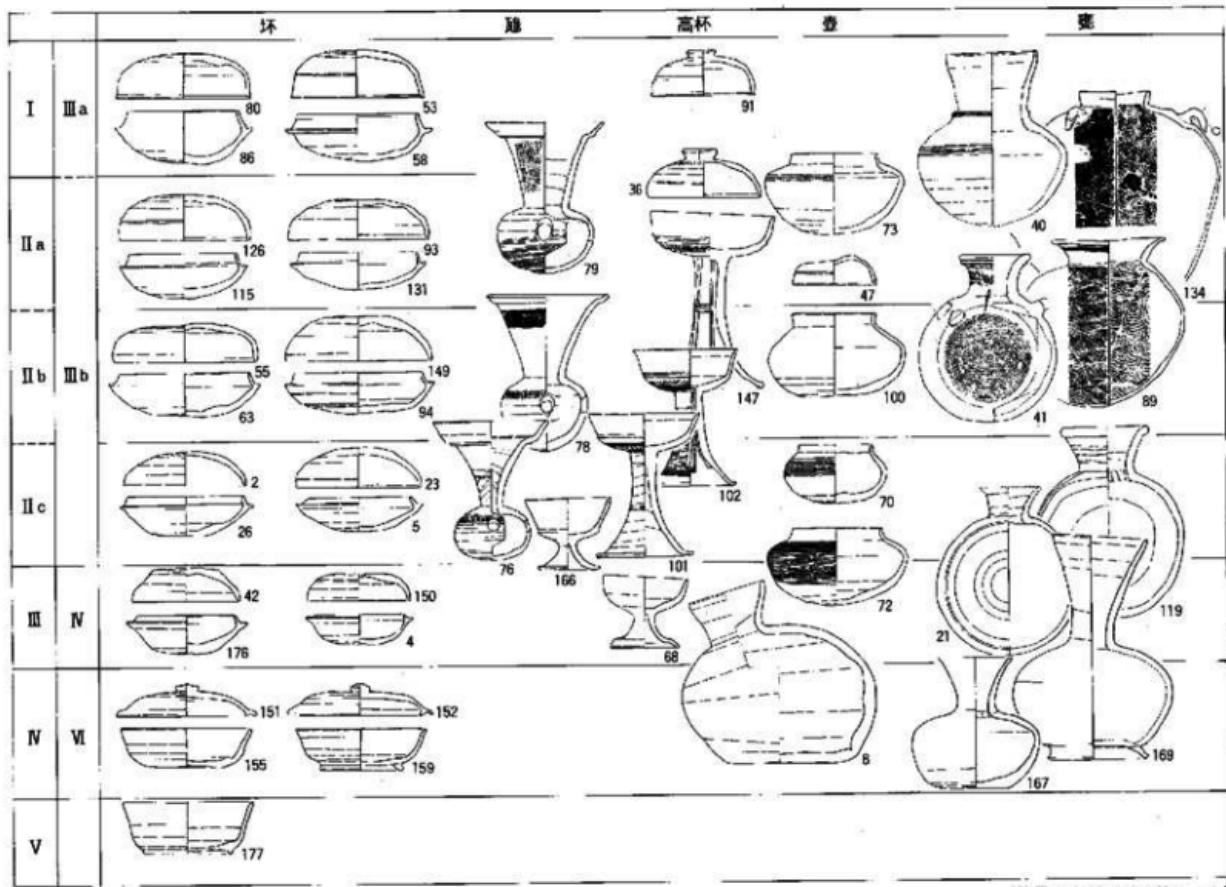


Fig.54 C群・E群出土須恵器編年図

(縮尺は壺が1/12の他は、1/6)

記のようになる。なお矢印は先→後を表す。

第8号墳→第9号墳→第21号墳 地山成形時に第21号墳が第9号墳墳丘を、第9号墳が第8号墳墳丘を切っている。

第6号墳→第21号墳 墳丘盛土の土層断面で確認できた。

第12号墳→第11号墳 第11号墳周溝が第12号墳周溝と墳丘を切っている。

第12号墳→第22号墳 地山成形により第12号墳墳丘が削平されている。

第11号墳→第3号・4号焼土壙 第11号墳周溝埋土を切って土壙が掘削されている。

第22号墳→第5号焼土壙 第22号墳周溝埋土を切って土壙が掘削されている。

出土遺物からみた築造の時期と墓営期間 ここでは、須恵器の型式分類、石室平面形の検討結果、および先にみた切り合い関係を踏まえて築造順を追いながら調査区内における群集墳の形成過程を復元してみたい。

まず6世紀前半から半ばにかけて第8号墳が尾根筋の頂部に築造される。ついで6世紀半ばに第9号墳が隣接して築造され、墓前祭を第8号墳ともども行なながら6世紀末まで墓として営まれる。第9号墳築造にやや遅れて第12号墳が造られる。

	第6号墳	第8号墳	第9号墳	第12号墳	第21号墳	E群第1号墳
I						
IIa						
IIb						
IIc						
III						
IV						

Fig.55 C群・E群出土須恵器ヘラ記号集成図

て営まれる。その後第11号墳が西隣に作られ、6世紀末まで墓として営まれる。

6世紀後半から末にかけて第22号墳が第12号墳に隣接して造られ、同じ頃に第6号墳が築造される。第11号墳・12号墳は出土遺物からみると6世紀後半まで墓営の痕跡を留めるがその後は放棄されている。ところでC群のなかで最も墳丘規模の大きい第16号墳(Fig. 2)は、石室の形態から第11号墳とほとんど同じ時期に築造されたものと考えられる。E群第1号墳は第22号墳と同じ頃に築造されその後7世紀後半頃まで数回にわたる追葬と墓前祭が営まれる。また第6号墳築造後まもなくして6世

紀末から7世紀初頭に第21号墳が第6号墳に隣接して造られ、7世紀後半までE群第1号墳と同様に追葬と墓前祭が営まれる。これらの古墳の造営が終焉を迎える前後の頃に、焼土壙が各古墳の周囲に設けられている。その性格は不明だが、共通して木炭片を多量に含んでいること、墳丘を避けその周囲に占地していることなどからみて、墳丘を対象にしたなんらかの祖靈祭祀の痕跡かもしれない。いずれにせよ墓としての古墳の役割は7世紀末にはすでに放棄されていたとみることができる。

Tab. 3 C群第12号墳出土小玉計測表

登録番号	法 量 (mm)			色調	指標	登録番号	法 量 (mm)			色調	指標
	直徑	厚さ	孔径				直徑	厚さ	孔径		
00368	2.8	1.5	1.1	不透明な黄色	非常に細い網目あり	00386	3.8	3.1	1.0	透明明白緑色	気泡(九い)含む
00369	2.9	2.4	1.1	タ	タ	00387	4.1	2.1	1.2	タ	タ
00370	3.0	2.2	1.1	タ	タ	00388	3.8	3.0	1.2	タ	タ
00372	3.0	2.0	1.2	タ	タ	00389	4.0	2.9	1.2	タ	タ
00373	3.1	2.9	1.0	タ	タ	00390	3.1	2.4	1.1	タ	タ
00374	4.8	3.7	1.4	透明な青緑色	気泡(九い)含む	00391	4.4	3.8	1.2	タ	タ
00375	3.2	4.1	2.0	タ	タ	00392	-	-	-	タ	タ
00376	4.1	3.2	1.6	タ	タ	00393	3.1	2.0	1.4	タ	タ
00377	3.2	2.1	1.0	タ	タ	00394	4.0	3.0	1.3	透明な黄緑色	タ
00378	3.2	2.2	1.0	タ	タ	00395	3.8	3.0	1.1	タ	タ
00379	4.1	3.2	1.2	透明明青緑色	タ	00396	3.8	1.8	1.3	タ	タ
00380	2.9	2.6	0.8	不透明な黄色	非常に細い網目あり	00397	2.3	2.1	1.0	気泡含む、肉眼平塗	タ
00381	3.8	3.1	1.0	透明な青緑色	気泡(九い)含む	00398	3.8	2.1	1.4	タ	タ
00382	3.1	3.1	1.4	透明な青緑色	タ	00399	4.0	3.8	1.6	タ	タ
00383	3.0	2.9	1.4	タ	タ	00400	3.0	1.3	1.1	不透明な青緑色	肉眼は平塗
00384	3.2	2.1	1.7	タ	タ	00401	3.8	1.8	1.0	透明明青緑色	気泡(九い)含む
00385	3.8	2.2	1.7	タ	タ						

(石製品00400以外はガラス製)

Tab. 4 E群第1号墳出土小玉類計測表

Fig. No.	Pl. No.	遺物 No.	名称	材質	法 量 (mm) 直徑×厚×孔径			色調	登録 No.
					直徑	厚さ	孔径		
49	34	184	勾玉		長2.4 cm 厚0.5 cm 孔0.1 cm			灰白色	00018
〃	〃	185	勾玉	水晶かガラス	長1.5 cm 厚0.5 cm 孔0.2 cm			透 明	00019
〃	〃	186	小玉	土製	Φ0.6cm 厚0.5cm 孔0.1cm			暗灰褐色	00020
〃	〃	187		タ	Φ0.60cm 厚0.45cm 孔0.1cm			〃	00021
〃	〃	188		タ	Φ0.65cm 厚0.5cm 孔0.15cm			〃	00022
〃	〃	189		タ	Φ0.45cm 厚0.2 cm 孔0.1 cm			〃	00023
〃	〃	190		滑石	Φ0.8 cm 厚0.4 cm 孔0.2 cm			灰白	00024
〃	〃	191		タ	Φ0.7 cm 厚0.2 cm 孔0.15cm			〃	00025
〃	〃	192		タ	Φ0.6 cm 厚0.3 cm 孔0.15cm			〃	00026
〃	〃	193		土製	Φ0.8 cm 厚0.4 cm 孔0.15cm			暗灰褐色	00027
〃	〃	194		タ	Φ0.6 cm 厚0.4 cm 孔0.1cm			〃	00028
〃	〃	195		タ	Φ0.6 cm 厚0.4 cm 孔0.15cm			〃	00029
〃	〃	196		タ	Φ0.55cm 厚0.3 cm 孔0.15cm			〃	00030
〃	〃	197		タ	Φ0.55cm 厚0.4 cm 孔0.15cm			〃	00031
〃	〃	198		タ	Φ0.45cm 厚0.3 cm 孔0.1 cm			〃	00032
〃	〃	199		ガラス	Φ0.4 cm 厚0.2 cm 孔0.1 cm			スカイブルー	00033
〃	〃	200		タ	Φ0.4 cm 厚0.15cm 孔0.1 cm			コバルトブルー	00034

おわりに 以上調査の所見を踏まえて、相原C群・E群について述べてきたが、他の古墳群との比較検討を行なうにはいたらなかった。ここ数年来、今宿地区の埋蔵文化財の調査は増加の一途をたどっており、当該地の考古学的成果が蓄積されている。特に古墳時代における群集墳の生成とその展開の実態については、集落遺跡の調査成果も含めて考えられる状況になりつつある。今回の調査成果が実態の把握の一助となれば幸いである。

参考文献

- | | | | |
|---------------------|-------------------------------------|---------------------|------|
| 小田富士雄 | 「筑後における須恵器の編年」 | 八女古窯跡群調査報告Ⅰ八女市教育委員会 | 1969 |
| 小田富士雄 | 「中尾谷窯跡群の須恵器」 | 八女古窯跡群調査報告Ⅱ八女市教育委員会 | 1970 |
| 福岡市教育委員会「丸殿山古墳」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第10集 | 1970 | |
| 福岡県教育委員会「若八幡古墳」 | 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集 | 1971 | |
| 下條信行「今山遺跡」 | 福岡市立歴史資料館調査研究報告1 | 1973 | |
| 福岡市教育委員会「相原古墳群」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集 | 1974 | |
| 福岡県教育委員会「今宿小塚遺跡」 | 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集 | 1977 | |
| 柳沢一男「今宿大塚」 | 『福岡平野の歴史－緊急発掘された遺跡と遺物』
原始時代～江戸時代 | 1977 | |
| 福岡市教育委員会「徳永アラタ古墳群」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集 | 1980 | |
| 福岡市教育委員会「今山・今宿遺跡」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 | 1981 | |
| 福岡市教育委員会「千里シビナ遺跡」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第88集 | 1982 | |
| 福岡県教育委員会「今宿高田遺跡」 | 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集 | 1982 | |
| 福岡市教育委員会「鶴崎古墳調査概報」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 | 1984 | |
| 鹿児古墳群調査会「鹿児古墳群」 | | 1985 | |
| 福岡市教育委員会「今宿五郎江遺跡」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 | 1986 | |
| 福岡市教育委員会「丸殿山古墳Ⅱ」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集 | 1986 | |
| 福岡市教育委員会「青木遺跡」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集 | 1987 | |
| 福岡市教育委員会「大塚遺跡・女原遺跡」 | 国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ | | |
| | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集 | 1990 | |
| 福岡市教育委員会「今宿五郎江遺跡Ⅱ」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集 | 1991 | |
| 福岡市教育委員会「徳永遺跡」 | 国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ | | |
| | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第242集 | 1991 | |
| 福岡市教育委員会「大塚遺跡」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第256集 | 1991 | |
| 舟山良「3. 須恵器の編年」 | 九州 | | |
| | 『古墳時代の研究6』 雄山閣 | 1991 | |
| 福岡市教育委員会「徳永遺跡Ⅱ」 | 国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ | | |
| | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第306集 | 1992 | |

Tab. 5 各古墳出土土器観察一覧表

凡例

- 観察表の作成は、実測図と現物とを対照して行った。
- 遺物番号は本報告書の実測図の番号である。
- 登録番号は遺物を収蔵する際の番号で、5桁で記す。
- 法量の表記については、以下のように略した。

口：口径、器：器高 受径：受部径
 立高：立ち上がり高 天径：天井部径
 口縁：口縁高 体径：体部最大径
 基径：基部径 脚径：脚部径
 頸径：頸部径 頸長：頸部長

なお、()は復元値によるものであり、歪みの著しいものについては実測段階での復元図をもとに計測している。

C群第6号墳(9021)

9021

Fig No	PL No	遺物 No	種類	法 量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備 考	登録 No
8	b	1	須恵器	口：11.6 受径： 器：3.5 立高： ： 天径：6.6 ： 口縁：	天井部と体部の境は不明瞭。口縁端部は丸く 仕上げる。大井部の1/2以下に凹板ヘラケズリ 調査。	色調：灰褐色。 焼成：良好。 胎土：石英・長石・雲母 を含む。	約1/2残存。	
*	*	2	*	口：12.4 受径： 器：3.5 立高： ： 天径：10.6 ： 口縁：	天井部と体部の境は不明瞭。口縁端部は丸く 仕上げる。大井部の2/3に凹板ヘラケズリ調査。	色調：灰褐色。 焼成：良好。 胎土：石英・長石・雲母 を含む。	完形。	
*	*	3	*	口：11.6 受径：9.0 器：2.9 立高：9.8 ： 天径： ： 口縁：	立ち上がりは鋭く、強く内傾する。底部はやや 平ら。底部の1/2に凹板ヘラケズリ調査。	色調：灰褐色。 焼成：良好。 胎土：石英・長石・雲母 を含む。	完形。	
*	*	4	*	口：11.0 受径：8.2 器：2.1 立高：9.4 ： 天径： ： 口縁：	立ち上がりは鋭く、強く内傾する。底部は平ら。 底部の1/2以下に凹板ヘラケズリ調査。	色調：灰褐色。 焼成：良好。 胎土：石英を含む。	約2/3残存。	
*	*	5	*	口：13.0 受径：10.8 器：3.6 立高：9.7 ： 天径： ： 口縁：	立ち上がりは鋭く内傾し、受部は斜い。底部の 2/3に凹板ヘラケズリ調査。	色調：灰褐色。 焼成：良好。 胎土：石英・長石・雲母 を含む。	約3/4残存。	
*	*	6	*	口：11.7 受径： 器：12.6 立高： 質径：11.0 大径： 基径：3.8 口縁：	环部は直線的に立ち上がる。底部との境には 凹板が施る。脚部は両状で中央に二条の凹版 を有す。	色調：灰褐色。 焼成：良好。 胎土：石英・雲母を含む。	完形。	
*	*	7	*	口： 受径： 器： 立高： 体径：16.8 天径： ： 口縁：	体部は球形をなす。外面はカナリ、内面は ナガ調整。	色調：灰褐色。 焼成：良好。 胎土：云母を少し含む。	立筋部欠損。	

Fig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
8	5	8	口	平底	口：7.9 受底： 唇：18.5 立高： 天底： 口縁：	口部は直線的に開き、端部付近で内湾する。 体型は丸く、肩が張る。	色調：灰黒色。 焼成：良好。 胎土：石英・鐵母を含む。	ヘラ記号有。 	
*	-	9	口	垂	口：17.0 受底： 唇：立高： 天底： 口縁：	口部は緩やかに開き、端部は肥厚される。肩部は正面で前で、側面中位に最大径がある。	色調：暗灰色。 焼成：良好。 胎土：長石・雲母を含む。	口縁～ 体部片。	
9	5	10	土器	脚付壺	口：11.8 受底： 唇：立高： 天底： 口縁：	口部は内面裏味に開き、体部は丸く側面上位に肩を張る。脚部はチャバ形で、茎部はヘラケズリを施す。	色調：茶褐色。 焼成：良好。 胎土：石英・長石・鐵母・ シカモットを含む。	脚部欠損。	
*	*	11	口	杯	口：11.0 受底： 唇：(42)立高： 天底： 口縁：	口縁部に内湾し、底部は丸味をおびる。底部は丸い。外周はココナツ調整。	色調：明褐色。 焼成：良好。 胎土：石英・長石・鐵母・ セウ。	底盤欠損。	

C群第8号墳 (9105)

9105

13	8	14	須磨器	杯	口：15.5 受底： 唇：4.9 立高： 天底：12.9 口縁：2.3	天井部内面はシッタ痕をナゲ調整。 外周2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 口縁部内面に「余の沈線有」。	色調：明褐色。 焼成：やや不良。 胎土：密。	00001	
*	*	15	口	口	口：14.5 受底： 唇：4.7 立高： 天底：12.6 口縁：2.0	天井部内面はシッタ痕をナゲ調整。 外周2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 天井部は丸く、口縁端部はやや外反する。	色調：明褐色。 焼成：やや不良。 胎土：密。	00004	
*	*	16	口	口	口：13.9 受底： 唇：4.8 立高： 天底：12.5 口縁：2.4	天井部内面はシッタ痕をナゲ調整。 外周2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 天井部はやや丸く、口縁端部はやや外反する。	色調：内・青灰色、外・灰 色。 焼成：良好。 胎土：密。	00006	
*	*	17	口	口	口：11.7 受底：15.8 唇：4.7 立高：1.3 天底： 口縁：	内底部はシッタ痕をナゲ調整。 外周2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 底盤は深く、立ち上がりは低く、内傾する。	色調：明褐色。 焼成：やや不良。 胎土：密。	00002	
*	*	18	口	口	口：13.5 受底：12.7 唇：4.9 立高：1.5 天底： 口縁：	内底部はシッタ痕をナゲ調整。 外周2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 底盤は深く、立ち上がりは低く、内傾する。	色調：明褐色。 焼成：やや不良。 胎土：密。	00005	
*	*	19	口	口	口：12.6 受底：14.5 唇：5.2 立高：1.5 天底： 口縁：	内底部はシッタ痕をナゲ調整。 外周2/3は回転ヘラケズリ、「唇誠のため不良感」他は回転ナゲ調整。底盤は深く丸い。立 ち上がりは低く、内傾する。	色調：内・明褐色、外・白 明褐色。 焼成：やや不良。 胎土：密。	00007	
*	*	20	高	杯	口：(22)受底： 唇：4.6 立高： 天底：14.0 天底： 口縁：19.5 口縁：	杯部外周1/3は回転ヘラケズリ。他は内外面と もに回転ナゲ調整。脚部は内外面ともしづら 骨がみられる。	色調：明褐色(難化焰燒 成)。 焼成：板質。甘い。 胎土：密、白色砂粒を含む。	脚部の底盤 一部欠損。	00003
*	*	21	口	縦	口：(60)標高：3.2 唇：胸高：8.4 胸底：14.8 ：	縦部片面は回転カヨ、片面に回転ヘラケズ リ成形。縦部外周はナゲシケ調整。縦部は内 外周ともしづら骨がみられる。 縦表面は若干剥離している。	色調：明褐色(難化焰燒 成)。 焼成：軟質。甘い。 胎土：密、白色砂粒を多 く含む。	口縫部欠損。	00008

Fig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
14	8	22	須	环	n : 13.1 受径: 基 : 4.4 立高: 天 : 天径 : 12.7 口 : 口径 : 3.2	天井部内面はナゲ調整。 外側2/3は回転ヘラケツリ。口縁部外側は回転ヘラケツリ成形。口縁端部内面は段を有す。	色調 : 青灰色。(外面一部に自然色がかかる) 焼成 : 塗装 胎土 : 表: 5%の白色石 礫を含む。		00010
+	+	23	+	环	n : 13.0 受径: 基 : 4.1 立高: 天 : 天径 : 12.6 口 : 口径 : 3.7	天井部内面は不整方向のナゲ調整。 外側2/3は回転ヘラケツリ。天井部にやや低く、口縁部は内傾し、端部はわずかに外反する。	色調 : 明灰色。(外面一部に 青灰色) 焼成 : 塗装 胎土 : 表: 白色砂粒を含む。	ヘラ記号有。  内底部約1/4。	00011
+	9	24	+	环	n : 13.0 受径: 基 : 4.2 立高: 天 : 天径 : 13.8 口 : 口径 : 3.6	天井部内面は不整方向ナゲ調整。 外側は回転ヘラケツリ(自然物のため不明瞭)。口縁端部内面に凹・段有。	色調 : 内・外: 黑灰色・外: 白 焼成 : 塗装 胎土 : 表: 白色砂粒を多く含む。		00013
+	+	25	+	环	n : 13.0 受径: 基 : 3.8 立高: 天 : 天径 : 12.1 口 : 口径 : 3.8	天井部内面はココナゲ調整。 外側2/3は回転ヘラケツリ(自然物のため不明瞭)。中央に砂粒が付着している。口縁端部は丸味をおび厚い。	色調 : 内・外: 黑灰色・断・ 明灰色 焼成 : やや不良。 胎土 : 表: 白色砂粒を多く含む。	ヘラ記号有。  内底部約1/4。	00014
+	+	26	+	环	n : 13.2 受径 : 14.0 基 : 4.0 立高 : 1.0 天 : 天径 : 口 : 口径 : 3.8	内底部はココナゲ調整。 外側は回転ヘラケツリ(自然物のため不明瞭)。立ち上がりは短く内傾し、受部は水平にやや長く薄手。	色調 : 内: 黑灰色・外: 白 然物・断: 明灰色。 焼成 : 塗装 胎土 : 表: 白色砂粒を多く含む。	ヘラ記号有。 	00012
+	+	27	+	环	n : 11.8 受径 : 13.8 基 : 4.1 立高 : 1.2 天 : 天径 : 口 : 口径 : 3.8	内底部はココナゲ調整。 外側は自然物(黄褐色)が厚くかかるため、ヘラケツリ等は不明顯。立ち上がりは短く、内傾する。受部は長く、端部は丸い。	色調 : 内・褐灰色・外: 白 然物・断: 明灰色。 焼成 : 塗装 胎土 : 表: 褐。		00016
+	+	28	+	环	n : 13.1 受径 : 14.8 基 : 4.3 立高 : 1.6 天 : 天径 : 口 : 口径 : 3.8	内底部はシック旋をナゲ調整。 外側2/3は回転ヘラケツリ。他は回転ナゲ調整。底部は深く、立ち上がりは内傾する。受部は短い。	色調 : 明灰色。 焼成 : やや不良。 胎土 : 表: 褐。		00015
+	+	29	+	环	n : 7.6 受径: 基 : (6.5)立高: 天 : 天径: 口 : 口径:	体部外面は1/2は手折ちヘラケツリ調整。口縁端部は丸味をおびている。	色調 : 黑灰色・外: 内底 部に自然物。 焼成 : 塗装 胎土 : やや粗。白色砂 粒を多く含む。	内底部約2/3。	00009
11	9	30	十 字 盤 器	环	n : 13.3 受径: 基 : 6.3 立高: 天 : 天径: 口 : 口径:	内面は一部ナゲが残っているが、器裏面が剥離しているため、他は不明顯。底部は丸味をおびているため不安定。	色調 : 明灰色。 焼成 : 不良。 胎土 : やや粗。白色砂 粒を多く含む。		00017

C群第9号墳 (9105)

9105

18	12	36	須	环	n : 11.8 受径: 基 : 5.0 立高: 天 : 天径 : 11.1 口 : 口径 : 3.5 口径:	つまみのまわりに擦(11~12本)による施文有。天井部外側中位は回転ヘラケツリ。他は回転ナゲ調整。天井部高く、口縁部は内傾し下る。端部に段を有す。	色調 : 褐灰色。 焼成 : 塗装。 胎土 : 表: 白色砂粒多 く含む。		00009
+	+	37	+	环	n : 13.0 受径: 基 : 4.2 立高: 天 : 天径 : 11.1 口 : 口径 : 3.9	天井部外側2/3は回転ヘラケツリ。他は回転ナ ゲ調整。 口縁部は内傾し、端部は丸い。	色調 : 黑灰色。外: 黑灰 色(一部自然物)。 焼成 : 塗装。 胎土 : 表: 褐。	ヘラ記号有。  内底部約3/4。	00007
+	-	38	+	环	n : 11.9 受径 : 14.1 基 : 4.5 立高 : 1.6 天 : 天径 : 口 : 口径 :	外面1/3は回転ヘラケツリ。他は内外面とも自 然物がかかるため不明。 立ち上がりは直立し、端部は丸い。	色調 : 内: 明灰褐色・外: 自然物・断: 明灰色。 焼成 : やや不良。 胎土 : 表: 3%の白色砂 粒を含む。	ヘラ記号有内。  内底部約2/3。	00001

Fig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法 品量 (cm)	形態・手術上の特徴	その他	備 考	登録 No
18	-	39	頭骨	高 身 (身)	口: 11.2 受怪: 10.9 目: 4.5 立高: 2.4 額幅: 2.4 天保: 口: 口幅:	内底部はヨロリナガ調整、外面中位はヨロロ目調整、 底は回転ナガ調整。 底部は平ら。口底部はやや直立し頭部は丸い。	色調: 濃灰褐色。外一 部自然釉。 焼成: 硬焼。 胎土: 密。白色砂粒を多 く含む。	00099	口縁部/欠損
タ	12	40	瓶	高 身 (身)	口: 10.2 受怪: 目: 17.9 立高: 額幅: 15.5 天保: 口幅: 6.8 口径:	体部外下面下方は回転ヘラケズリ。他は回転ナ ガ調整。頸部ノ体部の端にはヘラによる押圧 文を施した突奇を有す。体部中位にはヘラに よる良い段を施す。	色調: 深灰褐色。肩部 から下方自然釉。 焼成: 硬焼。 胎土: 密。胎白を多く 含む。	00103	底部欠損。 体部・頭部と も残存。
タ	タ	41	瓶	高 身 (身)	口: 7.5 受怪: 目: 15.3 立高: 額幅: 10.1 天保: 口: 口幅:	口底部はヨロリナガのあと、腰目波状文を施す。 他は回転ナガ。体部片側は回転ナガ目を施し、 片側にはヘラケズリのあと、肩部ナガ調整。 肩部には2倍1対の把手を施す。	色調: 濃灰褐色。(片側全 体に自然釉) 焼成: 硬焼。 胎土: 密。2%ほどの 砂粒を含む。	00104	ヘラ記号有。 
19	タ	42	瓶	高 身 (身)	口: 11.2 受怪: 目: 3.4 立高: 天保: 9.7 口幅: 1.9	大井部内面中央はヨロリナガ調整。外面はほぼ 平らで、回転切り崩し。口縁部に平らの中位は 回転ヘラケズリ、他は回転ナガ調整。 大井部は平らで、口縁端部は丸い。	色調: 濃灰褐色。 焼成: 硬焼。 胎土: 密。	00074	ヘラ記号有。 
タ	タ	43	瓶	高 身 (身)	口: 12.6 受怪: 目: 3.6 立高: 天保: 10.9 口幅: 1.1	天井部内面中央はヨロリナガ。外面1/3は回転ヘ ラケズリ。他は回転ナガ調整。 口縁端部は丸味をおび、厚みがある。内外面 とも小穴が接着している。	色調: 黒灰褐色、所々灰 色。 焼成: 良好。 胎土: 密。白色砂粒を多 く含む。	00075	ヘラ記号有。 
タ	タ	44	瓶	高 身 (身)	口: 12.6 受怪: 目: 3.8 立高: 天保: 11.7 口幅: 2.7	天井部内面中央はヨロリナガ、外面2/3は回転ヘ ラケズリ。他は回転ナガ調整。 天井部内面中央は凹状をなし、外面は2/3は どのところに段をなす。大井部は段く扁平。	色調: 黑灰褐色、所々灰 色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。白色砂粒 を多く含む。	00085	口縁部1/3 欠損。
タ	-	45	瓶	高 身 (身)	口: 12.6 受怪: 目: 立高: 天保: 口幅:	内面は開心円文印き。外面は平行印きの後、 回転カキ引くを施す。口縁部は内外面ともヨロ リナガ調整。	色調: 深灰褐色。 焼成: 空燒。 胎土: 密。無砂含む。	00112	焼成不良。
20	12	46	瓶	高 身 (身)	口: 8.4 受怪: 目: 4.0 立高: 天保: 10.1 口幅: 1.1	天井部内面中央はヨロリナガ、外面2/3は手跡ち ヘラケズリ。他は回転ナガ調整。 天井部は深く、かえり端部はやや下方に張り 出する。	色調: 濃灰褐色。 焼成: やや不良。 胎土: 密。2%程の白色 小石を含む。	00063	
タ	タ	47	瓶	高 身 (身)	口: 8.7 受怪: 目: 2.5 立高: 天保: 8.2 口幅: 1.9	天井部外面1/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナ ガ調整。 口縁端部に開け沈締を有する。	色調: 深灰褐色。外 と内とも自然 釉うすくかかる。 焼成: 硬焼。 胎土: 密。4%の白色 小石を含む。	00064	口縁部1/4 欠損。
タ	タ	48	瓶	高 身 (身)	口: 11.0 受怪: 目: 3.5 立高: 天保: 9.7 天保: 10.6 口幅: 2.9 口径: 2.0	天井部内面中央はヨロリナガ。他は回転ナガ。 外面はヘラケズリ調整されているが、自然釉 の段階不明瞭。 口縁端部に一束の沈締がめぐる。	色調: 黑灰褐色。 焼成: 硬焼。 胎土: 密。白色砂粒を含 む。	00065	
タ	タ	49	瓶	高 身 (身)	口: 9.5 受怪: 目: 3.5 立高: 天保: 8.8 口幅: 1.6	天井部外面2/3は回転ヘラケズリ。他は回転ナ ガ調整だが、内外とも自然釉のがかり不明瞭。 口縁端部に一束の沈締がめぐる。	色調: 別灰色。(外・自 然釉) 焼成: 良好。 胎土: 密。	00091	1/8欠損。
タ	タ	50	瓶	高 身 (身)	口: 14.2 受怪: 目: 8.0 立高: 天保: 12.8 口幅: 2.9	天井部内面中央はヨロリナガ、外面2/3は回転ヘ ラケズリ。他は回転ナガ調整。 天井部は高く、口縁端部に一束の沈締を有す る。	色調: 内・灰褐色、外・明 灰色。 焼成: 硬焼。 胎土: 密。	00069	口縁部 焼成1/2。
タ	タ	51	瓶	高 身 (身)	口: 13.2 受怪: 目: 4.4 立高: 天保: 12.2 口幅: 2.5	天井部内面中央はヨロリナガ、外面1/2は回転ヘ ラケズリ。他は回転ナガ。天井部はやや高く、 丸い。 口縁端部に一束の沈締を有する。	色調: 深灰褐色。 焼成: 硬焼。 胎土: 密。白色砂粒を多 く含む。	00069	口縁部 焼成2/3。

Fig No	PL No	建物 No	種類	器種	法寸 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No.
20	12	52	須志器	环	口: 14.0 受径: 基: 4.5 立高: 天: 天幅: 14.0 口: 口径: 19	大井内部中央にシット原有。外面2/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整されているが、外側はほぼ全体に自然輪がかかるため、不明顯。 口部前面に弱い段を有す。	色調: 黄褐色。断・底紫褐色。 焼成: 酸素。 胎土: 布。5%の白色石粉を含む。		00078
#	#	53	#	#	口: 14.9 受径: 基: 4.9 立高: 天: 天幅: 13.8 口: 口径: 26	天井部内部中央にシット原有。外面2/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。 天井部は深く、比較的平ら。口部はやや外傾し、底部には一条の沈線がありぐる。	色調: 内・明灰褐色、外・灰褐色、断・灰褐色。 焼成: 酸素。 胎土: 布。		00083
#	#	54	#	#	口: 13.9 受径: 基: 4.0 立高: 天: 天幅: 12.9 口: 口径: 25	大井内部内面はコロナデが見られるが、小石が密着し不明顯。外面中央はヘタ切り未調節で凹み、そのまわりを輪状にヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。 天井部は平らで口部端面内面に段を有す。	色調: 内・明灰褐色、外・灰褐色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。5%の白色石粉を含む。	ヘア記号無。	00082
#	13	55	#	#	口: 14.7 受径: 基: 3.8 立高: 天: 天幅: 14.0 口: 口径: 27	大井内部内面中央はコロナデ、外面2/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。 天井部は深く、口部はやや内傾し下る。	色調: 明灰褐色。 焼成: やや不良。 胎土: 白。白色砂砾を含む。		00084
#	-	56	#	#	口: 14.8 受径: 基: 4.0 立高: 天: 天幅: 13.1 口: 口径: 23	天井部内部中央はコロナデ、外面2/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。 口部は内傾し、丸味をおびていている。天井部は浅く平屋。	色調: 明青灰色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。~5%の白色・黒色石粉多く含む。	焼成約1/2。	00088
#	13	57	#	环	口: 11.4 受径: 13.6 基: 4.6 立高: 14 天: 天幅: 13 口: 口径: 23	底部内部内面中央に不整方向のナゲ、外面2/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。 底部は深く、立ち上がりは長く、直立する。	色調: 褐灰色。断・白灰褐色。 焼成: 酸素。 胎土: 白。2%程の白色小石粉を含む。		00080
#	#	58	#	#	口: 12.7 受径: 15.4 基: 4.7 立高: 1.6 天: 天幅: 15 口: 口径: 25	底部内部内面中央はコロナデ。外面2/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。 底部はやや浅い。受部は水平に長く、下方に丸味をもつ。	色調: 明灰褐色。外・自然釉。 焼成: やや不良。 胎土: 白。白色小石粉を多く含む。	ヘア記号有。	00091
#	#	59	#	#	口: 12.3 受径: 14.3 基: 4.5 立高: 13 天: 天幅: 13 口: 口径: 25	底部内部内面中央はコロナデ、外面は回転ヘタ切り、他は回転ナゲ調整。 立ち上がりは直立し、薄手。	色調: 明灰褐色。 焼成: 酸素。 胎土: 白。4%の白色石粉を多く含む。	ヘア記号有。	00086
#	#	60	#	#	口: 11.5 受径: 13.7 基: 4.3 立高: 1.8 天: 天幅: 13 口: 口径: 25	底部内部内面中央はコロナデ、外面2/3は回転ヘタケメリ後、輪状に回転ヘタケメリ。その後、回転ナゲ調整。 立ち上がりは丸味をもち、やや内傾し、受部は長く、底部は上方に外反する。	色調: 暗灰色。外・自然釉。 焼成: 酸素。 胎土: 白。白色石粉を多く含む。	立ち上がり 3/1欠損。	00070
#	#	61	#	#	口: 12.3 受径: 14.7 基: 4.5 立高: 1.5 天: 天幅: 13 口: 口径: 25	底部内部内面は回転ナゲ調整、外面に全体に剥落しているため、小窓。 底部はやや浅く、立ち上がりは長い。	色調: 明褐色。 焼成: 不良。甘い。 胎土: 基。2%の白色石粉を含む。	立ち上がり 窓存1/8。	00073
#	-	62	土器	#	口: 13.6 受径: 基: 5.2 立高: 天: 天幅: 口: 口径:	底部内部内面は放射状のヘアてて真有。外側は剥落し、不明顯。 底部はやや平ら。	色調: 淡褐色。 焼成: 不良。軟質。 胎土: 基。3%ほどの白色小石粉を多く含む。	窓存1/2。	00106
#	13	63	油壺器	#	口: 13.6 受径: 15.7 基: 4.4 立高: 1.8 天: 天幅: 13 口: 口径:	底部内部内面中央はコロナデ調整されているが、凸状をなす。外側は回転ヘタケメリ調整。他は回転ナゲ調整。 底部はやや深く尖り、不安定。	色調: 暗灰褐色。 焼成: 不良。甘い。 胎土: 布。	立ち上がり 窓存1/8。	00071
#	#	64	#	#	口: 12.3 受径: 14.6 基: 4.8 立高: 1.1 天: 天幅: 口: 口径:	底部内部内面中央は強いコロナデ、外側は回転ヘタ切りの後、輪状に回転ヘタケメリ調整。 他は、回転ナゲ調整。 底部は深く、立ち上がりは直ぐ内傾する。受部は長く水平。	色調: 明灰褐色。 焼成: 軟質。 胎土: 布。		00072

Fig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
20	-	66	須地器	环身	口: 12.1 受径: 14.4 基: 4.2 立高: 1.2 肩: 天端: 口縁:	底部内面中央は不整方向のナゲ、外周はほぼ全体回転ヘタケズリ。他は回転ナゲ調整。 底部は浅く、立ち上がりは短く、内策し、端部は外反する。	色調: 明灰色。 焼成: やや不良。 胎土: 密。白色砂粒を多く含む。	現存約1/2。	00079
*	13	66	*	*	口: 13.9 受径: 14.6 基: 5.0 立高: 1.4 肩: 天端: 口縁:	底部内面中央にヒック旋出、外周2/3は回転ヘタケズリ、他は回転ナゲ調整が入られるが、外周は全体に自然崩がかかる小崩れ。 底部は浅く、立ち上がりは長く、端部は丸い。	色調: 明灰色。 焼成: 良好。 胎土: 密。白色砂粒を含む。		00080
*	*	67	*	*	口: 12.3 受径: 14.4 基: 4.2 立高: 1.4 肩: 天端: 口縁:	底部内面中央はヒック旋出、外周2/3は回転ヘタケズリ、他は回転ナゲ調整。外周はほぼ全体に自然崩がかかるため、不明顯。 立ち上がりは長く、受部端部は丸みを帯びる。	色調: 暗灰色。断・素 天色。 焼成: 不良。 胎土: 密。白色砂粒を多く含む。	ヘリ洞有り。 261611/15A.	00085
21	*	68	*	高环	口: 8.7 基底: 2.4 基: 7.2 立高: 肩: 7.0 天端: 脚高: 3.5 口縁:	底面部内面はヒック旋出、外周1/2は回転ヘタケズリ、他は回転ナゲ調整。肩部は内外面ともにしぼり痕有。 底部はやや深く、口縁端部は丸い。	色調: 暗褐色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。白色砂 粒が多く含まれ る。	現存約1/2。	00083
*	*	69	*	*	口: 11.3 受径: 基: 3.4 立高: 肩: 天端: 口縁:	底部内面はヒック旋出、他は回転ナゲ調整。 不規外周にはヘラ小口による押圧文が施される。	色調: 暗~暗灰色。 焼成: やや堅脆。 胎土: やや粗。白色砂 粒を多く含む。		00086
*	*	70	*	短指管	口: 7.5 受径: 基: 6.1 立高: 肩: 10.0 天端: 口縁:	体部にカサ日を施し、底部は回転ヘタケズリ、他は回転ナゲ調整。 口縁部はややだ円形。	色調: 明灰色。外・白 胎土。 焼成: 坚脆。 胎土: 密。白色砂粒を 含む。		00087
*	*	71	*	*	口: 7.2 受径: 基: 6.4 立高: 肩: 12.5 天端: 口縁:	底部は回転ヘタケズリ、口縁部から内周は回 転ナゲ、肩部はカサ日調整が施されているが、 自然崩(無色)がかかるため、下方は不明顯。 底部は丸味を帯びているため、不安定。	色調: 明灰色。外・白 胎土。 焼成: 坚脆。 胎土: 密。白色砂粒を 含む。	現存約1/2。	00088
*	*	72	*	*	口: 9.2 受径: 基: 8.0 立高: 肩: 14.7 天端: 口縁:	底部内面はヒック旋出、他は回転ナゲ調整。外 周は体部中位はカサ日。底部は回転ヘタケズリ で施されているが、外・内全体に自然崩がか かるため、下部は不明顯。 底部は丸味を帯びているため、不安定。	色調: 内・明灰色、外・ 自然崩。 焼成: 坚脆。 胎土: やや粗。白色・黒色 の斑紋を多く含む。		00084
*	*	73	*	*	口: 8.5 受径: 基: 8.3 立高: 肩: 14.6 天端: 口縁:	底部内面はヒック旋出。他は回転ナゲ調整。 底部外周はヘタケズリ成型。肩部から下方に かけて自然崩がかかる。底部外周は丸味を 帯びているため不安定。	色調: 明灰褐色。 焼成: 坚脆。 胎土: やや粗。白色小 石粒を含む。	口縁部1/3 欠損。	00085
*	*	74	*	有指環	口: 13.0 受径: 15.5 基: 10.5 立高: 1.4 肩: 11.7 天端: 口縁:	底部内底部は回転カサ日。肩部との接合部はナ ゲツク。他は回転ナゲ調整。 底部は挽きひずみのため、ゆがんでいる。 底部底部は深く、立ち上がりは長く、内傾す る。	色調: 暗~暗灰色。 焼成: 坚脆。 胎土: 密。	現存約1/5。	00087
*	-	75	*	高环	口: 11.1 受径: 15.6 基: 11.1 立高: 肩: 13.5 天端: 口縁:	底部外周は回転カサ日。肩部との接合部はナ ゲツク。他は回転ナゲ調整。 底部端部は外下方にのみ、平面をなす。	色調: 暗~暗灰色。 焼成: 坚脆。 胎土: 密。白色砂粒を 多く含む。	底部1/2 欠損。	00088
*	14	76	*	瓶	口: 12.2 受径: 基: 14.3 立高: 肩: 8.0 天端: 孔径: 1.3 口縁:	底部外周は回転ヘタケズリ。体部外周中位に ヘラ小口による押圧文を施す。口縁部内外面 とも回転ナゲ。外周下方にしぼり痕有。 底部は深く不安定。内面に自然崩がかかる。	色調: 暗~暗灰色。 焼成: 坚脆。 胎土: 密。砂粒を多く 含む。	壺部・底部 一部欠損。	00089
*	*	77	*	瓶	口: 13.7 受径: 基: 15.1 立高: 肩: 9.3 天端: 孔径: 1.6 口縁: × 1.8 口縁:	口縁部内面は回転カサ日。底部は回転カサ日調 整。底部内面中位はカサ日。底部外周は回転ヘタ ケズリ調整。肩部には若干自然崩がかかる。 底部は凸状をなし、不安定。	色調: 暗灰~明灰色。 焼成: 坚脆。 胎土: 密。砂粒を多く 含む。	口縁部 一部欠損。	00100

Fig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法寸 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
20	14	78	骨器	叉	口: 12.4 受端: 基: 15.9 立高: 脚径: 14.0 大径: 口縁:	頭部上方に櫛目波状文、体部上方にヘタ小口の押抜文を施す。底部は回転ヘラケズリ、他に回転ナガ調整。ロ頭端部はキヤ外反し、平面にならず。底部は丸い。	色調: 深~暗灰色。 焼成: 軽焼。 胎土: 布: 1%程度の砂粒を多く含む。	ヘタ小口有。 ロ頭端丸く。	00101
*	*	79	骨器	叉	口: (32) 受端: 基: (35) 立高: 脚径: 10.1 大径: 口縁:	頭部上方に櫛目波状文を施す。体部外側1/2より下方から底部にかけてカキ目を施す。 他に回転ナガ調整。 体部最大径は上部に求められ、キヤ扁平な球体がなす。	色調: 暗~暗灰色。 焼成: 軽焼。 胎土: 布: 1%ほどの砂粒を多く含む。	ロ頭端欠損。	00102
22	*	80	骨器	环	口: 14.1 受端: 基: (4.8) 立高: 脚: 12.5 大径: 口縁: 2.5	天井部内面中央は不整刃向ナガ調整。 外側2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナガ調整。 ロ頭端部内面に段有す。	色調: 内:暗灰色、外:白 焼成: 断続、 胎土: キヤ粗、2%程度の白色小石粒を含む。		00056
*	*	81	骨器	环	口: 13.5 受端: 基: (4.8) 立高: 脚: 10.1 大径: 口縁: 1.8	天井部内面中央はシック度セナナガ調整。 外側2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナガ調整。 天井部は低く、ロ頭端部は丸い。	色調: 暗灰色。 焼成: 軽焼。 胎土: キヤ粗、2%程度の白色小石粒を含む。		00058
*	*	82	骨器	环	口: 14.0 受端: 基: 4.5 立高: 脚: 13.4 大径: 口縁: 2.2	天井部内面中央はコロナナガの縁、シャタ、その後、指ナガ調整。外側1/2は回転ヘラケズリ、他は回転ナガ調整。 大井端はキヤ深く、ロ頭端部はキヤ直底に下り窄部は丸い。	色調: 橙灰色。 焼成: 軽焼。 胎土: 布: 白色小石粒を含む。	ロ尾部 1/4欠損。	00062
*	*	83	骨器	环	口: 12.3 受端: 14.6 基: 4.6 立高: 1.5 脚: 天井: 1.6 口縁:	底部外側2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナガ調整されているが、器表表面がかなり磨滅しているため、不明瞭。 底部はキヤ尖っているため不安定。	色調: 白褐色。 焼成: 不良、軟質。 胎土: 布。		00057
*	*	84	骨器	环身	口: 12.0 受端: 14.8 基: 4.4 立高: 1.3 脚: 天井: 1.5 口縁:	底部内面はコロナ、外側2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナガ調整。 立ち上がりは比較的鋭く内傾し、受端との境は凹字をなす。	色調: 暗灰色。 焼成: 軽焼。 胎土: 布: 白色小石粒を含む。		00068
*	*	85	骨器	环	口: 11.5 受端: 14.4 基: 3.3 立高: 1.9 脚: 天井: 1.6 口縁:	底部内面はコロナで、外側は回転ヘラ切り。 他は回転ナガ調整されているが、外側全体に自然剥がかるため、不明瞭。	色調: 青灰色、外:自然剥。 焼成: 軽焼。 胎土: 布: 白色小石粒を含む。		00076
*	*	86	骨器	环	口: 11.7 受端: 14.5 基: 5.1 立高: 1.8 脚: 天井: 1.7 口縁:	底部内面にシック度有。外側2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナガ調整。 立ち上がりは直立的でわずかに内傾し長い。 底部は深く、丸い。立ち上がりと受端の境には沈線がある。	色調: 外: 明灰色、内:暗 焼成: キヤ不整。 胎土: キヤ粗。白色砂粒を多く含む。		00077
*	-	87	土器	环	口: 12.8 受端: 基: 8.0 立高: 脚: 4.7 立高: 天井: 1.5 口縁:	環状先端部は回転ヘラケズリ、脚部との接合部はコロナで、他は回転ナガ調整。 ロ頭部はキヤ外傾しながらのび、端部は丸い。	色調: 明褐色。 焼成: 不良、軟質。 胎土: 布: 白色、ホタル色を多く含む。		00105
23	14	88	骨器	叉	口: 23.5 受端: 基: 47.0 立高: 脚: 43.5 天井: 口縁:	頭部内面は挖によるロコナゲ、ロ頭部はコロナナガ調整。体部外側は終子口押き、内面は同心円文印を施す。	色調: 暗~暗灰色。 焼成: 軽焼。 胎土: キヤ粗。大粒の白色石粒を含む。		00064
*	15	89	骨器	叉	口: 23.7 受端: 基: 38.5 立高: 脚: 37.2 天井: 口縁: 8.1 口縁:	ロ頭部は外表面ともにナガ調整。頭部中央に櫛目波状文を施す。体部外側は平行叩き、内面は同心円文印を施す。 既きひずみがひどく、歩がんでいる。	色調: 明灰色、所々灰褐色 焼成: キヤ強、風化のためらうい。 胎土: キヤ粗。大粒の白色石粒を含む。		00065

Pig No	PL No	造物 No	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
27	18	30	縫合器	束	口: 24.1 受径 唇: 49.6 立高 脚幅: 18.8 天径 脚幅: 45.0 腹	頭部内面は同心円文印き、外面は平行叩きを施す。口縫合内面ともにヨコナゲ調整。外面にはカキ目を施す。口縫合部内面に新しい沈線をめぐらす。器部に均整のとれた卵形をなし。拂きひざみはない。	色調: 黒白色~灰色。 焼成: 塗膜(風化のためもろい)。 胎土: やや粗。大粒の砂粒を多く含む。		00226
28	*	31	*	縫合器	口: 10.7 受径 唇: 44.2 立高 脚幅: 0.7 天径 脚幅: 2.9 腹 脚幅: 2.0	天井部外周1/212回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。外面には凹状のつまみがつく。つまみの中央部分はわずかに凸状をなす。口縫合部に弱い段を有する。	色調: 暗灰色、外: 自然軸。 焼成: 塗膜。 胎土: 密。		00196
*	*	32	*	縫合器	口: 15.3 受径 唇: 4.2 立高 脚幅: 1.8 天径 脚幅: 1.8 腹	天井部内面中央にシッタ痕をナゲ消し調整。外面中央はヘタ切り未調整。そのまわりを輪状に回転ヘタケメリ調整。他は回転ナゲ調整。口縫合部内面に段を有す。天井部は高く、比較的平ら。	色調: 明灰色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。3%ほど白色石粉を含む。		00192
*	*	33	*	縫合器	口: 14.5 受径 唇: 4.1 立高 脚幅: 1.8 天径 脚幅: 2.1 腹	天井部内面中央にシッタ痕。外面中央はヘタ切り調整。そのまわりを輪状に回転ヘタケメリ調整。他は回転ナゲ調整。天井部は高く、比較的平ら。口縫合部に弱い段を有する。	色調: 暗灰色、断: 暗褐色。 焼成: やや不良。 胎土: 密。5%ほど白色石粉を含む。		00195
*	*	34	*	縫合器	口: 13.3 受径 唇: 4.2 立高 脚幅: 1.8 天径 脚幅: 1.8 腹	底部内面中央にシッタ痕がむづかに残る。外面にはほぼ全体的に回転ヘタケメリ調整。他は回転ナゲ調整。受部はやや長く、端部は上方に外反する。	色調: 明灰色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。5%ほど白色石粉を含む。		00199
*	-	35	*	縫合器	口: 13.6 受径 唇: 5.2 立高 脚幅: 1.8 天径 脚幅: 1.8 腹	底部内面中央にシッタ痕有。外面にはほぼ全体的に回転ヘタ切り。他は回転ナゲ調整。底部は突っており、不安定。	色調: 暗紫色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。2%ほど白色石粉を多く含む。	口縫合部はほとんど欠損。	00204
*	18	36	*	縫合器	口: 12.9 受径 唇: 4.1 立高 脚幅: 1.8 天径 脚幅: 1.8 腹	底部内面中央にシッタ痕の後、ヨコナゲ調整。そのまわりを輪状にシッタ痕が順筋に残る。外面の回転ヘタケメリは2回、右回転で行われている。輪筋時は左回転。	色調: 内: 暗褐色、外: 灰色。 焼成: やや不良。 胎土: 密。2%ほど白色小石を含む。		00194
*	*	37	*	縫合器	口: 13.9 受径 唇: 4.4 立高 脚幅: 1.8 天径 脚幅: 1.8 腹	底部内面中央はヨコナゲ。外面1/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。底部は深く、やや平ら。	色調: 断: 暗褐色、黒色 外: 朱色(黒色)。 焼成: やや不良。 胎土: 密。2%ほど白色石粉を含む。		00191
*	*	38	*	縫合器	口: 12.7 受径 唇: 4.0 立高 脚幅: 1.8 天径 脚幅: 1.8 腹	底部内面中央にシッタ痕。外面2/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。底部は浅く、扁平。	色調: 断: 暗褐色、自然筋がかかる。 焼成: 比較的。 胎土: 密。2%ほど白色小石を含む。		00195
*	-	39	*	縫合器	口: 13.2 受径 唇: 4.3 立高 脚幅: 1.8 天径 脚幅: 1.8 腹	底部内面中央にシッタ痕。外面2/3は回転ヘタケメリ、他は回転ナゲ調整。底部は浅く、扁平。	色調: 赤褐色。 焼成: 不良。軟質。 胎土: やや粗。白色砂粒を多く含む。	底筋部は欠損。	00208
*	18	40	*	縫合器	口: 8.5 受径 唇: 8.5 立高 脚幅: 10.0 天径 脚幅: 10.0 腹 体径: 14.4 天径 脚幅: 10.0 腹	底部2/3に回転ヘタケメリ調整。内外面とも剥落しているため、不明瞭。底部は浅く、比較的平ら。	色調: 明灰色。 焼成: 塗膜。 胎土: やや粗。1~3%の白色石粉を多く含む。		00212
*	*	41	*	縫合器	口: 13.0 受径 唇: 3.0 立高 脚幅: 19.0 天径 脚幅: 19.0 腹 脚幅: 19.0 腹	底部外側にカキ目。ヘタ小口による押捺文を施す。内面は不整方向のナメ、他は回転ナゲ調整。底部中位に2本の段を有す。部分的に自然筋がかかる。	色調: 暗~暗灰色。 焼成: 塗膜。 胎土: 密。	口縫合部は一部欠損。	00213
*	*	42	*	縫合器	口: 11.0 受径 唇: 14.1 立高 脚幅: 9.6 天径 脚幅: 9.6 腹 脚幅: 9.6 腹	杯底部外側にカキ目。開口押捺文を施す。内面にはシッタ痕有。底部外側は回転カキ目。他は回転ナゲ調整。底部には三方にスカシを有す。部分的に自然筋がかかる。	色調: 暗色~暗灰色。 焼成: 塗膜。 胎土: 密。		00214

Fig No	PL. No	遺物 No	種類	法 量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他の 特徴	備考	登録 No
29	19	103	須磨 貝	口: 14.6 受径: 基: 4.2 立高: 天: 12.7 口: 2.5	天井部外側1/3回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 天井部と口縁部の境に比較的強い段がある。口縁部に一条の沈線がめぐる。	色調: 青灰色。 表面: やや不良。 胎土: 塗。2%ほどの白色砂粒を含む。		00190
#	#	104	#	口: 13.3 受径: 基: 4.3 立高: 天: 13.1 口: 2.0	天井部内面中央はヨコナデ。外周1/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 口縁部はほぼ底盤にとり、端部は一条の沈線がめぐる。天井部外周全体に自然輪かかかる。	色調: 青灰色。 表面: 横筋。 胎土: やや薄。2%ほどとの白色砂粒を含む。	口縁部わずかに欠損。	00197
#	#	105	#	口: 13.8 受径: 基: 4.0 立高: 天: 13.0 口: 2.1	天井部内面中央は不整方向のナゲ。外周1/2は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 口縁部はやや外傾し、端部は一条の沈線がめぐる。天井部外周全体に自然輪かかかる。	色調: 青灰色、黒・明白灰色。 表面: 横筋。 胎土: 塗。3%ほどの白色小粒を含む。	横筋約2/3。	00198
#	-	106	#	口: 14.6 受径: 基: 4.2 立高: 天: 13.0 口: 2.1	天井部内面中央にシッタ痕有。外周2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。口縁部内面に弱い段を有す。	色調: 内・外褐色、外・灰褐色。 表面: やや不良。 胎土: 塗。2%ほどの白色砂粒を多く含む。		00200
#	19	107	#	口: 13.3 受径: 基: 3.9 立高: 天: 12.3 口: 2.3	天井部内面はほぼ全面に不整方向のナゲ調整。 外周中央はヘタ切り未調整、そのまわりを輪状に回転ヘラケズリ調整。他は回転ナゲ調整。口縁部内面に段を有す。	色調: 明灰褐色。 表面: 横筋。 胎土: やや粗。4%の白色砂粒を多く含む。	口縁部1/4欠損。	00207
#	-	108	#	口: 13.6 受径: 基: 4.4 立高: 天: 12.8 口: 2.6	天井部内面は不整方向のナゲ調整。 外周2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ナゲ調整。 天井部はやや低い。口縁部はやや外傾し、端部は大きい。	色調: 内・灰褐色、外・明青灰色、断・泥花斑。		00200
#	19	109	#	口: 13.9 受径: 基: 4.0 立高: 天: 13.0 口: 2.3	天井部内面は不整方向のナゲ調整。 外周中央はヘタ切り未調整、そのまわりを輪状に回転ヘラケズリ調整。他は回転ナゲ調整。天井部はやや高い。天井部は底盤にとり、ほぼ平らで扁平。口縁部内面に段を有す。	色調: 暗灰褐色、外・自然地色。 表面: 横筋。 胎土: 塗。1~3%の白色小石を含む。	口縁部3/4欠損。	00206
#	#	110	#	口: 13.2 受径: 基: 4.4 立高: 天: 12.8 口: 2.2	天井部内面はほぼ全面に不整方向ナゲ調整。 外周中央はヘタ切り未調整。外周1/2回転ヘラケズリ調整。 口縁部に一条の沈線がめぐる。	色調: 暗灰褐色。		
#	#	111	环 身	口: 13.0 受径: 基: 3.5 立高: 天: 1.6 口: 2.2	此部内面はほぼ全面に不整方向ナゲ調整。 外周中央はヘタ切り未調整。そのまわりを輪状に回転ヘラケズリ調整。他は回転ナゲ調整。底盤は浅く、ほぼ平らで扁平。	色調: 暗灰褐色、外・自然地色。 表面: 横筋。 胎土: やや粗。2%ほどの白色小石、白砂粒を多く含まる。	底盤部存 1/2。	00211
#	#	112	#	口: 11.3 受径: 基: 3.5 立高: 天: 1.7 口: 1.6	底部内面はほぼ全面に不整方向ナゲ調整。 外周中央はヘタ切り未調整。そのまわりを輪状に回転ヘラケズリ調整。他は回転ナゲ調整。底盤は浅く、ほぼ平らで扁平。	色調: 明灰褐色。 表面: 横筋。 胎土: やや粗。1~3%の白色砂粒が多く含まれる。	口縁部一部 欠損。	00202
#	-	113	#	口: 11.0 受径: 基: 4.1 立高: 天: 1.6 口: 1.6	底部内面はヨコナデ、外周は回転ヘタ切り。 他は回転ナゲ調整。	色調: 暗灰褐色、断・白色。 表面: 横筋。 胎土: 塗。1~3%の白色砂粒、E%の白色石粒を含む。	口縁部存 1/2。	00205
#	#	114	#	口: 12.1 受径: 基: 4.9 立高: 天: 1.6 口: 1.6	底部内面はヨコナデ、外周は回転ヘタ切り。 他は回転ナゲ調整。	色調: 黑灰色、断・白色。 表面: 横筋。 胎土: 塗。1~3%の白色小石を含む。	底部欠損 口縁部存 約3/4。	00209
#	15	115	#	口: 11.0 受径: 基: 4.5 立高: 天: 1.4 口: 1.6	底部内面はヨコナデ、外周は回転ヘタ切り。 他は回転ナゲ調整。	色調: 黑灰色、断・白色。 表面: 横筋。 胎土: 塗。2~5%の白色砂粒を含む。	口縁部1/4 欠損。	00210

Fig No	PL No	造物 No	種類	器種 法 量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
30		116	土器	环	口: 15.2 受径; 高: 5.2 立高; 幅: 大径; 厚: 口径;	底部内面に粗圧痕。口部端部にかけてココナ ヂ、外面底面まではナガ調整。 底部は剥落しているため不明瞭。	色調: 褐色。 焼成: 不良。軟質。 胎土: 粗。白色石粒を 多く含む。	00216
*	19	117	無 底盤	恒 形	口: (70)受径; 高: 6.7 立高; 幅: 15.3 大径; 厚: 山腹;	底部内面中央はココナヂ、外面は回転ヘラケ メリ。 他は回転ナガ調整。 口部は丸く、肩部は斜く張り出している。 一部自然形がかかる。	色調: 黒灰~褐色。 焼成: 脆硬。 胎土: やや粗。1~2%の 白色石を多く 含む。	00217
*	*	118	*	長 筒形	口: 11.2 受径; 高: 20.9 立高; 幅: 17.2 大径; 厚: 7.8 口径;	肩部外側は、叩きの後カキ目ナガで調整。底部 は回転ヘラケメリ、他は回転ナガ調整。 口部端部には、朱の沈黙がみぐる。 一部自然形がかかる。	色調: 深灰~褐色。 焼成: 脆硬。 胎土: やや粗。1%ほど の白色石を多 く含む。	00215
*	*	119	*	筒 形	口: (80)受径; 高: 19.0 立高; 幅: 15.5 大径; 厚: 12.4 口径;	肩部内面に粗圧痕有。側面部片面に回転カキ目。 口部端部内面に回転ナガ調整。 口部端部外側し、断面はやや三角形を成す。 底部は若干平ら。	色調: 黑~褐色。 焼成: やや不良。 胎土: 粗。白色砂粒を 多く含む。	00216

C群第12号墳 (9105)

9105

33	22	120	無 底盤	不 規	口: 11.4 受径; 高: (39)立高: 12. 幅: 天径; 厚: 山腹;	近部内面中央はシッタ痕をナガ削す。底部外 面はほぼ全体に回転ヘラケメリ (3回調整)。 他は回転ナガ調整。底部は平らのため安定して いる。全般的に丸みを帯び、シャープさに 欠ける。	色調: 内側褐色外側灰色。 焼成: やや不良。 胎土: 粗。2~5%の白 色石粒をやや含 む。	底盤欠損。	00265
*	*	121	*	不 規	口: 14.0 受径; 高: 4.4 立高; 幅: 天径: 13.3; 厚: 山腹: 1.8	天井部内面は不整方向のナガ、外側中央はヘ ラカギ切り。他は回転ナガ調整。外面全 体に自然形がかかるため、不明瞭。天井部は 凹状をなし、平らで高々。口部端部内面に弱 い段を有す。	色調: ナカタヘラカギ。	焼成: 良好。 胎土: やや粗。點状の白 色石粒を多く含 む。	00269
*	*	122	*	ノ	口: 13.7 受径; 高: 8.6 立高; 幅: 天径: 12.9; 厚: 山腹: 2.2	天井部内面に不整方向のナガ、外側中央はヘ ラカギ切り。そのまわりに輪状に回転ヘラケメリ。 他回転ナガ調整。天井部は低く、外側中央は 凹状をなし、平らで高々。口部端部内面に弱 い段を有す。	色調: 頭灰白色。 焼成: 塑硬。 胎土: 粗。1~2%の白色 石粒を多く含む。	II基盤3/3 欠損。	00277
*	*	123	*	ノ	口: 13.6 受径; 高: 6.3 立高; 幅: 大径: 13.4; 厚: 口径: 1.7	天井部内面にシッタ痕有。外側中央はヘラ切 り未調整。そのまわりに輪状に回転ヘラケメリ。 他は回転ナガ調整。天井部は低く、外側中央は 凹状をなし、平らで高々。口部端部内面に弱 い段を有す。シャープさに欠ける。	色調: 頭灰白色。 焼成: 不良。軟質。 胎土: 粗。白色小石を 多量に含む。	口盤部1/4 欠損。	00271
*	*	124	*	不 規	口: 12.8 受径; 高: 4.0 立高: 1.3 幅: 天径; 厚: 口径:	底部内面中央は不整方向のナガ、外側1/2は回 転ヘラカギ、他は回転ナガ調整。底部は浅 く、中央はやや圓状をなす。	色調: 頭灰白色。 焼成: 塑硬。 胎土: 粗。1~2%の白色 石粒を含む。	山腹部1/3 欠損。	00267
*	-	125	*	長 筒形 (休盤)	口: 受径; 高: 立高; 幅: 15.7 天径; 厚: 口径:	底部内面はココナヂ。外面は底部より休盤下 方まで回転ヘラカギ、他は四転ナガ調整。 最大直径は休盤上方に求められる。	色調: 深~黒灰色。 焼成: 塑硬。 胎土: 粗。1~3%の白色 石粒を含む。	椭存2/3。	00278
*	22	126	*	环 底	口: 13.5 受径; 高: 4.7 立高; 幅: 天径: 13.5; 厚: 山腹: 2.2	天井部内面中央にシッタ痕有。外面2/3は細か い回転ヘラカギ、他は四転ナガ調整。天井 部は高く、口部端部内面に、朱の沈黙がみぐ る。	色調: 明白灰色。 焼成: やや不良。軟質。 胎土: 粗。1~2%の白色 小石を多く含む。	口盤部1/2 残存。	00261
*	*	127	*	ノ	口: 14.2 受径; 高: 4.3 立高; 幅: 大径: 13.3; 厚: 口径: 2.5	天井部内面は全体にココナヂ。外面は回転 ヘラカギ切り、他は回転ナガ調整。口部端部に弱 い段を有す。	色調: 青灰色。 焼成: やや不良。軟質。 胎土: やや粗。1~2%の 白色、黒色砂粒を 多く含む。	口盤部1/4 欠損。	00262

Pig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
38	22	128	杯盤	环	口: 14.7 受径: 器: 14.0 立高: 天: 14.4 口: 1.5	大井部内面中央にヨコナダ、外面1/2回転ヘテケズフ、他回転ナダ調整。外面全体に自然軸がかかるためヘラ削り後に小崩落。口縁端部は丸く、内面に弱い沈殿が見られる。	色調: 黒灰色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。白色砂粒を含む。	現存1/2。	00073
*	*	129	环	环	口: 11.3 受径: 13.7 器: 13.9 立高: 1.5 天: 13.6 口: 1.5	底部外面2/3は回転ヘテケズフ、他は回転ナダ調整。立ち上がりは比較的の長く、やや内傾する。底部は深く、丸い。	色調: 暗黄褐色。 焼成: 不良焼成が認められる。 胎土: 器: 3%ほどの白色砂粒を多く含む。	現存2/3。	00080
*	*	130	环	环	口: 12.2 受径: 14.8 器: 13.1 立高: 1.5 天: 14.7 口: 1.5	底部内面中央はヨコナダ。立ち上がり部内面に不整方向のナダ。外面は回転ヘリ切り。他は回転ナダ調整。立ち上がりは比較的の低めだが、底さに欠ける。	色調: 男根灰色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。白色砂粒を多く含む。		00037
*	*	131	环	环	口: 12.4 受径: 14.3 器: 13.9 立高: 1.2 天: 14.5 口: 1.5	底部内面全体は不整方向のナダ。底部は回転ヘリ切り、他は回転ナダ調整。底部外周部は全体的に自然軸がかかるため不明瞭。立ち上がりは直線的である。	色調: 黑灰色～灰色。 焼成: 褐。		00258
*	-	132	环	环	口: 11.5 受径: 13.8 器: 14.1 立高: 1.3 天: 13.8 口: 1.5	底部外周は回転ヘリ切り。他は回転ナダ調整。立ち上がりは薄手で直線的。底部は比較的の平ら。	色調: 暗灰色。 焼成: やや不良。 胎土: 器: 2%ほどの白色砂粒を多く含む。	△現存1/2。	00261
*	22	133	杯盤	环	口: 15.1 受径: 器: 14.9 立高: 天: 14.9 口: 2.4	天井部内面中央はヨコナダ、外面2/3は回転ヘテケズフ。他は回転ナダ調整。外面全体に自然軸が薄くかかり不明瞭。口縁端部内面に弱い沈殿が見られる。天井部はやや高く。	色調: 暗灰色～黒灰色。 焼成: やや不良。 胎土: 器: 1～3%の白色砂粒を多く含む。	△現存1/2。	00266
33	*	134	环	环	口: 14.7 受径: 器: 13.9 立高: 天: 14.5 天径: 口: 1.5	体部内面は同心円式スタンプ、外面は平行タキマ調査。口縁部はナダ調整。肩部には部分的に自然軸がかかる。焼きひずみのため割部中央がかなりくがんでいる。	色調: 暗色。 焼成: 褐。		00256
34	23	135	环	环	口: 13.5 受径: 器: 13.3 立高: 天: 13.3 口: 1.8	天井部内面は不整方向ナダ、口縁部内面は回転ナダ調査。外面は回転ヘリ切り。大井部はやや高く、口縁端部内面に一条の沈殿が見れる。	色調: 内・黒灰色、外・灰色、断・暗灰色。 焼成: 良好。少し軟質。 胎土: やや粗。1～4%の白色砂粒が含まれる。		00263
*	-	136	环	环	口: 11.9 受径: 11.7 器: 11.5 立高: 1.1 天: 11.9 口: 2.1	大井部内面中央は不整方向のナダ、外面1/2は回転ヘテケズフ、口縁部内面は回転ナダ調整。口縁端部に深い段窓。	色調: 黑灰色。斯・灰白色。 焼成: 良好。 胎土: やや粗。白色砂粒を多く含む。	△現存1/4。	00281
*	23	137	环	环	口: 12.0 受径: 14.4 器: 14.5 立高: 1.5 天: 14.4 口: 1.5	底部内面全体に不整方向のナダ。外面は回転ヘリ切りの後、輪状に回転ヘテケズフ、他回転ナダ調整。底盤はやや深く、受部内面に一条の沈殿が見れる。	色調: 内・黒灰色、外・青灰色、断・灰白色。 焼成: 褐。	△現存1/1様。	00276
*	-	138	高身(へいし)	环	口: 12.7 受径: 器: 14.0 立高: 天: 14.1 口: 1.5	底部方にカキ口、中位に回転ヘテケズフ、他は回転ナダ調整。内面は自然軸がほぼ全體にかかるため不明。口縁部は上方方にのび、底盤は丸い。	色調: 暗・黒灰色。 焼成: 良好。 胎土: 器: 2%ほどの白色砂粒を多く含む。	△現存1/5欠損。	00274
*	-	139	环	环	口: 12.7 受径: 14.8 器: 14.0 立高: 1.4 天: 14.7 口: 1.5	底部内面はほぼ全体に不整方向のナダ。外面は回転ヘリ切り。他は回転ナダ調整。受部内面に一条の沈殿が見れる。立ち上がりはほぼ直線的。	色調: 暗・黒灰色。 焼成: やや不良。軟質。 胎土: やや粗。白色砂粒を多く含む。	△現存1/2は底端部はほとんど欠損。	00275
*	-	140	环	环	口: 13.2 受径: 器: 14.0 立高: 天: 12.9 口: 2.0	天井部外周は回転ヘリ切り。中位は回転ヘテケズフ、他は回転ナダ調整。口縁端部内面に、一条の弱い沈殿が見れる。天井部は比較的の平ら。	色調: 明褐色 (外面一部黒又は赤色)。 焼成: 不良焼成が認められる。 胎土: 器: 白色砂粒を多く含む。	△現存約2/3。	00269

Fig No	PL No	通物 No	種類	器種	法景 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
34	23	141	須彌壇	杯盤	口: 14.8 受径: 高: 4.3 立高: 天径: 14.0 口幅: 2.0	天井部内面は不整方向のナゲ調査、外面中央にはラタ切り、そのまわりに輪状に凹凸へラ調整。他の回転ナゲ調査。口縁端部は丸く、方に一尖の状態がめぐらる。	色調: 青灰色。 焼成: やや不良。 胎土: やや粗。白色砂粒を多く含む。約3%の白色石粉を含む。	口縁部約1/2欠損。	00266
*	-	142	*	杯身	口: 11.9 受径: 14.6 高: 4.4 立高: 1.4 天径: 口幅:	底部内面は不整方向のナゲ。外面2/3は回転ヘララスク、他の回転ナゲ調査。底部はやや深く、大きい。	色調: 菩提色、灰褐色 焼成: 硬化。 胎土: 密。1~5%の白色砂粒を含む。	残存約1/2。	00272
*	-	143	*	*	口: (12.0) 受径: (4.6) 高: (4.6) 立高: (1.6) 天径: 口幅:	(12.0)受径: (4.6) 高: (4.6)立高: (1.6) 天径: 口幅:	受部内、外面は回転ヘララスク調査。他の回転ヘララスク調査しているため不明。立ち上がりはやや長く、直立している。	色調: 明赤褐色~褐色。 焼成: 小良。軟質(酸化焰焼成)。 胎土: 密。1~3%の白色砂粒を含む。残存1/2。	00282
*	-	144	*	*	口: (2.0) 受径: (1.0) 高: (3.7) 立高: (1.3) 天径: 口幅:	(2.0)受径: (1.0) 高: (3.7)立高: (1.3) 天径: 口幅:	受部内、外面は回転ヘララスク調査。他の回転ヘララスク調査しているため不明。立ち上がりはやや長く、内傾している。受部もやや長く、水平。	色調: 青褐色。 焼成: 不良。軟質。(酸化焰焼成)。 胎土: やや粗。1~3%の白色砂粒を含む。残存1/2。	00283
*	23	145	*	*	口: 13.1 受径: 13.1 高: 5.0 立高: 1.2 天径: 口幅:	底部内面中央にはラタ切り未調査。そのまわりは輪状に回転ヘララスク。他の回転ナゲ調査。(回転ヘララスク)底部はやや尖り、不安定。	色調: 青灰色。 焼成: 小良。軟質。 胎土: やや粗。白色砂粒を含む。	口縁部約1/3欠損。	00270
*	*	146	*	高杯	口: 受径: 高: 15.0 立高: 天径: (11.0) 天径: 口幅:	环部内部中央はヨコア、外面下方にカサカサ。他の回転ナゲ調査。環部全体にしづらげ。脚部小位に段状。环部はやや深い。全体的にゆがんでいる。	色調: 菩提色。 焼成: 硬化。 胎土: 密。	环部、底部分残存2/3。	00279
*	*	147	*	*	口: (12.0) 受径: 高: 18.0 立高: 天径: 10.9 天径: 口幅:	环部表面中央に瘤目状突出。底部は回転ヘララスク調査。他の回転ナゲ調査。环部内面、周辺は部分的に自然剥がれがある。环部には环部断面的に立ち上がる。三方向に異形スカルクを有す。	色調: 灰白色。 焼成: 良好。 胎土: 密。白色砂粒を含む。	口縁部ほとんど欠損。脚~底部残存1/2。	00280

C群第21号墳 (9021)

9021

37	26	148	須彌壇	杯盤	口: 16.0 受径: 高: 立高: 天径: 13.2 口幅:	天井部と体部の窓の縁は不規則。口縁端部に窓をもつ。天井部にはカサ目を施す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 開削を含む。		
*	*	149	*	*	口: 15.2 受径: 高: 立高: 天径: 10.8 口幅:	天井部と体部の窓は不規則。口縁端部は丸く上げる。天井部の2/3に回転ヘララスク調査。	色調: 黑褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英+長石+雲母を含む。	天井部欠損。	
*	-	150	*	*	口: 10.8 受径: 高: 立高: 天径: 9.0 口幅:	天井部と体部の窓に凹く窓へ接をなす。口縁端部はヘタによる面取り成形。天井部の2/3に回転ヘララスク調査。	色調: 黑褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英+長石+雲母を含む。	約1/2残存。	
*	26	151	*	*	口: 14.6 受径: 10.6 高: 3.6 立高: 0.2 天径: 口幅:	口縁端部は丸味を帯び、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。扁平な宝珠形のつまみを有す。天井部には扁平の宝珠。	色調: 青褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英+長石+雲母を含む。	約1/4残存。	
*	*	152	*	*	口: 15.2 受径: 12.6 高: 2.3 立高: 0.4 天径: 口幅:	口縁部は、下外方に下がり、内傾するかえりを有する。扁平な宝珠形のつまみを有す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英+長石+雲母を含む。	完形。	ヘラ記号有。

Fig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
37	26	153	指環	平盤	口: 13.8 受径: 11.6 唇: 立高: 0.2 天底: 1.1 口盤:	口被面は下外方に下がり、底部は丸く、内傾するかえりを有す。	色調: 黄灰色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	天井部欠損。	
*	*	154	指環	平盤	口: 13.6 受径: 13.4 唇: 4.5 立高: 1.3 天底: 1.1 口盤:	立ち上がりに近く、やや内傾する。底部は丸く仕上げる。底部は平底。底部の2/3は回転ヘラケツリ調整。	色調: 灰褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	約3/4残存。	
*	*	155	指環	平盤	口: 13.8 受径: 唇: 4.0 立高: 天底: 1.1 口盤:	体窓は直線的に立ち上がる。底部は平らで、ナギを施す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	約5/6残存。	
*	*	156	指環	平盤	口: 13.8 受径: 唇: 2.9 立高: 天底: 1.1 口盤:	底部は内側削除して立ち上がる。底部は平らで、ナギを施す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	約1/2残存。	
*	*	157	指環	平盤	口: 13.2 受径: 唇: 3.4 立高: 天底: 1.1 口盤:	底部は直線的に立ち上がる。底部は平らで、ヘラ切り木調整。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	約5/6残存。	
*	*	158	指環	平盤	口: 13.0 受径: 唇: 3.7 立高: 天底: 1.1 口盤:	体窓は直線的に立ち上がる。底部は平らで、ナギを施す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。		
*	*	159	指環	平盤	口: 13.6 受径: 唇: 4.3 立高: 天底: 1.1 口盤:	体窓は直線的に立ち上がる。底部は平らで、ハの字形の高台を付す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	ヘラ記号有。  完形。	
*	*	160	指環	高环	口: 13.4 受径: 唇: 4.5 立高: 天底: 0.6 天底: 口盤:	体窓は直線的に立ち上がる。底部は平らで、ハの字形の高台を付す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	ヘラ記号有。  完形。	
39	*	161	指環	高环	口: 14.6 受径: 13.8 唇: 立高: 1.2 天底: 0.6 口盤:	立ち上がりは長く、内傾する。底部にはカギ目を施す。長脚で、長方形のスカシを施す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	天井部欠損。	
*	-	164	指環	高环	口: 12.6 受径: 唇: 立高: 天底: 口盤:	口被面は直線的に立ち上がり、底部との境には接をなす。脚底は鉛状を呈す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	脚部欠損。	
*	-	165	指環	高环	口: 13.2 受径: 11.2 唇: 5.0 立高: 0.8 天底: 口盤:	立ち上がりはやや短く、内傾し、受部底部は丸い。長脚二段造して、長方形の造しを施す。小位には二重の凹縦を有す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	脚部欠損。	
*	-	166	指環	高环	口: 8.8 受径: 唇: 7.5 立高: 天底: 口盤:	口被面は直線的に立ち上がり、底部との境には接をなす。脚底はラバ形を呈す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	ヘラ記号有。  完形。	
*	*	167	指環	高环	口: 7.6 受径: 唇: 13.5 立高: 天底: 口盤:	底部は細く、口被面には縦やかに内反し、底部に至る。体窓は扁球形をなし、底は平ら。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・雲母を含む。	完形。	

Fig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法 番 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備 考	登録 No
39	27	168	清酒器	平瓶	口: 8.6 受径: 器: 16.8 位高: 天: 1. 天底: 二: 二脚:	口部は直線的に立ち上がり、底部は張り出しがある。体部は上方にカキ目を施す。	色調: 深黒色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・黄母を含む。	ほぼ完形。	
*	*	169	清酒器	長颈瓶	口: 9.6 受径: 器: 23.0 位高: 底: 10.6 天底: 口: 口盤:	基部は細く、口部は直線的に外反し、嘴部に至る。体部は球形をなし、底部には八の字形の高台を付す。	色調: 深黒色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・黄母を含む。		
*	*	170	土器	杯	口: 10.4 受径: 器: 3.9 位高: 天: 1. 天底: 口: 口盤:	丸底で、底部はヘラケズリを施す。	色調: 黄褐色。 焼成: 良好。 胎土: 石英・長石・黄母を含む。	ほぼ完形。	

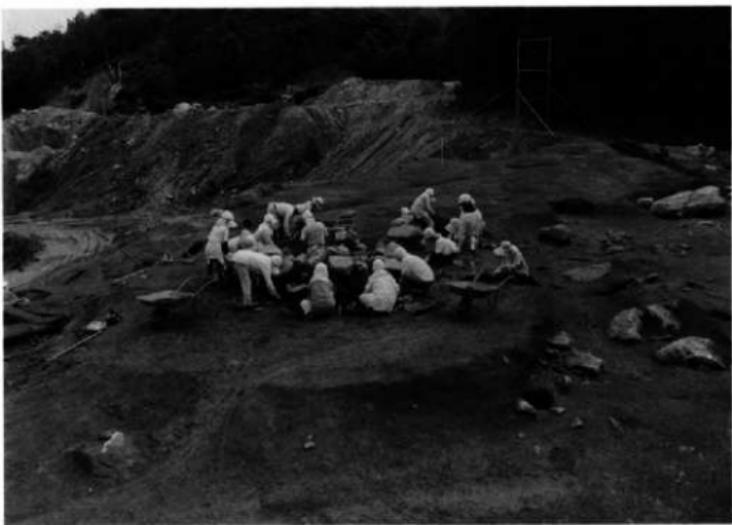
E群第1号墳 (8972)

8972

47	33	171	漆木器	杯	口: 10.4 受径: 器: 3.6 位高: 天: 5.7 口: 0.8	天井部前面中央は回転ナガ型、コロナデ。外面は回転ナガ切り後、軽くナガ調整。底は回転ナガ調整。天井部にはばらら。焼きひずみのため、口縁部はゆがんでいる。	色調: 暗灰色。 焼成: やや堅緻、わずかに自然感がかかる。 胎土: 白色砂粒を含む。残存4/5。	ヘラ記号有。 △	00003
*	-	172	*	*	口: 9.0 受径: 器: 3.8 位高: 天: 12.2 口: 1.0	天井部内部中央はコロナデ。外周2/3はヘラ切り。天井部は丸く、口縁部はやや内傾する。底は回転ナガ調整。	色調: 内・褐色、外・赤 ヘラ記号有。 焼成: やや堅緻。 胎土: 密	00010	
*	33	173	*	*	口: 12.0 受径: 器: 3.8 位高: 天: 12.9 口: 1.4	天井部外面は回転ヘラ切り、中央はヘラ調整。底は回転ナガ調整。天井部はやや高く、口縁部はやや外傾する。	色調: 灰色。 焼成: 坚緻。 胎土: 密 正色砂粒をわずかに含む。	ヘラ記号有。 十	00008
*	*	174	*	*	口: 12.7 受径: 器: 4.2 位高: 天: 12.6 口: 1.1	天井部前面中央はコロナデ。外面は回転ヘラ切り、底は回転ナガ調整。口縁部は丸味を帯び、底部内部は球形をなし、わずかに外反する。	色調: 暗色～薄赤褐色がかかる。 焼成: やや堅緻。 胎土: 密、白色砂粒を含む。		00003
*	*	175	*	杯	口: 8.0 受径: 10.7 器: 3.1 位高: 0.9 天: 1. 天底: 口: 口盤:	底部内部はコロナデ、外周は回転ヘラ切り、底は回転ナガ調整。底部はやや平ら。立ち上がりがやや孤立する。	色調: 暗灰～灰褐色がかかる。 焼成: 坚緻。 胎土: 密、1～2%の砂粒を含む。	口縁部1/5欠損。	00002
*	*	176	*	*	口: 10.1 受径: 12.7 器: 4.0 位高: 6.9 天: 1. 天底: 口: 口盤:	底部内部は放射状のナデ、外周は回転ヘラ切り後、輕いナガ調整。底は回転ナガ调整。底部は深い。立ち上がりが短く、内傾する。	色調: 灰色。 焼成: 坚緻。 胎土: 術、白色砂粒を含む。		00001
*	*	177	高音器	环	口: (9.7) 受径: 器: 8.4 位高: 底: 0.5 天底: 内底: 0.3 口盤:	底部内側より、外周に縦溝までは回転ナガ調整。他の表面剥落のため不整。高台にヘラケズリがあるが、磨耗のため不明瞭。	色調: 明褐色。 焼成: 不良、軟質、無化、崩壊状。 胎土: 密、白色砂粒を含む。	残存2/3。 ～5月9日実測。	00005
48	*	178	清酒器	长颈瓶	口: (79) 受径: 15.5 器: 11.7 位高: 底: 3.8 天底: 内底: 10.9 口盤:	底部外側から体部外側下方向まで、手持ちへフケズリ剥離。底は回転ナガ調整。口縁部中位にカギ孔に凹み有。口縁部はやや垂直に上がり、端部にわざかに外反する。	色調: 灰色。 焼成: やや堅緻。 胎土: 密、1%などの白色砂粒を多く含む。	△	00012
*	*	179	*	平瓶	口: (79) 受径: 15.5 器: 11.7 位高: 底: 3.8 天底: 内底: 10.7 口盤:	口縁部外側は回転ナガ型。体部中位から下方は回転ヘラケズリ調整。底部はやや凹曲をなすが、ほぼ平ら。焼きひずみが著しい。	色調: 明褐色。 焼成: 不良、軟質、無化。 胎土: 密。	口縁部はとんでも欠損、体部1/2欠損。	00016

Fig No	PL No	遺物 No	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	その他	備考	登録 No
45	33	180	酒器	平底	口：受徑：11.6 体高：9.2 外縁：19.5 口縁：	底部内面はナデ、外面はカキ目成形後、ナデ調整。体部下半はカキ目調整。他ナデ調整。 底部は平らで、安定する。底部と体部上位中央に円板貼付。体部中位に接合部有。	色調：灰色。 焼成：堅版。 胎土：密、1~2%の白色砂粒を含む。	ロ基部欠損。	00007
〃	〃	181	酒器	平底	口：10.0 受徑： 高：11.3 外高： 底高：2.3 天底： 体径：16.2 口縁：	内面より口縁部外周まで回転ナデ。体部中位にカキ目調整。肩部は程よいナデ。底部より体部下方は回転ヘラケズリ調整。底部は丸く、不安定。ショーブさに欠ける。	色調：灰～暗灰色。 焼成：堅版。 胎土：密、白色砂粒を含む。	ヘリ型切削。 X	00013
〃	〃	182	酒器	平底	口：11.5 受徑： 高：16.5 外高： 底高：18.3 外径： 口縁：1.1	体部中位はカキ目（底部はカキ目後軽いナデ）。その下より底部にかけては回転ヘラケズリ調整。他の他回転ナデ調整。ロ基部端は丸い。底盤は丸く、不安定。ショーブさに欠ける。	色調：灰色。 焼成：やや不良、軟質。 胎土：密、白色砂粒を含む。	ロ端1/3欠損。	00014
51	—	206	环	环	口：(10.0)受徑： 高：2.3 外高： 天底：8.8 口縁：1.1	天井部内面中央に不整方向のコナデ。外直2/3は円形ヘラ切り他は回転ナデ調整。天井部はほぼ平ら。ロ底部はほぼ垂直に下る。	色調：暗赤褐色。 焼成：やや堅版。 胎土：密、白色砂粒を含む。	残存1/12。	00011
〃	31	207	环	环	口：10.4 受徑： 高：2.3 外高： 天底：10.1 口縁：1.0	天井部内面は环ナデ。外面は回転ヘラ切り後、部分的に手押しヘラケズリ。その後、軽くナデ調整。前に回転ナデ調整。全体的に丸味を帯び、ロ底部はわずかに内傾する。	色調：内・暗赤褐色。 外・褐色。 焼成：堅版。 胎土：密、白色砂粒を含む。	ヘリ型切削。 X	00004
〃	〃	208	环	环	口：10.6 受徑：12.2 高：3.7 外高：4.6 天底：11.1 口縁：1.1	底部内面はいねいなナデ。外面は回転ヘラ切り。他は回転ナデ調整。底部は厚い。立ち上がりは程よく、内傾する。	色調：明褐色。 焼成：不良、軟質、脱化焰燒成。 胎土：密、白色砂粒を含む。	残存2/3。 ヘリ型切削。	00000
〃	〃	209	长颈瓶	长颈瓶	口：(7.0)受徑： 高：(3.0)立高： 体径：16.0 外径： 底高：10.6 口縁：	口部外面は回転ナデ。体部外面は回転カキ目。底部はナデ調整。体部は張り出しながら下り、最大径は上方に求められる。底部は平ら。	色調：灰～墨灰色（要分明に自然離がかかる）。 焼成：堅版。 胎土：密、大粒の白色石粒を含む。	ロ基部欠損。	00015
51	34	210	提梁	提梁	口：受徑： 高：30.0 外高： 底高：15.3 天底： 体径：21.3 口縁：	斜面内面はタキナの後、回転カキ目(10~32条)。片側に回転ヘラケズリの後、接合後、カキ目調整。平坦な面には指圧痕有。弓鉤形の把手の痕跡有。	色調：灰～暗灰色。 焼成：堅版。 胎土：密、白色砂粒を含む。	ヘリ型切削。 X	00017

図 版



C群第12号堆積調査作業風景（北東から）



(1) 相原古墳群C・E群遠景（南から）



(2) 相原古墳群C群近景（南から）



(1)



(2)

- (1) 相原古墳群・今宿平野を臨む
(南から)
- (2) C群第6号・22号墳調査前現況
(南から)
- (3) C群第9号墳調査前現況 (南から)
- (4) C群第11号墳調査前現況 (南から)
- (5) C群第12号墳調査前現況 (南から)
- (6) C群第21号墳調査前現況 (南から)



(3)



(4)



(5)



(6)



(1) C群第6号・22号墳墳丘遺存状況（南から）



(2) C群第6号墳墳丘遺存状況（南から）



(3) C群第6号墳石室遺存状況（北から）



(1) C群第6号填石室及び
閉塞状況（北から）



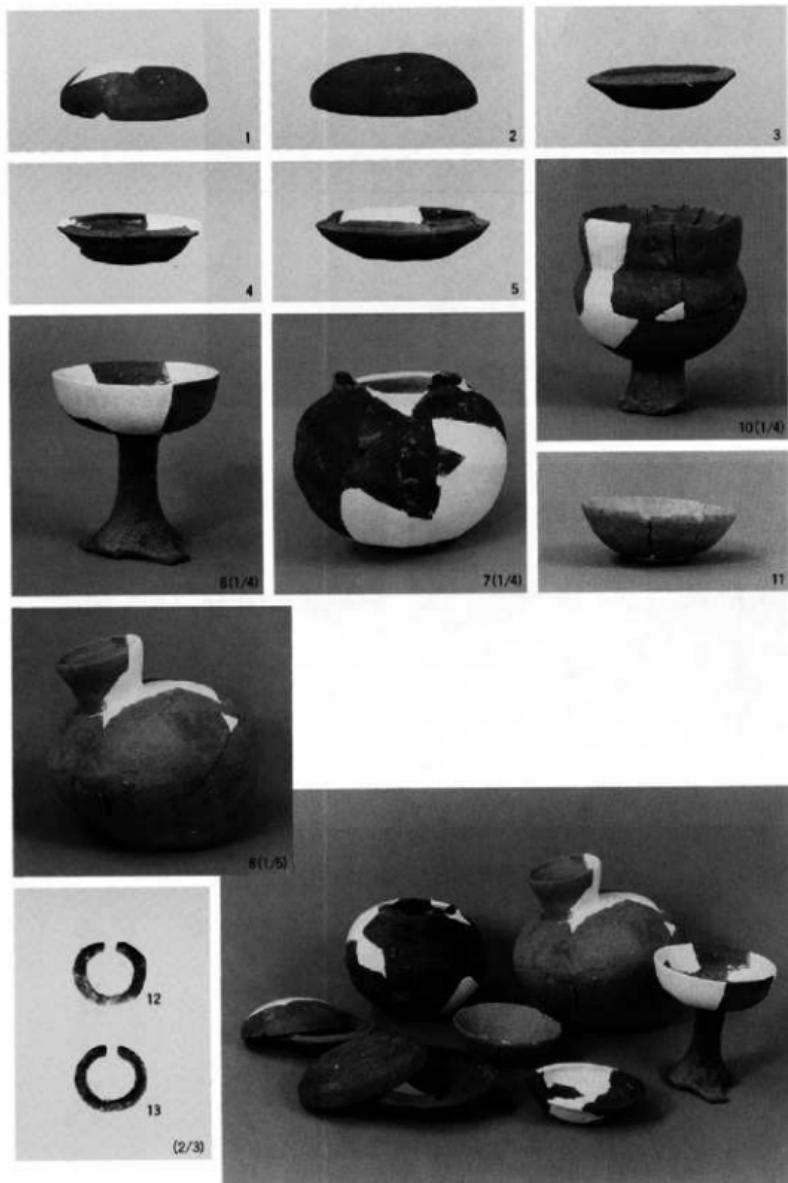
(2) C群第6号填石道部構築
状況（南から）



(3) C群第6号填石室内耳環出土状況（東から）



(4) C群第6号填石道部須恵器出土状況（東から）



C群第6号出土遺物（1~8・10~13・集合写真）



(1) C群第8号・9号埴埴丘遺存状況(南西から)



(2) C群第8号埴石室及び閉塞状況(南西から)



(3) C群第8号埴石室完掘状況(北から)



(4) C群第8号埴石室及び地山成形状況(南西から)



(1) C群第8号墳閉塗状況(北から)



(2) C群第8号墳石室墓塙状況(北から)



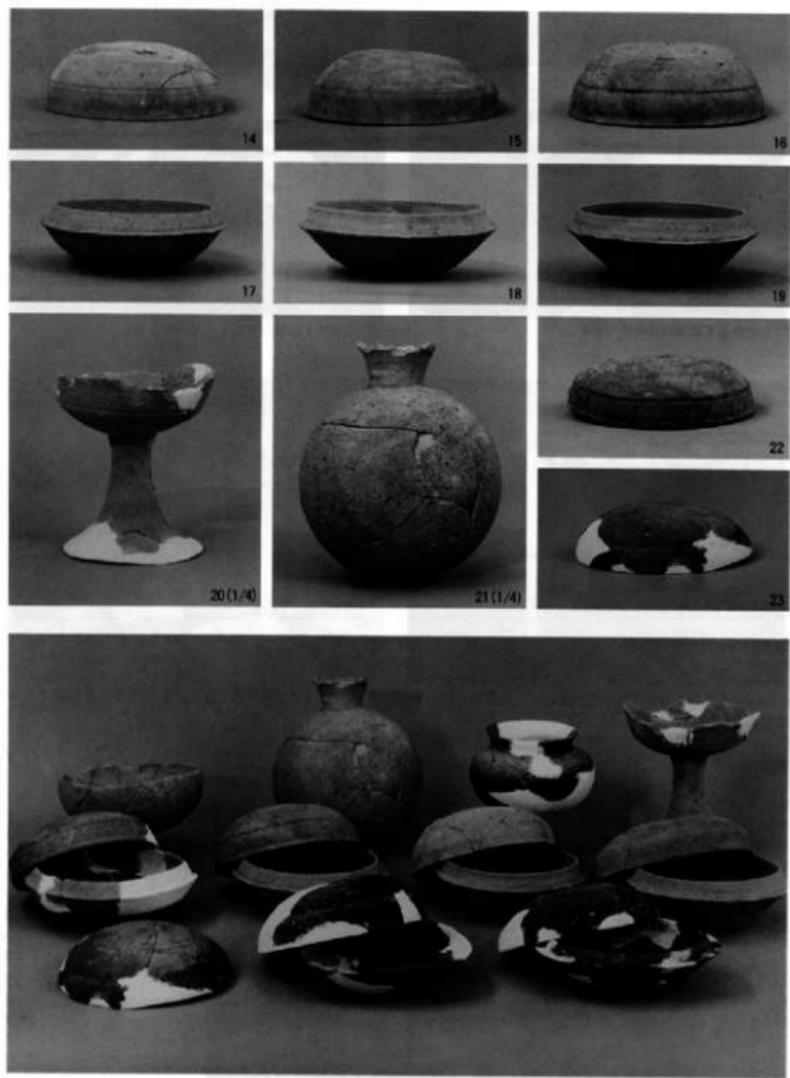
(3) C群第8号墳地山成形状況(西から)



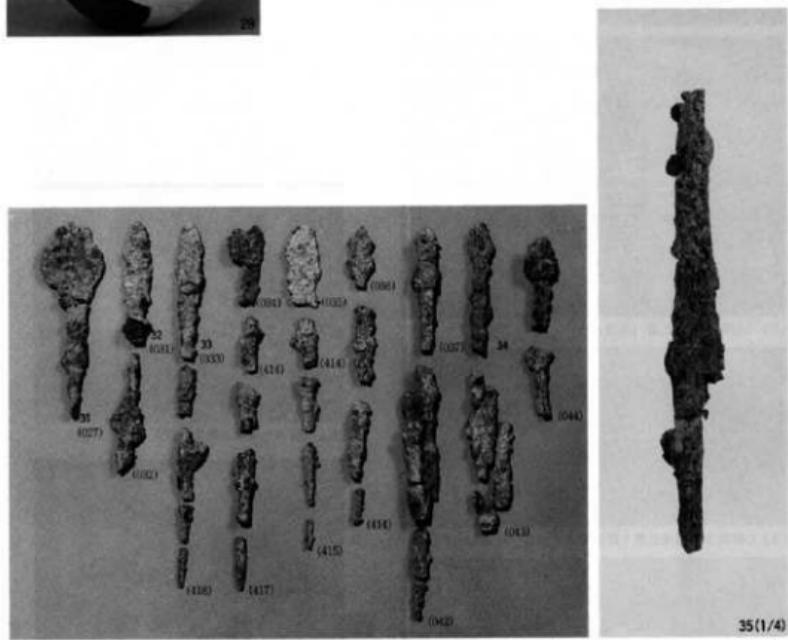
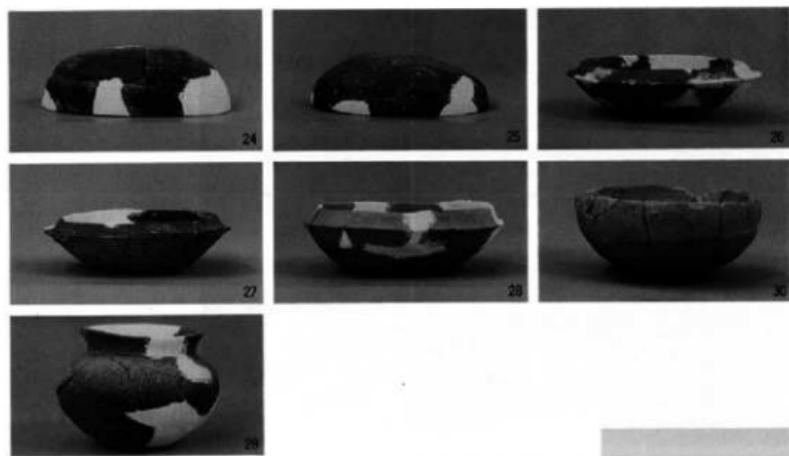
(4) C群第8号墳石室内北東隅鉄鎌・刀子出土状況(南西から)



(5) C群第8号墳石室完描状況(南から)



C群第8号墳出土遺物（14～23・集合写真）



C群第8号填出土遗物 (24~30・35・00027~00044)



(1) C群第8号・9号埴塚
遺存状況(南東から)



(2) C群第9号埴石室(南西から)



(3) C群第9号埴塚丘第1区遺物出土状況(南西から)



(4) C群第9号埴石室床面敷石遺存状況(北から)



(5) C群第9号埴石室完掘状況(北東から)



(6) C群第9号埴塚道部構築状況(西から)



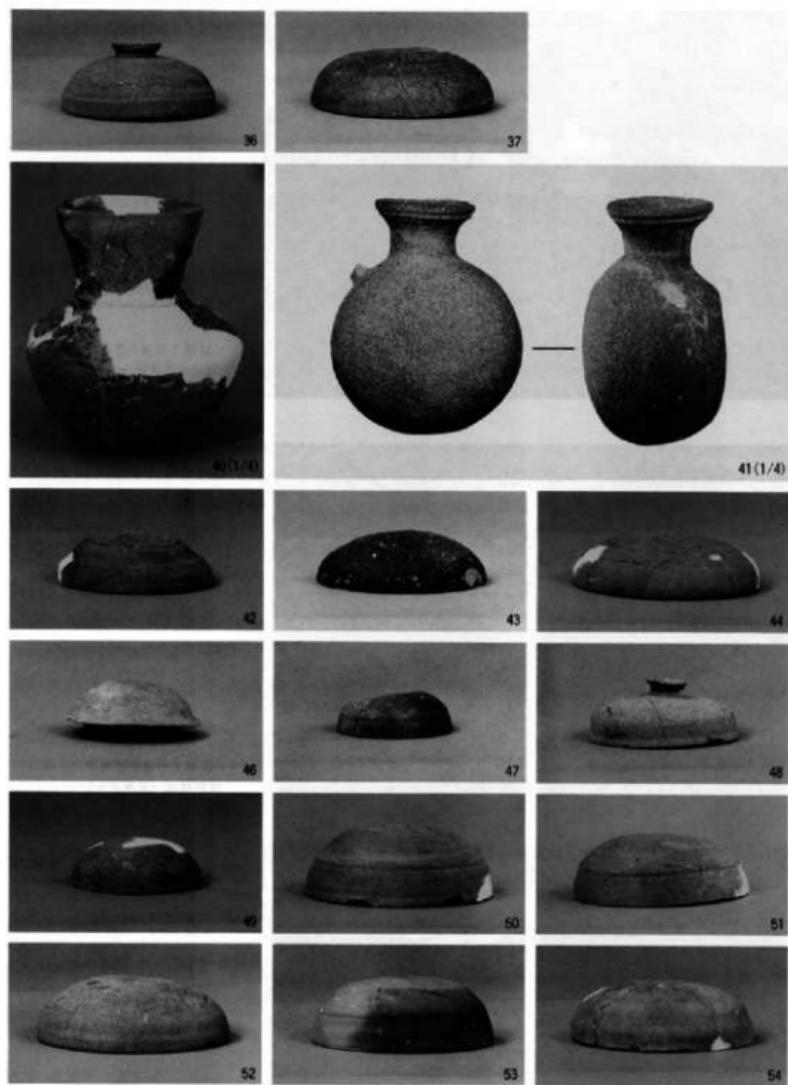
(1) C群第9号埴石室墓塚及び前庭部
地山成形状況・埴丘祭祀状況
(南西から)



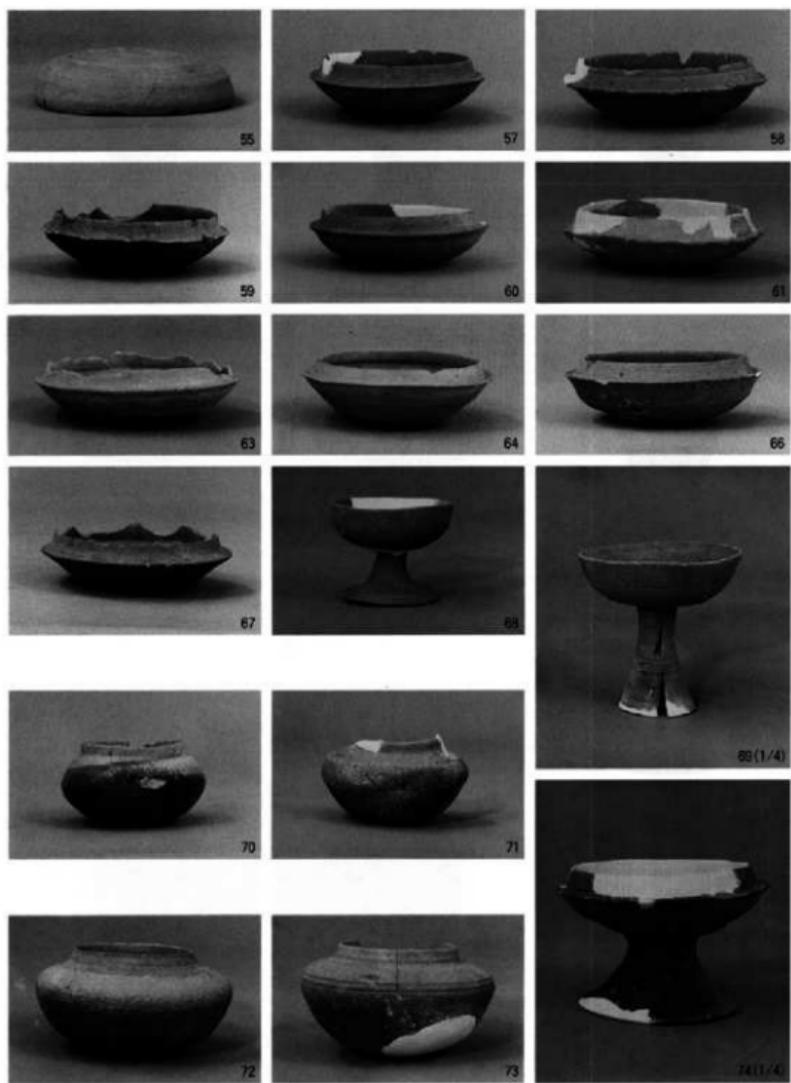
(2) C群第9号埴石室墓塚及び地山
成形状況（北東から）



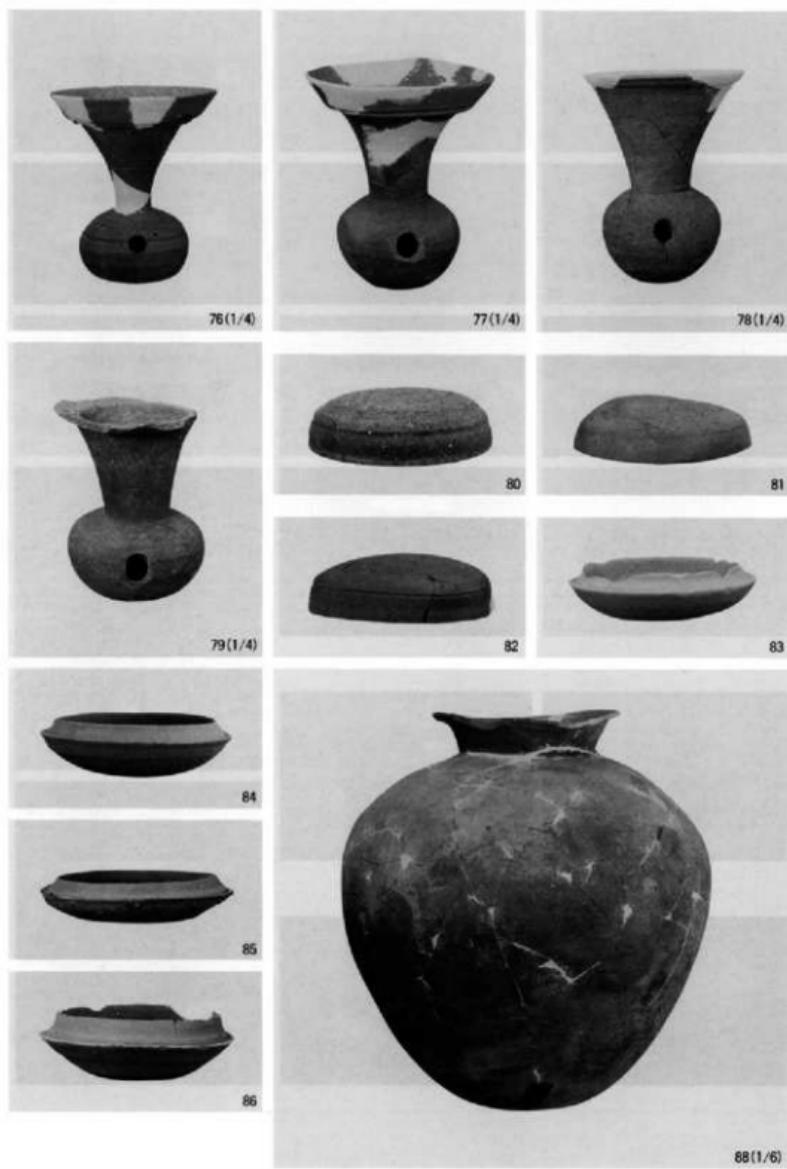
(3) C群第9号埴石室墓塚及び地山
成形状況（北西から）



C群第9号墙出土遗物 (36~54)



C群第9号出土遺物 (55・57~61・63・64・66~74)



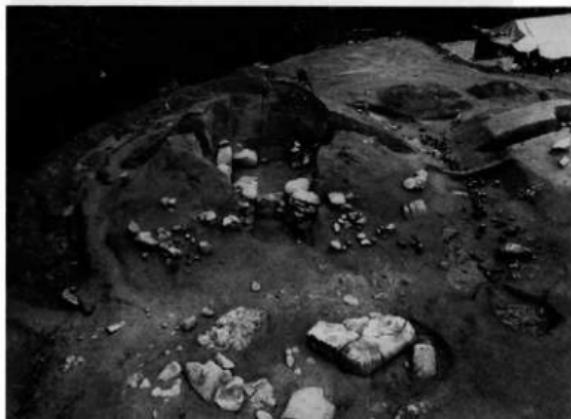
C群第9号墳出土遺物 (76~86・88)



C群第9号墳出土遺物 (89・集合写真)



(1) C群第11号・12号墳墳丘遺存状況（南南西から）



(2) C群第11号墳墳丘及び周溝遺存状況（南から）



(3) C群第11号墳石室遺存状況（南から）



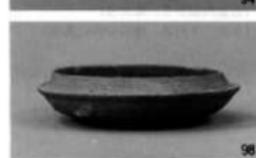
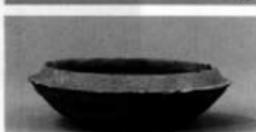
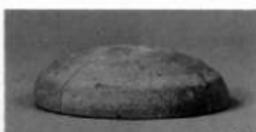
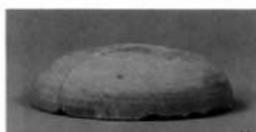
(1) C群第11号墳石室内部開塞状況
(石室内部から、北から)
(手前の大石は、地山中の花崗岩)



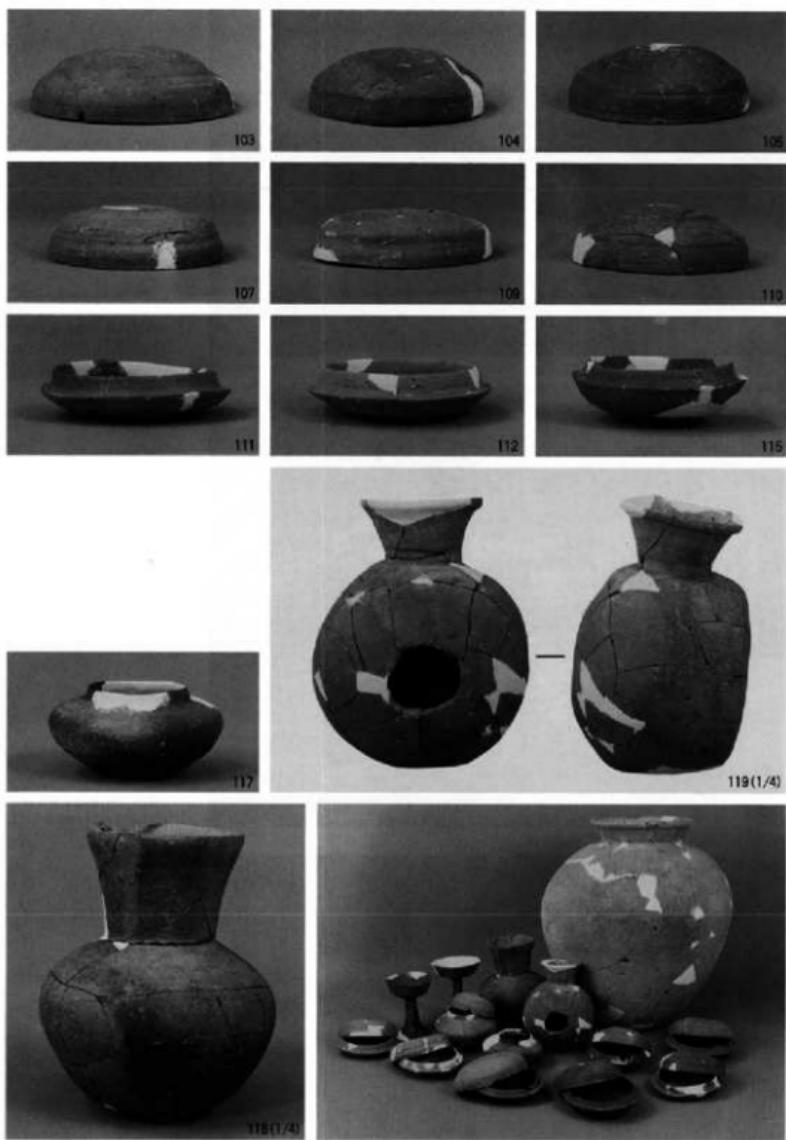
(2) C群第11号墳埴丘除去後の石室遺存
状況及び石室墓塁 (北東から)



(3) C群第11号墳石室遺存状況及び地山
成形・墓塁遺存状況 (南から)



C群第11号填出土遺物 (90~94・96~98・100~102)



C群第11号墳出土遺物（103～105・107・109・110～112・115・117～119・集合写真）



(1) C群第12号填堆丘遺存状況
(南西から)



(2) C群第12号填石室及び床面
散石遺存状況 (南東から)



(3) C群第12号填石室
土層堆積状況 (南西から)



(1) C群第12号墳石室通道部及び石室構築状況（南西から）



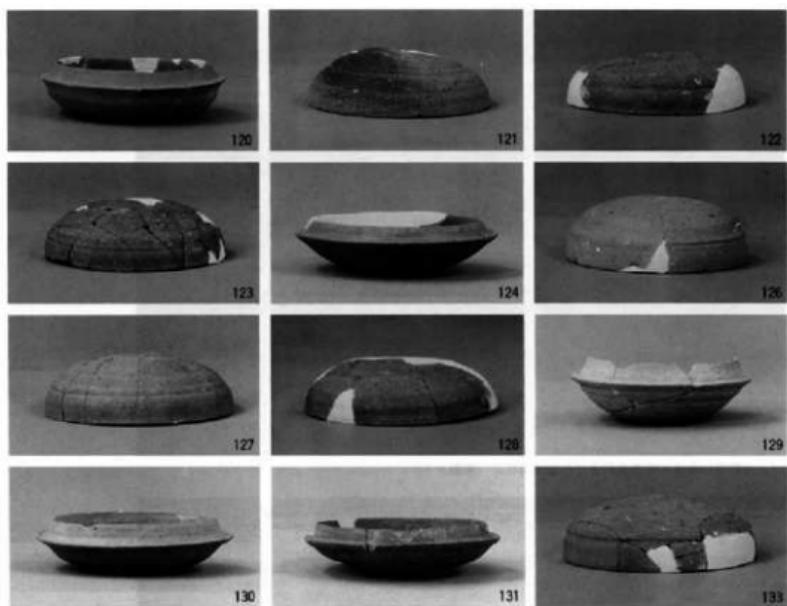
(2) C群第12号墳石室及び地山成形状況（南西から）



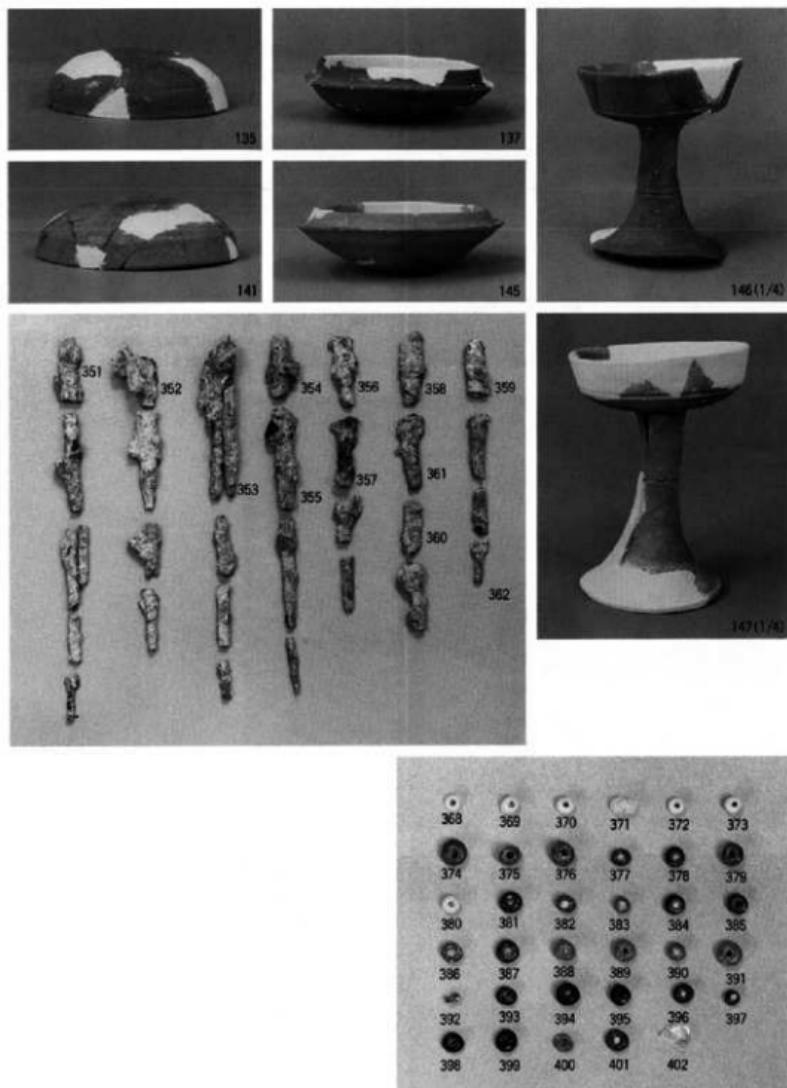
(3) C群第12号墳第2区埴丘下遺物出土状況（北西から）



(4) C群第12号墳第1区埴丘下遺物出土状況（南西から）



C群第12号墳出土遺物（120～124・126～131・133・134・集合写真）



C群第12号出土遗物 (135·137·141·145~147·00351~00362·00368~00402)



(1) C群第21号墳墳丘及び石室遺存
状況 (南から)



(2) C群第21号墳石室遺存状況
(北から)



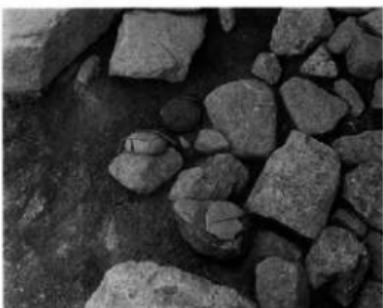
(3) C群第21号墳石室遺存状況
(西から)



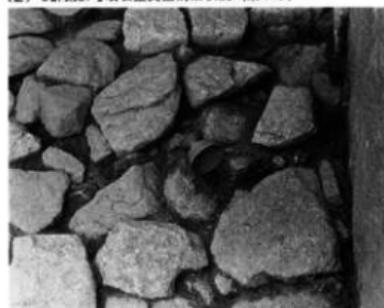
(1) C群第21号墳石室及び床面遺存状況（北東から）



(2) C群第21号墳石室奥壁構築状況（東から）



(3) C群第21号墳石室内遺物出土状況（南東から）



(4) C群第21号墳石室内遺物出土状況（南西から）



(5) C群第21号墳石室南西隅遺物出土状況（南東から）



C群第21号填出土遗物 (148・149・151~160・163・166・167)



161



162



欠番1



欠番2



168(1/4)



170



169(1/4)



C群第21号填出土遺物 (168~170・集合写真)



(1) C群第11・12・22号埴石室及び石室
遺存状況（南西から）



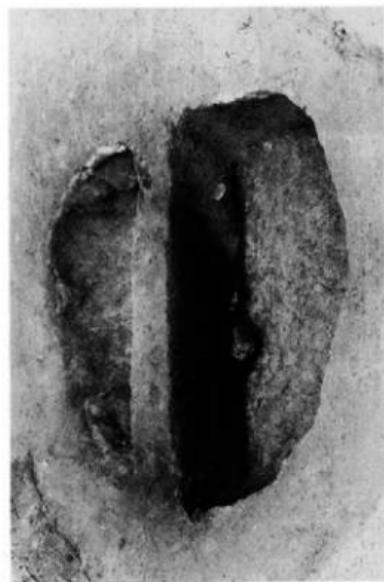
(2) C群第22号埴石室及び埴丘遺存状況
(南東から)



(3) C群第22号埴石室及び地
山成形状況（北西から）



(4) C群第22号埴戸門掩石及
び石室床面遺存状況
(東から)





(1) E群第1号墳調査前現況
(西北西から)



(2) E群第1号墳現状
(西から)



(3) E群第1号墳土塁断面
(西から)



(1) E群第1号埴地山成形状況（西から）



(2) E群第1号埴地部斜面状況（北西から）



(3) E群第1号埴石室奥壁構築状況（西から）



(4) E群第1号埴地道右侧壁構築状況（北西から）



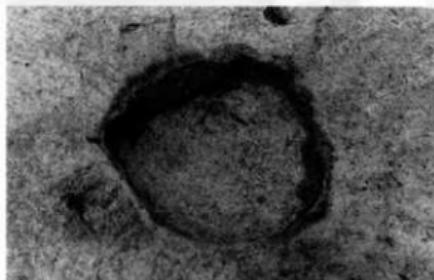
(5) E群第1号埴石室内遺物出土状況（東から）



(1) E群第1号墳 chamber left side wall condition (from the south)



(2) E群第1号墳 chamber artifacts found condition (from the north)



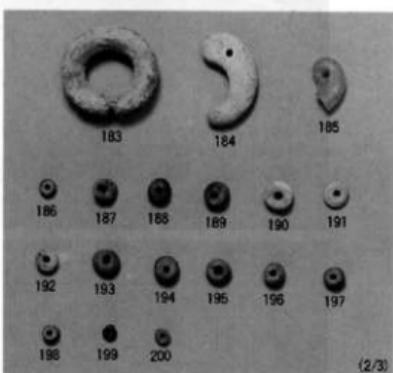
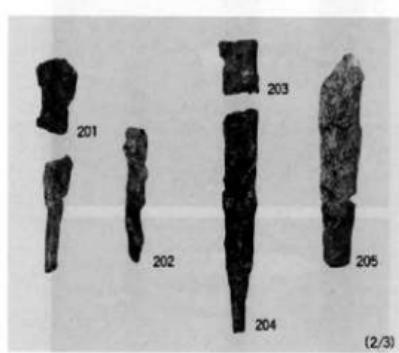
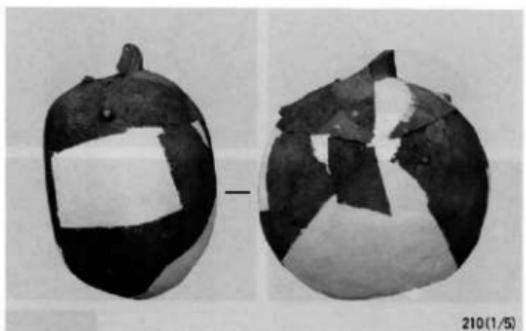
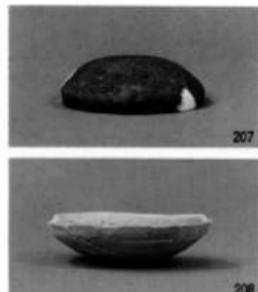
(3) E群第1号墳 chamber floor (from the west)



(4) E群第2号墳 chamber floor (from the west)



E群第1号墳出土遺物 (171・173~182)



E群第1号出土遺物 (183~210・集合写真)

相原古墳群 2

・C群第1次・2次、E群第1次調査の報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第351集

1993年3月31日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 福博綜合印刷株式会社

福岡市博多区堅粕3丁目16-36

